

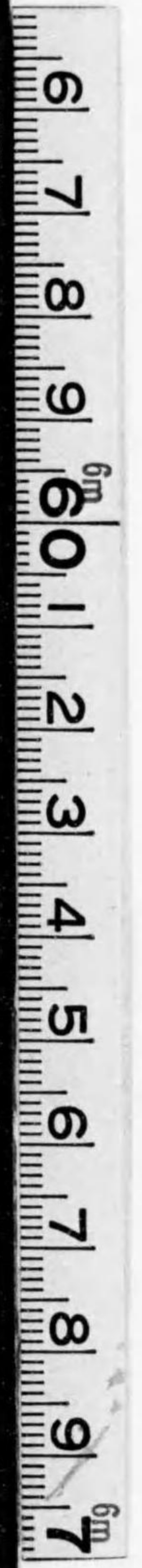
188.51

188.51-Ka47ウ



1200500728094

47



始





188.51  
K447

高野山大學長 金山 穆 韶 著

真言密教の教義



高野山大學出版部藏



## 小 序

弘法大師は十八歳にして大學に入り、外典を研鑽せられしも、人生の究竟の歸趣は宗教的信念を體得するにあることを自覺せられ、大和岩淵寺の勤操大徳より虚空藏求聞持の祕法を授かり、阿波の大龍の嶽、土佐の室戸の崎等、人烟絶えたる勝地に於てその法を修し、虚空藏菩薩の内證三摩地を體得して如來の威神力を親しく體驗し、益々その信念の向上進修につくし、如來の眞身に生きんとして出家し給うたのであつた。

後、東大寺の大佛の尊前に詣で、無上甚深の妙法を得んことを祈請せられたが、精誠早く佛心に通じ、如來の靈告に依り、大日經を久米寺の塔中より感得し給うた。大師は已に虚空藏菩薩の三摩地を體得して全身全靈佛光に浴しながら、更に無上の法門を東大寺の毘盧遮那佛に祈請せられしは何故であらうか。ことに東大寺の毘盧遮那佛は、釋迦牟尼如來の自證の境を開説せる根本法輪たる華嚴經の教主である。かゝる最尊無上の如來を瞻仰し乍ら、更に無上甚深の法門を得んことを願求せられたるは、これ釋尊所説の法門を能詮として、更に釋尊をも超え、その教説をも超えたる佛道の最究竟の本體を體得し、その眞身に自ら生きんとする深き要求より來るものである。即ち印度、支那、日本の佛教徒の未だかつて體せざる、深奥なる道體に生きんとの自己心靈の必然性より來るものであつた。印



度的なるもの、支那的なるもの、所謂應身をも超え、報身をも超え、諸佛の本地たる法身大日如來を體せんとの深奥なる要求に基けるものであつた。大師は當代の佛教の如何なる點に満足せられなかつたかといふに、一般佛教は法報應の三身を開説し、しかもその最究竟の道體たる法身佛をば無我無相無神論的理なりと説き、この無相法身より顯現する報身佛、應身佛を明かすも、この報應身は無相の理より顯はれたるものなれば、衆生化益の因縁盡きなば、また無相の空理に歸没し去ること、あたかも空中に現せし明星もつひに遙空に没し去るが如く、報應身も無相の空理に歸する無常の身にして永遠眞實の佛身でない。そこに久遠眞實者を求めて止まざる大師の深き心靈の要求を充し得ざるものがあつたのである。當代の佛教に依れば求聞持法中感見せし虚空藏菩薩も、現に瞻仰し奉る東大寺の毘盧遮那佛も空裡の幻影にして、すべて空を本とし空に歸没し給ふとなすその教説に満足せられなかつたのであつた。大師は日月星辰燦然と空中にかゝやくが如く、法報應の三身永遠無窮にその靈體靈用を顯現しつゝある靈界の眞實相を體し、常住眞實の佛身に生き、その靈用を永遠に開顯せんことを欣求し給うたのであつた。かくて久米寺の塔中より法身大日如來の説き給ひたる大日經を感得せられたるは二十二歳の時であつた。爾來その經の本體たる大日如來の本果の現證に專念せられ、なほ大日經の本精神を親しく明師より傳へんとして入唐せられたるは、延暦二十三年即ち大師の三十一歳のときであつた。大師はその翌年長安の青龍寺に於て六月七月八月に互り、眞言祕密の最究竟の大法たる灌

頂壇に登り、法身大日如來の本果に住することを自ら自覺すると共に、本師惠果和尚も親しく證せられたのであつた。しかして大師は法身大日如來の廣大無限の大威神力を體し、法身大日如來の眞身に自ら生き、大日如來の密號たる遍照金剛を自稱せらるゝに至つた。即ち弘法大師は法身大日如來は一般佛教に説くが如く無神論的空理ではなく、永遠無窮に生き、その靈體靈用を十方法界に奮迅示現せられつゝある靈體中の靈體、大自在者中の大自在者として體驗せられたのであつた。こゝに於て大師は一般佛教に於て法身を無相空なりと説くは、これ未だ法身を體せざる因人の爲の説であつて、法身の自體は空にあらず無にあらず、無神論的理にあらず、法身如來は實在中の眞實在にして、一切世界に不壞金剛の眞實體は、法身如來の自證大覺の體のみなることを身を以て現證せられたのであつた。即ち大師は顯密二教の教旨を身を以て體驗せられたのであつた。佛教に明かす見佛の道程は、入道の初め對立あるも、遂に生佛一體の境に入り、さらに一體の相をも忘るゝところに不壞金剛の如來の眞身を體するに至る道を明かすものである。即ち初めは第六識にて應身を見、第八識にて報身を見、遂にその信念純化され、信するものなくして信する無信の信に徹するところに無相法身を證見し、こゝに而二の隔執たる根本無明を斷除し、如來の眞身たる法身の聲を聞き、光を見、法身と一體となり、法身と共に永遠無窮に生き得るに至るのである。大師は如實の行と白淨の信念の力に依り、如來の眞身たる法身を體得し、法身と共に靈體靈用を十方法界に示現せられつゝあるのである。大師の入定



留身して靈用を顯現されつゝあるは、かゝる靈界の眞實相を示されつゝあるのである。即ち大師は微細定力を以て一切衆生を攝取されつゝあると共に、天壤無窮の國體をば、不壞金剛の如來の身を以て擁護せられつゝあるのである。

余の青年の頃、クリスト教徒と佛教徒との論争猛烈なるものありしが、クリスト教徒の佛教を難するや、佛教は空の教なり、死の宗教なり宇宙人生に退却的態度をとる亡國の教なりと極論せしものであつた。こは未だ大乘佛教の眞理趣を解せざる歐米の佛教學者の佛教觀に依るものであらう。しかもこれに對する佛教徒の辨妄ありしも徹底せる論議を聽くことを得なかつた。そは佛教の根本義は無神論的空理なりとの立場にては到底解し得ざる問題である。かゝる問題を徹底的に解決せんには佛教の中心觀念たる法身は常寂の理にあらず、生ける眞身にして、三世常恒に十方法界に靈體靈用を示現せられつゝある自在者たる眞理趣を開顯する弘法大師の眞言密教のみなることを知つた。また佛教をして廣く世界に宣布し眞に人類救済の宗教たらしめんには、これを歐米に宣傳して歐米人の宗教たらしむるにあるを思ふ。しかるに歐米人にして佛教を研究するものもあるも、佛教を信するもの稀なるは人格の觀念の強き歐米人に無神論的空觀爲本の佛教がその機に契當せざることが、その主因ならんか。現代及び將來に互り人類の教化を全うする宗教としては、我が眞言密教の如きは最も偉大なる宗教たるべきを信じ、從來眞言密教に於ける積極的教旨を闡明せんとして草せし拙稿數篇このたび輯録して

上梓することにした。

余は二十二歳にして高野山に登り、今年六十九歳の高齢に達し圖らずも金剛峯寺第四百四十四世の檢校法印の聖職を襲ふことを辱うし、その間の三地兩所の御加護を奉謝すると共に、一般道俗の庇護を感謝して止まざるものである。それら報恩の一端としてこの書を刊行し、道俗に頒つものである。

もしこの書によつて佛祖の教旨を宣布する一助ともならば、本懐これに過ぎたるはない。たゞこの書は多年に亘り時々草せし小文を篇せしものにして、初めより一冊の書として刊行する意圖のもとに執筆せしものにあらざるが故に、その論旨及び引文の重複せるものあり、また文體の等しからざるものあり、これらは凡て訂正せざるべからざるものなれども、今はその時間の餘裕なきを以て、殆ど無訂正のまゝ上梓することゝした。讀者これを諒せられよ。

昭和十九年一月

高野山

金山 穆 韶



# 眞言密教の教學 目次

## 小 序

一、眞言密教の起源傳來……………一

二、二教論及び寶鑰より觀たる弘法大師の根本教旨……………七

一、二 教 論……………(七)  
二、秘藏寶鑰……………(八)  
三、再び辯顯密二教論に就て……………(二二)

三、三部書を中心として觀たる大師の思想……………一三

四、密教の正意……………一六五

一、眞言密教に對する謬見を匡す……………(一六五)  
二、密教は一切佛教の歸趣なり……………(一七七)  
三、秘密の意義……………(二〇四)  
四、釋摩訶衍論……………(二〇四)  
五、大 日 經……………(二〇五)  
六、金剛頂經……………(二〇五)  
七、兩部大經の正意……………(二〇四)  
八、三部五部の秘經……………(二〇六)  
九、弘法大師の教義……………(二〇七)

目 次



五、六大體大に就て……………三二七

一、六大體大に就て……………(三二七)

二、再び六大體大に就て……………(四二六)

六、佛教に於ける個體の觀念……………四二四

七、中院流に就て……………四九一

一、高野山相傳の法流……………(四九一)

二、高野山に現はれたる事相の精神……………(四九三)

三、中院流の名稱……………(五〇一)

四、中院流の由來……………(五〇三)

五、中院流の相承……………(五〇七)

六、中院流の諸方……………(五一二)

八、西院流に就て……………五二七

九、宥快法印の教相の一斑……………五四二

一、序……………(五四二)

二、三祖の教格……………(五四四)

三、法性道範兩師の而二不説……………(五五三)

四、信日阿闍梨の而二不説……………(五五五)

十、眞言密教の教理史の一斑……………六〇一

一、佛陀曇伽耶、一行阿闍梨、弘法大師の教義……………(六〇一)

二、台密の教義……………(六二九)

三、東密諸家の教義……………(六三〇)

眞言密教の教學

金山 穆 韶



## 一 眞言密教の起原傳來

弘法大師は入唐して、眞言密教を本邦へ傳へ、その教の正宗を顯揚せんとして、幾多の書を製せられしと共に、眞言密教の起原傳來を示さんとして、付法傳を撰述し給うた。即ち大師は近くは惠果和上より本宗の起原傳來を親聽せられ、また不空、金剛智、龍猛等の諸祖の所説について考察し、更に經説に鑑み、自らの研尋體驗に基き、付法傳を製せられたるものである。しかるに此の大師の傳統の説は、現代研究の歴史的事實と、往々一致せざるものがある。しかも傳統の説は、これ列祖の口傳、教義、信仰等に依れるものなれば、傳統の説には、深奥なる理趣存す、即ち傳統の説の深趣を闡明せずんば、本宗の正意宣揚し得ざるものがある。されば傳統の説と、歴史的事實の研究と相一致せざるものありとも、歴史的事實の研究をのみ偏重せず、傳統の説を尊重し、歴史的事實の研究と共に、よく傳統の説の深旨を顯揚することに努めねばならぬ。歴史的事實は思想精神を寓せる形骸である。即ち思想精神は本にして、歴史的事實は末である。されば歴史的事實の研究に即して、眞理趣を探究し、本宗の正趣を發揮せねばならぬ。

大師の付法傳に依れば、眞言密教は釋迦牟尼如來の説にあらずして、一切如來の本地身たる法身大



日如來の自内證を演説せられたる祕教である。即ち大日如來の説法を聽受せる金剛薩埵、これを結誦して南天竺の鐵塔のうちに安置せられたるを、龍猛菩薩この鐵塔を開き、この祕經を人間に流傳せられたりとなすものなるが、この説に淺解し得ざる奥旨の存するものがあるのである。

大師は何故に迦釋牟尼如來所説の常途の佛敎に依らず、特に大日如來所説の大日經金剛頂經等を一佛敎の經王として、その敎旨を宣布せんとし給ひしや、また大師の開顯せんとする眞言密敎の正意は如何なるものなりや、大日如來所説の經を結誦せられたる金剛薩埵とは如何、またその經を安置せられたる南天の鐵塔とは如何、また龍猛菩薩を密敎の祖とせる所以等、幾多解釋を要するものがある。しかも此等幾多問題の核心は、大日如來を教主となす點に存するのである。

蓋し大師が、大日如來を教主となし給ひしについては、種多の方面より觀察せざるべからざるものもあるも、大日如來は究竟最極の尊にして、大師は入道の最初より、深く道の祕奥を欣求せられ、大日如來の本果を現證し給ひしことが應報身を越え、直に法身大日如來を教主となすに至りし主因なるべし。大師の御遺告に吾從佛法常求尋要と仰せられたるが、蓋し道を學んで深く至要を尋求せられたるは、大師學に志されし以來、終始一貫の態度なりしことを知らるゝのである。即ち初め大學に入り外典を學び給ひしが外典の淺膚なるを知り、三敎指歸を造り佛道に入り、佛道のうちにても顯敎に依らずして密敎に入り、虚空藏求聞持の法を修し、更に普門大日の本果を欣求し、大日經を感得せられ

つひに大日如來の本果を剋證し給ひたること、佛敎に歸入しながら釋尊の敎説を超え、大日如來を教主とせる眞言密敎を流傳するに至り給ひし本因なりと思はる。

大師は入佛敎の最初に勸操大德より、虚空藏求聞持の法を授り、この大法を嚴修し虚空藏菩薩の三摩地を成就せられ、眞實に生ける如來の實在と、法門の尊きことを親しく體得せられ、更に不二無上の法門を得んことを祈誓せられ、大日經をば大和の久米の塔中に感得し給うた。しかして此の經の深要を得んが爲めに入唐せんとし、以來十年入唐求法についての種多の準備と、大日經の本體たる大日如來の本果の剋證に、心根を盡して精修せられ、入唐の後、長安の青龍寺に於て、入壇灌頂の時、大日如來の本果を現證せられたることを、本師惠果和上が證明せられしと共に、自ら遍照金剛の尊位を成せられしことを體せられ、法身大日如來は大師の體性となり給うた。かくの如く大師は入道の最初より、眞言祕密の法を嚴修せられ、一門の尊の三摩地を證得せられしと共に、普門大日如來の本果を成就せられ、大師の身心、遍照金剛の佛格と化し、大日如來と一體となり給うた。即ち大師は入佛道の最初より應報身の境を超え、直に究竟法身の果を體得し給うたのである。これ大師は釋迦牟尼如來所説の普通一般の佛敎に依らず、深く佛道の要諦を尋求し、大日如來所説の大日經金剛頂經を依憑とする、眞言密敎を開演し宣揚するに至り給ひしものである。



しかれば大師の眞言密教は、釋迦牟尼如來の佛教と異なるものなりやと云ふに、しからずして、釋迦牟尼如來所説の一代佛教の、最極究竟の眞實義を開顯せられたるものである。蓋し、小乘大乘、三乘一乘顯教密教等の一大佛教に貫徹せる根本義は法 dharma の觀念である、法身 dharmakāya であるしかしてこの法身の最極究竟の果體を開顯するものは、眞言密教である。今法身の觀念は、一切佛教の根本義なることを敍し、以て眞言密教は、その法身の眞實義を開示するものなることを明かさんに、阿含經等に依れば、釋迦牟尼如來は、緣起の法の實相を覺知し、無上大菩提を成就し給ひしことを開説せらる。雜阿含經第十二に

云何緣生法。謂無明行。若佛出世。若未出世。此法常住。法住法界。彼如來自所覺知。成等正覺。爲人演說開示顯發。謂緣無明有行。乃至緣生有老死。

即ち如來は十二因縁の理を觀じて、無上覺を成じ給うたのである。さればこの緣起の法は、これ如來の師である。しかもこの法は如來の造作にもあらず、神の所造にもあらず、如來が出世して此法を現證してその實義を説き給ふも、また説き給はざるも、その法の自體は常住である。眞實智を以て、この法の實相を知見し、所謂理智一體の妙境を成せるものこれ法身である。

過去現在因果經に、釋迦牟尼如來、十二因縁の法の實相を觀じ、無上大覺を成せられたる内證の眞境を説示し

如是逆順。觀十二因縁。第三夜分。破於無明。明相出時。得智慧光。斷於習障。成一切種智。

爾時如來。心自思惟。八正聖道。是三世諸佛之所履行。趣般涅槃之路。我今已踐。智慧通達無所罣礙。于時大地。十八相動。遊霞飛塵。皆悉澄淨。天鼓自然。而發妙聲。香風徐起。柔軟清涼。雜花瑞雲。降甘露雨。園林花果。榮不待時。又雨曼陀羅花。摩訶曼陀羅花。曼殊沙花。摩訶曼殊沙花。金花銀花。琉璃等花。七寶蓮花。繞菩提樹下。滿三十六踰闍那。是時諸天。作天伎樂。散花燒香。歌頌讚歎。執天寶蓋及以幢幡。充塞虛空。供養如來。龍神八部。所設供養。亦復如是。當爾之時。一切衆生。皆悉慈悲。無瞋害想。歡喜踊躍。如見聖跡。無怖畏情。其心調柔。離憍慢意。亦無慳嫉諂誑之心。五淨居天。離喜樂根。亦皆歡悅。不能自勝。地獄苦痛。暫得休息。生大歡喜。一切畜生。相食噉者。無復惡心。餓鬼飽滿。無飢渴想。世界之中。幽冥之處。日月威光。所不能照。而皆大明。其中衆生。悉得相見。各作是言。此中云何忽有衆生。大聖法王。出興於世。以大法光。破非法暗。故令一切皆悉明朗。甘蔗先王。棄國學道。得五通仙。又行十善。得生天者。皆乘神通。到菩提樹。在虛空中。歡喜合掌。而讚歎言。於我甘蔗種族之中。能斷諸漏。成一切智。爲世間眼。甚爲奇特。一切莫不歡喜踊躍。

これ釋迦如來、菩提樹下に端座思惟、十二因縁の法の實相を觀じ、遂に無明を斷破し、明星出づる頃智慧の光を得て、煩惱の習氣を破し、一切種智を成じ、無上大菩提を現證し給ひし時、一切世界は、如來大覺の智光に照らされ、等しく大光明に依つて靈化せられたる果境を明かされたるものである。

釋迦牟尼如來は十二因縁の法を觀じて成佛し給ひしとは、これ緣起の法の無常空を觀じ、聖智見を



得て、無上菩提を成じ給ひしを云ふ。

増一阿含經卷第四十一

一時佛在舍衛國祇樹給孤獨園。爾時尊者舍利弗。清旦從靜室起至世尊所。頭面禮足在二面坐。爾時佛告舍利弗。汝今諸根清淨。顏貌與人異。汝今遊何三昧。舍利弗白佛言。唯然世尊。我恒遊空三昧。佛告舍利弗。善哉善哉。舍利弗。乃能遊於空三昧。所以然者。諸虛空三昧者最尊第一。其有比丘遊虛空三昧。計無吾我人壽命。亦不見有衆生。亦復不見諸行本來。已不見。亦不造行本。已無行。更不受有。已無受有。不復受苦樂之報。舍利弗。當知我者昔未成佛道。坐樹王下。便作是念。此衆生類。爲不剋獲何法。流轉生死不得解脫。時我復作是念。無有空三昧者。便浪流生死。不得至竟解脫。有此空三昧。但衆生未剋使衆生起想着之念。以起世間之想。便受生死之分。若得是空三昧。亦無所願。便得無願三昧。以得無願三昧。不求死此生彼。都無想念。時彼行者復有無想三昧。可得娛樂。此衆生類皆由不得三昧。故流浪生死。觀察諸法。已便得空三昧。已得空三昧。便成阿耨多羅三藐三菩提。當我爾時。以得空三昧。七日七夜觀視道樹。目未曾眴。舍利弗以此方便。知空三昧者。於諸三昧。最爲第一三昧。王三昧者空三昧是也。是故舍利弗。當求方便。辨空三昧。

此等の經文は、釋迦牟尼如來菩提樹下に於て、十二因縁の寂滅空の理趣を諦觀し給ひ、無上大菩提を成せさせ給ひしことを明かすと共に惑業苦の三道の眞寂の理趣を體することが生死解脫の妙門なるを説き、かゝる空三昧に遊ぶ、舍利弗の諸根清淨、顏容怡悅人に異なるを明す。佛本行經、過去現在因果

經、智度論等に、舍利弗未だ佛門に入らざる前に、釋迦牟尼如來の弟子の阿捨婆耆より、釋尊の教説は、一切諸法本、因縁生無主、若能解此者、則得眞實道の義を開示するものなるを聽き、悟るところあり、遂に釋尊の弟子となりしことを明す。此の偈は古來梵文にて之を傳ふ。

Ye dharmā hetuprahavā hetu n teṣā n tathāgato hyavadat |

teṣā n ca yo nirodho eva n vādi mahāramanah ||

諸法は因に依つて生ず。彼等の因を如來は實に説き給へり。而して彼等諸法には滅ありと。是の如く説くものは大沙門なり。

經に舍利弗、阿捨婆耆より如上の偈を聽き、從來學び來りしところは凡て邪見にして、如來の教説こそ正道なるを知り、目犍連と共に佛門に歸せしことを説かれたるが、其の經に遠塵離垢法眼淨を得たり、或は心大に踊躍し諸根皆悉く悅豫せり、或は我今己に甘露法を得たり、或は諸根寂定、顏容怡悅常に異なる等の文あるより觀るも、因縁生無我的教説は、如何に舍利弗、目犍連の心眼を啓悟せしものありしやを想見するに足るものがある。しかして此の諸法因縁生の理を説ける偈文をば、古來縁起法身の偈と稱す。造塔功德經に

爾時世尊説是偈言。諸法因縁生。我說此因縁。因縁盡故滅。我作如是説。善男子。如是偈義名佛法身。汝當書寫置彼塔內。何以故。一切因縁及所生法。性眞寂故。是故我說名爲法身。



即ち諸法因縁生滅の理を觀するとは、これ縁起の法の常寂滅の理を體するなり、しかしてこの常寂滅の體、これ不生不滅の法身の體なるより、この縁起生滅の理を説く偈をば、法身の偈と稱するなり。阿含經、遺教經等に法身常住の文あり、即ち增阿含經の序文に

釋師出世壽極短。肉身雖逝法身在。

增阿含第四十四に

我釋迦文佛壽命極長。所<sub>レ</sub>以然<sub>レ</sub>者。肉身雖取滅度。法身存<sub>レ</sub>此。

即ち根本佛教の教意を傳へたりと云ふ、阿含經に法身常住の文あり、しかもその法身の意義一様ならず或は如來の説經の言音を法身といひ、または戒定慧解脫解脫智見の五分法身、乃至三十七菩提分法等の經所詮の理趣を法身と稱することあるも、究竟していへば、諸法因縁生滅、常寂滅空の理を證し、その眞寂の理と一體となれる體、これ法身である。随つて dharma kāya なる法身の語義は、(法を身體とし)との有財的形容詞、即ち佛陀は、形色とか、相好とかを體とせるにあらず、空三昧に住し、煩惱を斷じ、法を體とせるものなるが故に法身と云ふ。また dharma kāya は法身なる名詞即ち法身佛なる實體的意義を存するのである。

此の如く佛陀は縁起の法を觀じ、空智を得て法の本性を體得し、常住の法身を得せられたることは、

已に根本佛教の教旨のうちに觀らるゝところなるが、この理趣の究竟深奥の體を開顯するものは眞言密教である。上述の如く佛教の根本義は法である。またその法を體得せる法身である。しかして其の法は、如來の所造にもあらず、神の創造にもあらずして、法然常住なりとは大小、顯密等の一大佛教に等しく説くところである。こゝに此の義を釋成せんがため、般若經、維摩經、法華經、涅槃經、楞伽經、華嚴等の文を抄出せんに

大品般若經無作實相品第四十三

何以故。若有諸佛。若無諸佛。是諸法相常住不異。法相法住法位。常住不謬不失故。

また實際品第八十に曰く

是性空。不常不斷。何以故。是性空無住處。亦無所從來。亦無所從去。須菩提。是名法住相。

また如化品第八十七

諸法平等。非<sub>レ</sub>聲聞作。非<sub>レ</sub>辟支佛作。非<sub>レ</sub>諸菩薩摩訶薩作。非<sub>レ</sub>諸佛作。有佛無佛諸法性。常空性空即是涅槃。

また曇無竭品第八十九

善男子。諸佛無<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>從來。去亦無<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>至。何以故。諸法如不動相。諸法如即是佛。(乃至)諸佛如諸法如。一如無<sub>レ</sub>分別。善男子是如常一無<sub>レ</sub>二無<sub>レ</sub>三

法華經方便品



知法常無性。佛種從緣起。是故說一乘。是法住法位。世間相常住。

涅槃經四相品第七に曰く

諸佛所師所謂法也。是故如來恭敬供養。以法常故諸佛亦常。

また金剛身品第五に曰く、

善男子。如來身者是常住身。不可壞身。金剛之身非雜食身。即是法身。

また四依品第八

善男子。依法者。即是如來大般涅槃一切佛法即是法性。是法性者即是如來。

また高貴德王菩薩品第二十一之一

涅槃之體非本無今有。若涅槃體本無今有者。則非無漏常住之法。有佛無佛性相常住。以諸衆生煩惱覆。故不見。涅槃。便謂爲無。菩薩以戒定慧。勤修其心。斷煩惱。已便得見之。當知涅槃是常住法非本無今有。是故爲常。

また師子吼菩薩品第二十三之一

善男子。是故我法諸經中說。若有入見十二因緣者。即是見法。見法者即是見佛。佛者即是佛性。佛性者即第一義空。第一義空名爲中道。中道者即名爲佛。佛者名爲涅槃。

また師子吼菩薩品之六

有佛無佛法界常住。善男子。若言佛性住衆生中者。善男子。常法無住。若有住處即是無常。善男子。如十二

因緣無定住處。若有住處。十二因緣不得名常。如來法身亦無住處。法界法入法陰虛空悉無住處。佛性亦爾都無住處。

また迦葉菩薩品第二十四

十二因緣。有佛無佛。性相常住。

大乘入楞伽經如來常無常品第五

復次大慧。以別義故。亦得言常。何以故。謂以現智證常法故。證智是常如來亦常。大慧。諸佛如來所證法性。法住法位。如來出世若不出世常住不易。在於一切二乘外道所得法中。非是空無。然非凡愚之所能知。大慧。夫如來者。以清淨慧。內證法性而得其名。

華嚴經菩薩雲集妙勝殿上說偈品第十之一

一切法無生。一切法無滅。若能如是解。諸佛常現前。無取亦無見。空寂無眞實。諸佛本來空。

同初發心菩薩功德品第十五

無礙寂滅觀。是則佛正法。十方世界中。一切如來所。一念悉徧至。其心無所染。

同十地品第二十二之三

諸法本性空。無有毫末相。空無有分別。同若如虛空。無有去住相。亦無有戲論。本來常清淨。

又曰く

了達於三界。但從貪心有。知十二因緣。在於一心中。如是則生死。但從心而起。心若得滅者。生死則亦盡。



## 同十地品第二十二之五

一切法空寂。先來無性相。同若如虛空。大師亦如是。得入第一義。微妙之性相。隨諸法性相。示佛大神力。一切佛行性。法及諸佛生。皆悉同無相。一切法空故。若欲得佛智。應離諸想念。有無俱通達。疾作天人師。同入法界品第三十四之十一

煩惱業覆者。一切不能知甚深佛境界。著諸陰入界。及起吾我見。心想見顛倒。不知佛境法。清淨離虛妄。如來深境界。依住生死者。皆悉不能知。出生如來家。諸佛常守護。奉持佛法藏。慧眼之境界。親近善知識。滿足白淨法。究竟諸佛力。

佛教所明の義理無量なれども、これを要約すれば、小乗は諸行無常、諸法無我、涅槃寂靜の三法印を明し、大乘は諸法實相の二印を説く、しかして小乗にては諸法を無常といひ、大乘にては諸法常住といへば、無常と常住、その義趣異なるが如くなるも、無常の理を究竟すれば常住に歸す、即ち無常なれば無相なり、己に生住異滅の四相無ければ常住眞實なるが故に、無常と常住その義相違せざるとは智度論等の説である。まことに大小乗所明の義趣淺深重々なるが如くなるも、深く考察すれば、大小乗一貫の理趣嚴存し、佛教の大本三世十方に互りて、不改不易相動せざるものがある。今大小乗一貫の義趣の宗致をいへば、大小乗共に萬有の衆因緣所生、無我無主の理を明し、空三昧に住し、無明妄我執を斷じ、空智發生し、法の實相を證し無上大菩提を成ずる道を明かすにあり。此の如く萬有の衆

因緣生、無我空の理を觀じ、空智を發生し、阿耨多羅三藐三菩提を成就せる究竟解脱の涅槃の體は、如來法身にして、これ佛教究竟の本體である。しかして如來は法を體得して大覺を成じ給ひたるが故に、法は如來の師である。しかもその法は如來が出世してこれを證し給ふも、證し給はざるも、法は三世常住なり、しかして法は如來の作にあらず、神の作にあらず、法然常住にして眞實なりとは上に引用せる阿含經、般若經、法華經、涅槃經、華嚴經、楞伽經等の諸經の文に依つても一應知らるべきである。かくの如く如來の觀じ給ひし法は、常住眞實なりとは、大小乗等しく説くところなれども、しかもその所明に淺深がある。即ち如來の覺り給ひし緣起の法は生滅無常なり、この緣起の法の生滅無常の理法の、眞實恒久なるを、法常住の意なりと説くあり、或は緣起の法の常寂滅の理をば法常住眞實の義なりと説くあり、または有佛無佛性相常住とは、如來の聖智を以て證見せられたる無漏法性の體である。即ち楞伽經に説くところの

復た次は大慧、別義を以ての故に亦常と言ふことを得、何を以ての故に、謂く現智を以て常法を證するが故に、證智はこれ常なるか故に、如來も亦常なり、大慧よ、諸佛如來の所證の法性は、法は法位に住し、如來世に出で給ふも、若くは世に出で給はざるも、常住不易なり、一切の二乗外道の所得の法の中にもあり、是れ空無にあらず、然も凡愚の能く知る所にあらず、大慧よ、如來は清淨の慧を以て、内に法性を證して、其の名を得たり。

また涅槃經に



涅槃の體、本無今有にあらざる、若し涅槃の體、本無今有ならば、則ち無漏常住の法に非ず。有佛、無佛性相常住なり諸の衆生煩惱覆ふを以ての故に涅槃を見ず、便ち謂て無と爲す。菩薩、戒定慧を以て勤めて其の心を修し、煩惱を斷じ已りて便ち之を見ることを得、常に知るべし、涅槃は是れ常住の法なり、本無今有に非ず、是の故に常と爲す。

此等は、諸法は無常なり、無自性空にして性相なし等と説かれたるは、妄執我見を帶せる凡夫の爲の説なり、如來の聖慧眼より見れば、諸法の性相は常住なるを、法常住の眞義となすものである。七卷楞伽經第四無常品に

一切凡愚分<sub>レ</sub>別諸法。而諸法性非<sub>レ</sub>如是。有<sub>レ</sub>。此但妄執無<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>性相。然諸聖者。以<sub>レ</sub>聖慧眼。如<sub>レ</sub>實知<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>諸法自性。大慧白言。若<sub>レ</sub>諸聖人。以<sub>レ</sub>聖慧眼。見<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>諸法性。非<sub>レ</sub>天眼肉眼。不<sub>レ</sub>同<sub>レ</sub>凡愚所分別。云何凡愚得<sub>レ</sub>離<sub>レ</sub>分別。不能<sub>レ</sub>覺<sub>レ</sub>了諸聖法。故。佛言大慧。我非<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>説<sub>レ</sub>寂靜空法。墮<sub>レ</sub>於有見。何以故。已説<sub>レ</sub>聖智自性事。故。

有佛無佛法然常住の法の體性、これ佛教の根本觀念である。しかも法は法位に住して常住眞實なりとは、緣起の法の無常變易なるは、これ恒久眞實の理法なる義なりと解する小乗の説、また緣起の法の常寂滅の體を常住眞實の義なりと説く、顯教大乘教あり、また如來の聖智を以て法性の眞際を照見し無漏法性の常住眞實なるを、有佛無佛性相常住の義なりとし、この眞理趣を開顯し、法常住の眞實義を明すものは眞言密教である。しかも上に引用せる涅槃經楞伽經の文に依つても知らるゝ如く顯教の

經論のうちにも、往々に密教の所説の如く、如來の證智見を以て、照見せられたる無漏法性の體の、常住眞實なるを、法常住の眞實義なりと説かれたるものあるを觀るも、しかも畢竟は、法常住の體たる法身の果境は不可説なり、不可思議なり、無相なり、空寂なりとの消極的遮詮に歸し、佛教の最極究竟の本體たる法、即ち法身をば、不可得なり無相なりと説くものである。

しかるに弘法大師は、佛教の最極究竟の法身觀に二の立場あり、一は因人即ち我執無明を帶せる迷人より觀る法身と、一は法性の眞際を如實に現證せられたる、果人自ら現證せる果體を開顯せる境とである。即ち我等因人よりいへば、我等の如何なる精神作用に依りても、無限絶對の法身の體を如實に認識する能力なければ、たゞ空三昧に住し、否定的に一致せらるべきのみである。また最極究竟の法身をば靈的實在なり、最高の眞實在なり等と積極的説示をなさるか、迷執深き凡夫は、却て法身如來に我執を帶するに至るが故に、法身は無我空なり、不可得なりと開示せられたるものなりと云ふ。

しかして顯教即ち報應二身は、これ因人の爲の教説なるが故に、顯教には法身常住の實義と、法身説法とを明かさず、法身はたゞ不可得無相の理體なりと説く、しかも、法性を現證せる法身の果體よりいへば、法身は實在の中の眞實在、本有の中の本有、法身には自らを證知する心智あり、また自らの内證の境を三世十方に常恒に表現せられつゝある言語あり、弘法大師の辨顯密二教論に



如來變化身爲<sub>二</sub>地前菩薩及二乘凡夫等<sub>一</sub>說<sub>三</sub>三乘教法。他受用身爲<sub>二</sub>地上菩薩<sub>一</sub>說<sub>三</sub>顯一乘等。並是顯教也。自性受用佛自受法樂故與<sub>二</sub>自眷屬<sub>一</sub>各說<sub>三</sub>三密門。謂<sub>三</sub>之密教。此三密門者。所謂如來內證智境界也。等覺十地不能<sub>レ</sub>入室。何況二乘凡夫誰得<sub>レ</sub>昇<sub>レ</sub>堂。故地論釋論稱<sub>三</sub>其離<sub>二</sub>機根。唯識中觀歎<sub>三</sub>言斷心滅。如是絕離<sub>二</sub>竝約<sub>一</sub>因位談。非謂<sub>二</sub>果人<sub>一</sub>也。

並約因位談、非謂果人也、即ち佛教の最極究竟の道體たる法身を、不可得なり無相なり等と、消極的に説示して法身の説法を明かさざるは、因人の所見にして、法身自體よりいへば、法身は智慧圓滿、靈活自在、不生不滅の眞身にして、三世常恒に説法し給ふ尊體である。即ち法身は人間よりいへば空なり、法身自體より云へば眞有である。弘法大師の大日經金剛頂經開題其他卍字義等に、顯教は因縁生、無常、無我空の義を明かすも、密教は法身の本有金剛の果體を開顯せるものなる秘旨を釋成せられ、また興教大師の顯密不同頌に顯應化説、密法性佛談、顯因縁生法、密法界本有なり等の釋文は如上の義趣を明かされたるものである。

顯教にては、如來は縁起の法の實相を覺りて大覺を成じ給ひたることを明かし、法をば如來の師となすものである。しかも法を本としていへば、一切世界に法を離れたるものなく、皆法を體とせるものである。即ち迷悟十界の衆生等しく法より生ぜざるはなく、釋迦牟尼如來をはじめ奉り、三世の諸佛は等しく法より生じ、法を體得し、大覺を成じ、法の自性に住せられるものである。しかして法よ

り生ぜし諸佛が因位に於て兆載永劫に亙り、無量の修行を成じ、法の自性即ち一心の本性を覺證せんとし、つひにその自性を剋證して大覺の位に住するに至れるは、これ法は固より自然覺體なると共に、法に自體自らを覺知せんとする本然の要求あり。所謂自己本有の菩提心の勢力に促され、自心性を覺證するに至るものである。此の如く一切衆生の本性は自然覺體にして、またこの自覺體には、自らを覺知せんとする必然性あり、この自心性を自覺し、自心の本性に安住することが、一切衆生の最高至深の要求なりとすれば、廣き世界長き時間のうちに、自心の本性を現證し、その本然の大自覺體に安住せられたる、先覺者の在しますことも知らるゝのである。三世の諸佛とは、實にこの本然の自然覺體を如實に現證せられ、宇宙法界に、靈活自在の妙用を顯現せられつゝある覺者である。この深理趣より觀れば、兆載永劫に自他の大覺を成せずんば、止まざる大本願を成就せんとして菩薩道を行せられつゝある、多くの釋迦菩薩、法藏菩薩等の在しますことを知らるゝと共に、已にその覺を究竟せられたる無量の釋迦佛、無量の阿彌陀佛等の諸佛のましますことを信せらるゝのである。しかして捨劣得勝、上上去去、進趣息まざる菩薩の向上門と、下下來來十方法界に行願大悲の妙用を示現せられつゝある菩薩の向下門と、乃至已成未成の大覺體をば一如に觀る最極究竟の大日如來の大覺體の實在を信知せらるゝのである。この法身大覺の體より觀れば、法界の一切は、法身大覺の境に住する一相一味到於實際の聖者なると共に、自らの本覺を現證せんとするもの、即ち宇宙の一切は自心自覺の



道程にあるものである。この自心自覺の無限進趣の道程が、そのまゝ如來大覺の果徳の示現で、この境地よりいへば向上向下上下二轉は一如である、自證化他は不二一體たるべきである。

弘法大師は何故に、縁起の法は無常無我なり、この無常流轉が法の眞實義なりと説く小乗の説、また縁起の法は擧體寂滅空を眞實義となす大乘の説に依り給はずして、如來の聖惠眼を以て觀たる法の眞相を開説する、祕密眞言乘を顯揚せられたるやと云ふに、縁起の法を觀するに所見の人の智見の淺深に依つて、法の意義は重々なるべきも最極究竟の大覺者の所見に依つてはじめて法の眞實義が顯はれ、こゝに如來の眞身と、衆生の本性開顯せられ、衆生の眞實常住の永劫性が發揮され、即身成佛義が成せらるゝに至るゆゑである。大師は卽字義に

一切世間雖レ計我我而未證實義。唯有大日如來於無我之中得大我也。心王如來既至如是地。塵數難思心所眷屬誰不得此太我之身。

また智度論第三十七

法性中衆生變爲法性

法性の中には衆生變して法性となる、大日如來の大覺體より觀れば、一切衆生は如來常住の生を成せるのである。

即ち小乗佛敎にては、縁起の法の當體は、無常生滅、幻の如く、夢の如く厭ふべき假妄として、この衆生の個體をば永劫に空滅に歸せる涅槃に悟入すべきことを明かし、大乘佛敎にては縁起の法の常寂滅の理を開説し、衆水流れて海洋に入り同一鹹味となるが如く、個人格を一如眞如の理に歸没すべき道を説くものである。これらは共に衆生の個體を空滅に歸すべきことを明かすものにして、なほ衆生の個體に即して、永遠眞實性を體得する道をば開顯せざるものである。生滅無常の衆生の當相に即して、永劫眞實性を體する道は、法性の眞實性を現證し、性相常住の眞實性を照見せる、如來の聖智眼に照らされ、如來大覺體に直入直證し如來常住の性を體することに依つてのみ成せらるべきである。此の如く凡夫無常の身に即して、如來の不壞金剛の身を成せしめんとして、祕密眞言敎を開示せられ給うたのである。般若理趣經に十七清淨句の理趣を説き、一切諸法は清淨の菩薩位に住することを開顯せらる。十七清淨句義とは、要約していへば、衆生の當體、金剛薩埵なりとの深意を説かれたるものである。しかも因位衆生の當體、本來菩薩位なる理趣を卒爾に説かれたるにあらず、衆生の當體が金剛薩埵なる深趣を明かさんとして、最初に果曼荼羅即ち大日如來が、金剛手菩薩觀自在菩薩等の八大菩薩乃至無量の菩薩衆に圍繞せられ、果界の眞實性を開顯して、次に因曼荼羅、即ち十七清淨句義を説かれたるより觀るも、十七清淨句の當體即菩薩位なりとは、これ法身如來自證の境地より觀たる説法なる事を知るべきである。しかしながら如何に如來の威神力を以て加持し給ふとも、衆生本來眞實法



身の體ならずば、金剛不壞の菩薩位に住し得ざるのである。しかるに衆生の自體本來妄執を離れたる自性清淨身なるが故に、如來の加持力に依り、生佛不二、因果一體、自性清淨の菩薩位に住する眞理趣が圓成せられるのである。しかして今日一般に讀誦せる不空三藏所譯の理趣經には十七清淨句、これ菩薩位に住する所以を明して、

何以故。一切法自性清淨故。般若波羅蜜多清淨。とあるのみなるも、理趣經の梵文を見れば、一切法自性清淨故の文の次に一切法の自性空なる文義がある。即ち

*tat kasyahetos tadyathā sarvadharmāḥ svabhāva vīśuddhāḥ sarvadharmā svabhāva śūnyatayā prajī-āpāramitā vīśuddhir bhavati*

かれは何の因によりて此の如くなるや、一切諸法は自性清淨なり、一切法は自性空の故に、般若波羅蜜多清淨なり。

所謂十七清淨菩薩位に住し、衆生の當體、金剛薩埵なる理趣の開顯は、一切法自性空の清淨の眞理趣を照見する般若波羅蜜、即ち如來の聖智見より觀て、衆生の當體、清淨の菩薩位に住することを開說せられたるものである。

此の如く、眞言密教は、如來の聖惠眼を以て法の實相を照見し、一切衆生は等しく如來の大覺位に住する菩薩であるといふ果界の眞實相を開說するものである。しかしてかゝる法身如來の自證の境地

を開顯せられたる眞言密教の教意を原始佛教の經說に索むれば、上に引用せる、かの過去現在因果經の中に、釋迦牟尼如來、大覺現證のとき、一切世界の一切の衆生、等しく大覺の光に照らされ、無限の法悦に充たされたる祕境だとか、雜阿含經に如來の觀じ給ひし十二因縁の法は有佛無佛、眞實常住なる理趣を説けるなど法身常住の觀念なるべし。即ち佛教の根本觀念は、如來の觀じ給ひし法と、その法の實相を如實に現證する般若波羅蜜の眞智、所謂無上大菩提の體とである。實相の法なる理と、その理を現證する大智と、この理智一體の法身大覺の體である。かゝる教旨は佛教一貫の原理にして、この眞理趣の究竟の境を開說するものは、眞言密教である。しかして祕密眼を以て開會して觀れば、一切佛教等しく此の理趣を説くものにして、根本佛教の教意を傳へたるものなりと云ふ、阿含經中に已にその教旨存するのである。上述の如く、釋迦牟尼如來は緣起の法の實相を觀じて、無上大覺を成じ給うたのである。されば如來の觀じ給ひたる緣起の法と、この法を現證せられたる無上大覺の體とが、佛教の根本觀念なることを知らるゝのである。しかも此の理趣を深察すれば、法の實相を現證し給ひたる如來大覺の體、即ち如來の三摩地の體が、佛教の根本觀念である。しかるに普通佛教は、如來は緣起の法を觀じて、無上覺を成じ給ひたるが故に、法をば如來の師なりとし、法を現證せられたる人よりも、法を重んじ、法を佛教の根本觀念と觀んとせるものである。しかるに眞言密教、ことに弘法大師は、法を現證せられたる如來大覺の體を、佛教の根本觀念なりとして、こゝに深甚なる祕密



莊嚴藏を開顯するに至りしものである。即ち法の眞實相は、如來の聖智見に依つてのみ照見せられるものである。如來の聖智見を以て、法の實相を照見せられるとき、一切の法は、深甚の理趣を藏する祕密莊嚴の體なり、一切衆生は等しく、如來大覺體に住する金剛薩埵なる祕義が開顯せられるのである。即ち法の眞實義を照見するものは、たゞ如來のみなるより、眞言密教は、一切衆生をして、直に如來の果境に住せしめ、この如來自證の境より、法の實相を觀、即身成佛せしむる、妙趣を開説するものである。しかるに普通佛教は、佛教の根本義は法にありとし、因位凡夫の見地より、法の實相を觀んとするが故に、法の實相を如實に照見せられざるのみならず、法を認知するを要諦となし、主知に偏し、佛教をして談理の教と化し、信に依つて如來の三摩地の體を現證する宗教的眞意義を見失はんとするに至ると共に、解脱の門扉を開く、祕鍵をも失せんとするに至つた。しかしながら、印度や支那の論士等は釋迦牟尼如來は法の實相を如實に覺り給うて、無上大覺を成じ給ひしが故に、法は如來の師なり、法を佛教の本體なりとし、如來の如く法を認知、覺證せんとせるより、法の眞理趣が漸次開顯し、深甚なる佛教の妙旨を發揮するに至つた、即ち人空、人法二空、八不中道、眞如實相、三諦圓融、三千圓具、事々無碍法界等、法の眞理趣を開顯せらるゝに至つた。かくの如く法の眞理趣が開顯せられ、つひに祕密眞言乘に至つて、法は本來六大一實色心不二の大覺體なる祕義が開顯せられ、法と法を現證せる如來と一體不二、所謂人法不二の實義が顯はるゝに至つた。如來の覺證し給ひたる

法の深趣が開顯せらるゝところに、法を現證せる如來の三摩地の内容が深甚となり、つひに人法一體の眞意義が顯はるゝに至れるものである。しかしながら人法一體なりとは、常途佛教にも説くところである。即ち人法一體なるが故に、緣起の法は無常空なりと説く、小乘佛教にては、その無常空の法を現證し給ひたる如來は無常空の法を體とすとなすが故に、如來はついに寂滅無餘の涅槃に歸し給うとなす。また大乘にては、法をば人法二空なり、八不中道なり、三諦圓融、事々無碍法界なり等と説き、法の無限深大なる理趣を開演するに至れるが故に、この法を體得せる如來は法と共に、周遍法界、妙用無窮の尊體なる廣大の佛身觀を開説するに至れるものである。しかも此等大乘佛教の法の觀念は、無相般若の空義を根底とせるものなるが故に、畢竟は不可得無相の理に歸するのである。さればかゝる法を現證せられたる如來も、畢竟眞如無相の法に歸するのである。即ち大乘佛教にて應身報身の佛格を明すも、この應報身は、無神論的法の上に現せし、人なるが故に、つひに應報身も、化度の因縁つきなば無相空の法身の體に歸せらるゝとなすものである。此の如く一般佛教にては人法一體を説きつゝ、しかも人を假とし、法を實とし、假なる人より實なる法に悟入すべきを教ふるものである。かくては人法一體法は法位に住して常住眞實なり、また法を現證せる法身も常住なりとの眞實義が未だ開顯せられざるものといはねばならぬ。こは前敍の如く、因人の立場より法を觀んとするものゝ、等しく到達すべき歸結である。因人の立場より法を觀んとすれば、つひに無相空の理に歸し、衆



生も無常空なり、如來も無相空なり、人的のものは凡て非眞實なりとし、不可得空の一元に没在するに至るのである。しかして深修觀察、不可得空の妙諦を證見するとき、根本無明を斷せられ、因人の限界を翻過し、轉じて如來の果境に入り得るのである。かく法の體をば、不可得空なりとし、その法の妙體を諦觀し、根本無明を斷除して、如來の果境に轉入するとは、これ深く法の體性を觀察すれば、法本來の體はこれ如來大覺體なる、法の實相の開顯せられたるを云ふ。しかして法本來の眞實義が開顯せられ、法は本來色心不二の大覺體なる、人法一體の眞理趣が顯はるゝに至れば、法と云ふも、人と云ふも、共に祕密莊嚴の法身の果體を表現せるものである。かゝる果境よりいへば、法と云ふも人と云ふも、共に如來の妙體を開示せるものなるが故に、何んらかゝはるところなきものである。しかも眞言密教にては法の究竟自性の眞實體は、法身大日如來の人なることを説かんとするものである。即ち佛教の根本觀念は、法の自性を現證し、法本來の大覺體に住する、法身如來の三摩地の體なりとなすものである。かの菩提心論に、勝義、行願、三摩地の三種の菩提心を明すも、三摩地をその體となすものなるが、三種の菩提心は人と法との二なりともいひ得らる。即ち三摩地の體は、これ如來の大覺體なるが故に人である、勝義と行願とは法である。所謂法はこれ空有不二の體である。その法の空義を開説せるものは勝義の菩提心にして、その有の因縁差別を觀て大悲の萬行を成ずる道を明かすものは、行願の菩提心である。三種の菩提心は、不離一體なり、人法は不二である。しかも三種の菩

提心は、三摩地を體とするが如く、人法は不二なるも、祕密眞言乘よりいへば、むしろ人を體とせるものと云ふべきである。即ち佛教の最極究竟の本體は、法身如來の自證大覺の體である。しかも分つていへば、法と人とである。しかしてその法をば、無盡に開説せらるべきものなれども、約していへば、勝義、行願、所謂空と有、止と觀、無我と慈悲、實相と因果の二門を出でざるべし、この二門不二中道の體が法の妙諦なるも、寧ろ法の内容の開顯は因縁の無性を明す勝義の菩提心門にあり、即ち四諦、十二因縁、唯識中道、八不中道、三諦圓融、事々無碍法界等皆これ勝義門に開説せらるゝものである。しかも、此等の法は、皆これこの法を現證せられたる覺者の内證法門として、四諦は聲聞、十二因縁は緣覺、唯識中道は彌勒、八不中道は文殊、三諦一實は觀音、事々無碍法界をば普賢の内證法門とし、法を現證せる人を本として、説くところに、人爲本の眞言密教の教旨を看取せらるゝであらう。更にその至頤を談すれば、大師は勝義門に九種住心を開説し、十界十住心を建立せられ、法身如來の三摩地の體よりいへば、十界十住心は、本來法身の大覺の大系統に連なる、金剛薩埵なり、毘盧遮那具體法身の一法門身なる祕義を開説せらるゝのである。こゝに於て因縁生、無常虛妄の凡身に即し、不壞金剛の如來常住の生を體する妙門が開けたのである。

上述の如く、佛教の根本觀念は法なりといひ、またこの法を現證せられたる人なりとして、人法の



兩義並説し來るところに、教學上より云ふも、修證門より云ふも、種多の妙趣の存することを知らるゝのである。

即ち道の眞源は人法一體なるが故に、法といふも、人と云ふも皆その道の本體を表現するものなれども、而も法と人と所謂佛と法とを並説するところに、佛教は如何なる時代にも、如何なるところにも萬衆に相應の宗教として、永く人類救済の宗教的使命を果し得らるべき乎。即ち法を佛教の根本觀念とするより、その法の眞意義を理解せんとし、各々の智解に隨うて意得するに至る。こゝに法の深趣が開顯せられ、汲んで盡きざる甘露味を、萬衆に附與し、各時代人の理性を満足せしむると共に、その法を現證せる如來の三摩地を信せしむることに依つて、眞實の宗教的要求を満足せしめ得らるゝのである。即ち人と法とを並べ説くところに、智と信と理性と情意の要求を充たさしめらるゝのである。しかして法をその時代人の各々の智解に依つて理解せんとするが故に法の觀念には、變遷があるが故に發達があり、各時代適合の宗教たり得ると共に、佛教自體も常に新たなる生命を發揮し、永劫性を持つるに至る乎。しかして法の觀念の發達開顯は、同時に法の體驗者たる如來の三摩地の内容の開顯なるが故に、佛身觀にも變遷發達がある、しかも如來は法を知り、法を體驗し、法をば覺の内容として、法に自在を得たるより、法と佛とは一體なるも法を知り、法を體驗するは、これ法を超越るものなるが故に、如來は不變常住の眞實在者として萬衆に臨み、萬衆の歸依渴仰の對象た

ることを得るものである。即ち法の觀念も、如來の觀念も共に變遷あるも、法と如來と相望せば、法は變、如來は不變なりと一往いひ得らる。かくの如く佛教は、人と法とを並説し法の體驗者たる不變常住の如來の三摩地を開説するところに、宗教として、眞實の安住の道を萬衆に與へつゝあるものである。しかして眞言密教よりいへば、法と人との不二一如の法身大覺の體を開説するところに、一切佛教の最極究竟の祕密藏が開顯せられるものとなす。

かくの如く、法身如來の常住眞實の體が開顯せられることによつて、如來の用大たる報應二身の常住眞實義顯はれ、あたかも日月の體と光明の用と不離一體なるが如く、三身常住の眞實義が闡顯せられ。この三身の大智大慈悲の智光に照され、一切衆生も等しく、如來金剛の覺位に住せるものなる眞實義が成せられたるのである。我等は無常暫留の身にして、常住眞實の實在者を希求するに至るは、これ自心本有の菩提心の勢力と如來常住の光明に照され、如來自證の加持力を被れるゆゑである。眞言密教にては、我等生死の凡夫をして高く如來果地の境に超入する祕義を明かすものなるが、凡身が法身の果境に直入直證せらるゝは、如來自性の加持力と如來の警覺、即ち如來說法の言説に依る、この如來說法の言音に乘じ凡位を超え佛果の眞際に住せらるゝに至る道を説くものである。こゝに於て、大師が密教は法身説法の實義を明かすものにして、この法身説法は、一切佛教の究竟の道なること及び法身の三摩地より流出せらるゝ眞言のみが、これ眞實の眞言にして、この眞言門より如來の果



境に入る眞言道を開説し給へる、素意を知るべきである。また法を佛教の根本義とし、無我の理觀に依つて解脱を成せんとする顯教と、入佛道の最初より如來の三摩地門を修する眞言密教との、修證門の相違をも知らるべきである。即ち法爲本の佛教は、空無我の理を觀じ、根本無明を斷じて、無上大覺の佛果を成せんとするものなるが、眞言密教は、已に無上覺を成じ給へる如來の果體を信じ、如來のうち己を空しうし、如來常住の身を成ずる道を明かすものである。即ち如來の三密門を修し自心の心月輪に如來の種子、三形、尊形を觀じ、その心月輪をして漸次廣大ならしめて、法界に周遍せしめ、自他を泯じ、無想無念の空三昧に住するに至るとき、本地の如來に冥合し、如來金剛の身に同じ、廣大無邊の佛徳を成じ、本地加持不二、生佛一體の妙諦を體し、その遍法界の心月輪を漸く斂り、漸く小くして量己身に等しからしむるに至つて我にして我ならぬ我、即ち我は佛家に生在せる金剛薩埵なり、佛子たる自覺を成じ、宗教的安心を成せらるゝに至るのである。即ち因果制約のうちにある我等が、一念因果の制約を絶せる自在無碍の如來地に超入せらるゝは、我等の心月輪に住せらるゝ無碍自在者が妙用を發せらるゝに依るのである。因人にして果界の法門を受用するに因るのである、有限にして無限の果體に冥合するゆゑである。祕藏記に所謂

初從阿闍梨入曼荼羅灌頂授法之人。其所修之行是佛境界之行也。非十地菩薩分際。是故曰超過十地。

こゝに於て、眞言密教の眞意を了せらるゝであらう。即ち眞言密教の本體は、法身大日如來の果體

にして、その妙用は、法身如來より示現せられたる身口意の三密の法門である。衆生は如來より示現せられたる三密門を信受して、法身の果體に契合するのである。しかしてその眞言祕密の本體たる法身大日如來は、これ釋迦牟尼如來の一代佛教の根本觀念たる法の、最極究竟の體である。この法の最極究竟の體を開顯し、法の本性は法身如來なり、その法身如來の三世常恒に説法し給ひつゝある祕旨を説示し、一切衆生をして、直に如來の警覺の聲を聞かしめ如來の果境に證入せしむる道を明かすものは眞言密教である。ことに弘法大師の眞言密教は教相より云ふも、事相より云ふもその極致は釋迦牟尼如來の道肝たる法身の極果を開顯するにある。大師の二教論に眞言密教の祕密の體は、法身如來なるべきことを釋し

問若如所談者。說法身內證智境一名曰祕密。自外曰顯。何故釋尊所説經等有祕密藏名乎。又彼尊所説陀羅尼門何藏攝歟。答顯密之義重重無數。若以淺望深深則祕密淺略則顯也。所以外道經書亦有祕藏名。如來所説中顯密重重。若以佛說小教望外人說即有深密之名。以大比小亦有顯密。一乘以簡三立祕名。總持擇多名。得祕號。法身說深奧。應化教淺略。所以名祕。如是祕名重重無數。今謂祕密者究竟最極法身自境以爲祕藏。又應化所説陀羅尼門雖是同名祕藏。然比法身說權而不實。祕有權實隨應攝而已。

また十住心論第十に曰く

問毗盧遮那所説名祕密。釋迦所説名顯教者。釋迦說中亦有眞言及祕密之名。與之何別。答釋迦所説眞言簡多



名句<sub>二</sub>得<sub>三</sub>祕名<sub>一</sub>。彼眞言義亦<sub>二</sub>逗<sub>三</sub>機根量<sub>一</sub>。法華涅槃律藏等亦有<sub>三</sub>祕名<sub>一</sub>。各隨<sub>三</sub>所望<sub>二</sub>得<sub>三</sub>斯名<sub>一</sub>耳。律藏望<sub>三</sub>世間外道<sub>二</sub>得<sub>三</sub>祕名<sub>一</sub>。法華約<sub>レ</sub>引<sub>二</sub>攝<sub>三</sub>二乘<sub>一</sub>有<sub>三</sub>斯名<sub>一</sub>。涅槃據<sub>レ</sub>示<sub>三</sub>佛性<sub>二</sub>得<sub>レ</sub>之<sub>一</sub>。世間外道經書中亦有<sub>三</sub>斯名<sub>一</sub>。隨<sub>三</sub>各各所愛所珍<sub>二</sub>名<sub>一</sub>之而已。並是小祕非<sub>二</sub>究竟說<sub>一</sub>。大日經說<sub>三</sub>勝上大乘句心續生之相<sub>二</sub>諸佛大祕密<sub>一</sub>。約<sub>三</sub>祕密<sub>二</sub>有<sub>三</sub>大小<sub>一</sub>眞言亦有<sub>三</sub>大小<sub>一</sub>。故菩提經云。我名<sub>三</sub>眞言<sub>一</sub>亦名<sub>三</sub>大眞言<sub>一</sub>。初眞言者應化身所說眞言。次大眞言者究竟法身所說眞言。

即ち顯密二教論に「祕密眞言の祕密の體は、究竟最極の法身の自境を以て、祕藏と爲す。」と釋成せられ、十住心論には

大日經に勝上大乘の句、心續生の相は、諸佛の大祕密なりと説く、祕密に約するに大小あり、眞言に亦大あり、故に菩提場經に云く、我眞言と名け、亦大眞言く名く、初に眞言とは應化所說の眞言、次に眞言とは、究竟法身所說の眞言なり。

此等の文に依らば、祕密とは、究竟最極法身の自體といひ、眞言とはこれ法身如來所說の眞言が眞實の大眞言なりとなすものである。即ち釋尊所說の經等にも、祕密藏の名あり、また釋尊所說の經中にも、眞言陀羅尼あり、また世間の天帝たる梵天帝釋の所說にも眞言あるも、これらは眞の祕密眞言にあらざることを明かされ、釋尊及び世天の眞言の義は、皆世間の凡人の機根に契ふものにして、なほこれ究竟最極の唯佛與佛の自境を顯示するものにあらざるが故に、これ眞實の祕密眞言にあらざることを開示せられたるものである。大師の所見よりいへば、祕密とは法身如來自内證の體にて、眞言と

は、この法身所說の眞言である。即ち法身如來は三世常恒、周遍法界、如何なる處にも存せざるはなく、如何なる時にも在まざるることなければ、無明を斷じて直にこの法身の説法を聽き、法身自境に悟入すべきことを明かされたるものである。自ら法身如來の説法を聽き得ざるものは、この法身の説法を如實に聽受して、これを結誦し、人間に流布せられたる兩部大經に示されたる法身所說の教法に依り如說に修行し、現生にこの法身の果境に證入すべきことを開説し給ひたるものである。

かくの如く大師の教相は、釋迦牟尼如來の教說の究竟眞實の體たる法の實義を開顯せられたるものにして、その事相も釋迦牟尼如來の心肝たる法身の果徳を體するにある事は、大師入定の直前に修せられたる、宮中眞言院の御修法は、釋迦牟尼如來の遺身の舍利を如意寶珠と觀じ、この舍利寶珠を本尊とし大日如來の心月輪に、この舍利寶珠を觀じ、その舍利寶珠大光明を放ちて十方法界を照らし、未度の衆生を度せしめ、未解の者を解せしめ、諸の珍寶を雨らして、衆生の所願を満足せしめ、地味を増長し、穀稼を成就せしむる祕法なるが、この一法より觀るも、大師の眞言密教の眞意の一端を想見せらるゝであらう。即ち大師は三世常恒、金剛不壞の法身如來の道體と、その如來の無限の妙用等を以て、天壤無窮の國體を護り、一切衆生をして有相無相の悉地を成せしめ給ふ道を開示せられ給うたのである。大師は入佛道の最初に寶部中の寶部たる虚空藏菩薩の三昧を體得せられ、大日經を感得



せられ、入唐して灌頂壇に入つて、大日如來の果徳を體せられ、歸朝後も多く寶部の三昧門に依て、國家と一切衆生の爲めに修法せられ、入定の直前に諸弟子に示されたる御遺告に舍利寶珠の祕趣を明かされ最後の御入定も寶部の三昧に住せられ、一切衆生に淨菩提心、如意寶珠を體得せしめ、令法久住、利益人天の大願を成せさせられ給ふのである。しかしてその道體は釋迦如來の心肝たる金剛不壞の法身舍利寶珠に存するを思ふとき、眞言密教の起原と、その道體は釋迦牟尼如來の遺法のうちに求むべきを知らるゝと共に、眞言密教は釋迦牟尼如來の教説の最極究竟の道體たる法身の果徳を開顯するにあることを知らるゝであらう。

しかるに、近代眞言密教の起原をあげつらふ者を觀るに、眞言密教とは、佛教内の咒藏なりとし、其の咒藏の起原を明かにせば、自ら密教の起原開明せらるべきものなりとの見地より、その咒藏の起原を求めて遠く吠陀のうちにあるとす、しかして釋迦牟尼如來は、この咒を誦用することを禁じ給ひたるを、佛滅後、佛教のうちに、其の明咒竄入し、誦持するものあるに至り、自ら佛教的明咒成立するに至りしもの、これやがて、眞言密教の起原なりとなすものである。随つて密教なるものは釋迦牟尼如來の所説にもあらざればまた龍樹菩薩を密教の開祖ともなさないものである。即ち密咒の起原は遠く吠陀に存し、一般の波羅門の徒これを誦持せしなり、しかるに釋迦牟尼如來は、これが誦用を禁せられたるも、佛滅後、佛教のうちに漸入し、つひに所謂咒藏成立するに至れり。即ち此等雜部の密

教は、龍樹菩薩出世以前に存せしなり、また眞言密教の根本所依の經典たる、大日經及び金剛頂經は、これ龍樹菩薩に依て南天の鐵塔より誦傳せられたるものと云ふも、もとより龍樹時代に兩部大經存せしにあらず、即ち兩部大經は龍樹より數世紀後に成立せしものにして、密教の多くの軌儀に至つては富蘭那文學や咀特羅の影響に依つて成立せしものとなすのである。此の如き説は、近代密教の起原を論ずる者の殆ど通説ともなれる觀があるのである。かのウインテルニッツ氏の印度佛敎文學史、大村西崖氏の密教發達志等何れもかゝる見地よりの所説でないものはない。もとより眞言陀羅尼が眞言密教の一特質なるも、眞言密教の本體でないことは、善無畏三藏の口説にして、一行阿闍梨の記たる大日經疏の最初の入眞言門住心品の品號の釋文に依つても知らるゝのである。即ち入眞言門住心品の釋文の中に

此品統論經之大意。所謂衆生自心品即是一切智智。如實了知名爲一切智者。是故此教諸菩薩。眞語爲門。自心發菩提。即心同萬行。見心正等覺。證心大涅槃。發起心方便。嚴淨心佛國。從因至果皆以無所住。而住其心故。曰入眞言門住心品也。入眞言門略有三事。一者身密門二者語密門三者心密門。

即ち大日經は眞言密教の根本經典にして、その經に三十一品あるも、第一品の入眞言門住心品は、一經の宗要を開説せられたるものである。しかして、こゝに掲出せし、入眞言門住心品の釋文は、これ此の品號の釋なると共に、また入眞言門住心品一品の大意を明かせしものである。即ち此の釋文は住



心品一品の宗要を釋成せられたると共に、大日經の大意を明されたるものなることは疏の文に此品統論經之大意といへるに依つても知らるゝのである。即ち此の文は入眞言門住心品一品の宗要を明すと共に、大日經三十一品の一經の大意を統論せるものである。隨つて眞言密教の根本義を開明せるものと觀らるべきものである。しかして此の疏の文に

衆生の自心品は、即ち是れ一切智智なり。實の如く了知するを以て、一切智智と爲す。是の故に此の教の諸の菩薩は、眞語を門として、自心に菩提を發し(中略)而も其の心に住するが故に、入眞言門住心品と曰ふ。入眞言門に略して三事あり、一には身密門、二には語密門、三には心密門なり。

即ち眞言陀羅尼は三密門中の一門である。この眞言陀羅尼を能入の法門として、祕密藏の本體たる法身大日如來の本果に契合し、一切智智の本體たる一心の本性に安住すべき道を開説するものは、眞言密教なることを釋成せられたるものである。即ち眞言陀羅尼は、祕密の本體たる法身の本果、一心の本性に契達する能入の門にして、その所入所詣の祕密の本體ではない。これを淺近なる密教と云ふものについて觀るも、密咒を誦するは、これ如來の加護を被り世間のある有相の悉地を得んとして、密咒を誦するものなれば、如來の加護を求めんとする悉地の果が、むしろ本たるべきを知らるゝが如く密咒眞言は、三密門中の一法門にして、この三密門を修し、有相の悉地、乃至無相の大悉地、即ち祕密の本體たる一切智智の體に契合すべき祕義を説くものは、眞言密教である。かくの如く眞言陀羅尼

は、祕密の本體たる法身如來の本果に契達する一法門にして、この眞言陀羅尼が祕密の全體でないことは、以上の善無畏三藏の釋文のみならず弘法大師の二教論、十住心論等に依つても知らるゝのである。もとより眞言密教に明 *vidyā* 眞言 *mantra* を説かれ、また眞言陀羅尼を誦するを密教の特質となすものなれども、弘法大師の聲字義等に明かされたるが如く、この眞言陀羅尼は、法身如來定中説法の密語なりと云ふに至つてはじめて眞言密教たるものである。

即ち眞言密教の起原を知らんには、先づ眞言密教の本質の如何なるものなりやを明かにせざるべからず、その密教の本體の如何なるものなりやを究めずして、その一特質、一屬性等より觀て、これを論せんか、つひにその起原の正鵠を得ざるのみならず、併せて密教なるものゝ心肝を體し得ざるを思ひ、こゝに弘法大師の眞言密教なるものは、佛教を一貫せる、佛教の根本觀念たる法身を本體とし、この法身の眞實義を開顯するにあることを敘し、また佛教の究竟最極の法身佛を祕密藏の體とする、弘法大師の所説の一斑を明かせしものである。弘法大師自ら眞言密教の奥旨を闡明せんとして撰せられたる、十住心論、二教論、寶鑰、即身義、卍字義、聲字義、大日經、金剛頂經開題等に眞言密教は釋迦牟尼如來の佛教の究竟眞實の體たる、法身の果體を開顯するにあることを釋成せらる。もし近代佛教學者の如く、眞言密教は明咒を體とせるものにして、その明咒なるものは、釋迦牟尼如來の禁せられありしものが、佛教に竄入し、つひに、佛教内にある立場を得たるものなり、或は眞言密教の曼



荼羅のうちに、自在天、梵天等波羅門の信奉せる神の存するを觀て、これ世間最高無上の聖體に托して、それを象徴として出世間の眞實無上の法身を體する道を開説せられたる眞言密教の經の深意を解せず、たゞその外相のみを觀て、密教は波羅門の佛教化せるものなり等と云ふが如きに至つては、これ高き第十祕密莊嚴心の眞言密教を低き第三住心に同せしむるものである。

即ち十住心論に依れば、波羅門教の神我論より、佛教の無我觀に入り、ついに無我の原底に、眞我の實相を開顯するものは、眞言密教なることを知らるべく、二教論より觀るも、佛教の究竟の教旨は實相法身にあることを明かす。即ち無相大乘たる三論宗にては不可得空を實相法身の體なりとし、唯識は四重二諦に依つて顯はるゝ、第四重の勝義勝義廢詮談旨一眞法界をば、法身の體なりとなし、天台の圓融三諦華嚴の不可說果界の理趣、何れも釋迦牟尼如來所説の教の本體は、眞如法身にありとし、その眞如法身の妙體を開顯し、その法身を體得するを教の歸趣となさなないものはない。しかも此等は畢竟、三界は衆因緣所生の假妄なり、唯法身如來のみ眞實なりとし、假妄を厭離して如來に歸し、その法身如來の體性も究竟空なりとし、不可得空に歸せんとするものである。大師の教旨より云ふも、三界は假妄如來のみ眞實を説くものなるも、その眞實常住の如來の體に直入、直證し、その眞實法身の體の三界に周遍せる理趣を明し、三界假妄のうちに、如來眞實の體を成ずる道を開説し、この三界に、法身の三祕密莊嚴の眞實相を開顯する祕義を宣示せられたるものである。また聲字實相義には、

聲字に依つて眞理の實相を詮顯せんとするは、世間出世間、小乘大乘、顯教密教等しく説くところなるも多くの教は、聲字は假にして、眞實の理趣を如實に詮表し得ざるものとなす。しかるに大師の眞言密教よりいへば、迷妄を帶せる衆生の言音は、眞實を詮し得ざれども、實相の理趣を體得し、その實相の理を體とせる法身如來には、自内證の境を開説する如義語あり、以て三世常恒にその自内證の境たる實相の眞理を開説されつゝある祕義を明かすものである。また法身自證の境より觀れば色聲香味觸法の六塵は、法身實相の體を開顯する一大文章なれば、この六塵の文字に即して、實相法身を體すべき道を開示せられたるものである。また吽字義より云ふも、吽字に字相字義の釋をなし、その字義眞實とは、これ法身實相の體なるが、その字義を明かすに、遮情表徳の二門あり、遮情よりいへば法身實相の體は無相空なれども、表徳門よりいへば、無我の中に大我を得給へる眞我の體、これ法身實相の體である。この法身大日如來の自體よりいへば、一切衆生は、法身大覺の境に住し、如來常住の體を成せる金剛薩埵なる理趣を開演せるものである。

また即身成佛義には、凡身に即して靈活自在の佛身を體得せらるべき妙門を開示せられたるが、凡身に即して佛身を成せらるゝはこれ法身如來の大覺體、法界に周遍し、凡身の當體、如來金剛の身なるゆゑ、一念如來に歸命するとき、凡身に即して、如來の大果を成せらるゝのである。

此の如く、眞言密教は、佛教の究竟の體たる法身如來の果體の實在を開顯し、この法身如來の説法



を明かし、その法身の說法所謂眞言陀羅尼を念誦し、法身の體に契合すべき理趣を開演するものである。

上來所述の如く、弘法大師は、眞言祕藏の本體は、佛教の最極究竟の道體たる法身如來なる深義を開顯し給ひしは、これ列祖相傳の説と、自らの研尋と、また深き體驗とに依り給ひたるものである。即ち眞言密教は、大日如來、金剛薩埵、龍猛、龍智、金剛智、不空、惠果と相承し來りしものなることは、近くは惠果和上より親しく聽受せられたりと共に、不空三藏の表制集等に依り給へるものにして、また龍猛菩薩を眞言密教の開祖となし給ひしは、楞伽經の懸記、及び智度論等に依りしものである。しかしして諸祖相傳の眞言密教は、法身如來の所説にして、一切佛教の教主なることは、大師自ら佛教を研尋せられ、その深趣を闡明せられたる御製作の御文書に依つて知らるゝのである。此の如く列祖の相傳と自らの研尋に依つて、本宗の深奥なることを了せられ本宗を宣顯せられたるものならんも、しかもまた大師自ら法身の果を現證せられたることが、この宗開顯の根基をなせるものである。即ち傳統の説や、自ら研尋は、たゞ自己の體驗を證せらるゝものなりとも觀らる。しかしして自己證得の法門をば、單に己心中の法門として宣説せずして、その證權を先覺者に求め、その先覺者を崇敬すると共に、先聖の證得の境を開説せられたる經論をば無上の寶典として、これを尊崇するは、これ自

己の體驗は主觀の事實なると共に客觀的眞理なることを證せんとするものである。即ち宗教的眞理は、これ人間の知識を以て論證し得ざるものにして、たゞこれを體驗するより外なきものなるが故に、己に其境地を體得せられたる先聖を求め、以て自らの體驗の眞實義を證し、また先聖の體驗の境を開説せられたる文義は、これまた自己の體驗を證するものなれば、先聖と同じく絶對無上の價值あるものとして、尊重せるものである。しかも自己の大菩提を成するに至りしは、先覺者の加持力と、開示し給へる法門に依りしものにして、また一切衆生をして此の法門を信奉せしめ、等しく無上大覺を成せしめんとして、この教の祕趣を開演せる種多の書を製せられしと共に、この教の起原傳來を明かさんとして付法傳を編せられ給うたのである。付法傳の初めに眞言密教は法身如來の所説にして、その經は金剛薩埵、龍猛、龍智、金剛智、不空、惠果と相承せることを記して曰く

夫仁王治國封賞有差。法帝御世攝引不一。有差非能治之不平。不一還是所化之機別。是故一味甘露逐器殊色。一相摩尼隨色分影。能說之心平等而轉。所潤之意。千殊各解。一三五乘源一派別。法報應化體同用異。所謂報應化佛者亦名十身盧遮那大小釋迦等。常途顯教之主是也。(中略)

所謂法佛者常住三世淨妙法身法界體性智。大毘盧遮那自受用佛是也。金剛頂經及大日經等說是。(中略)如是法身智身二種色相平等徧滿一切衆生界。一切非情界。常恒演說眞言語如義語漫荼羅法教。即是楞伽所謂眞實說法者是也。般若論應化非眞佛亦非說法者。蓋爲此乎。彼漫荼羅教者。金剛頂瑜伽十萬頌經等是也。大



日如來普遍常恒雖演說如是唯一金剛祕密最上佛乘大漫荼羅法教。而非機非時不得聽聞信受修行流傳。所謂道不自弘弘必由人。誰能弘者。則有七箇大阿闍梨耶。上自高祖法身大毘盧遮那如來。下至青龍阿闍梨。嫡嫡相續迄今不絕。斯則如來加持力所致也。法之最上於此見矣。生身佛所說教不如是也。自加葉至師子付法絕矣。由是空有等諍論爭擧旗鼓職此之由矣。

第二列付法阿闍梨名號及表德者。彼傳法阿闍梨名號云何

第一傳法阿闍梨號曰摩訶毘盧遮那婆多他揭多

第二付法祖名曰金剛薩埵阿闍梨耶

第三祖名曰龍猛菩薩阿闍梨耶

第四祖名曰龍智菩薩阿闍梨耶

第五祖金剛智阿闍梨耶

第六祖不空金剛阿闍梨耶

第七祖青龍寺惠果阿闍梨耶

### 第一の高祖法身大日如來

第一高祖法身大毗盧遮那如來、與自眷屬法身如來、於祕密法界心殿中。自受法樂故。常恒不斷演說此自內證智三摩地法。具如金剛頂經說。

法身如來法界心殿に於て、自性所成の眷屬と共に、その自内證の三摩地を開演し給ふ法門は、これ眞言密教である。隨うてその能説の教主たる法身大日如來は、眞言密教の根本教祖である。法身如來は佛敎の究竟の本體なるが故に、法身または法身常住の文義は、阿含、般若、法華、涅槃、華嚴等の諸經に説かれ、また法身如來說法の義は、楞伽經の中に説かれ、大智度論にも、法身説法の釋文あり、また應身佛たる釋迦牟尼如來の説法の根軸には、法身如來の説法がある。法身の説法なくば應身の説法が成せないのである。即ち釋迦牟尼如來は法を覺りて大覺を成じ給うたのである。されば法は如來の師にして如來をして覺智を生せしめたのである。隨うて應身の説法はその法即ち法身が根柢となるものにして、その自覺内證の奧秘には唯佛與佛の法身の説法が存するのである。かくの如く釋迦牟尼如來の一代經論のうちに、已に法身説法の釋文あり、また釋迦牟尼如來の説法の根柢には法身の説法存するも、印度及び支那にては、かゝる深甚の教旨開顯せられず、むしろ法身不説法の義が唱へられたのである。即ち印度にては、小乘大乘何れも法身説法の深義を開顯せず、支那にても三論宗の嘉祥大師法華玄論第九に法身説法せざる所以を釋して曰く、

問法身佛何故不説法耶。答唯有二緣。一菩薩即報身化之。二聲聞即應身化之。法身唯佛能見故不説法也。

又法身名相斷絶。豈有音聲説法。説法之事皆是應身。文

即ち説法はこれ如來、迷途の衆生をして佛智見を成せしめんがためである。しかして應身佛は六道



衆生、二乘乃至地前の菩薩のために說法し給ひ、報身佛は地上の菩薩のために說法し給ふ。しかるに法身佛は唯佛與佛の果上の境なれば說法して化導すべき衆生なく、また法身は言語心慮を絶せる永寂の理體なるが故に說法なかるべしとなすものである。こは嘉祥大師の所説なるも、他の大乘の諸教にて法身の不說法を明かすは何れも如上の義趣に基くものである。かゝる所見よりして、智度論の法身說法の文義をも他受用報身佛の義に解せんとするものである。また唯識家にては、四種法身の説を立て、その自性法身を究竟の佛身となす、しかもその自性身はたゞこれ清淨法界の眞如の理體なれば、說法等の作用あることなし、しかるに楞伽經に法身說法の文義あり、こゝに於て、唯識宗の立場より、この經の法身說法の義を會釋せざるべからざるより、楞伽經の法身說法の文をば生正智解の義なりと解す。

淄州の了義燈

佛法身眞如理。生正智解。名爲說法<sup>二</sup>文

即ち法身說法とは法身佛自ら說法して、他をして解を生ぜしむるにあらず、たゞ十地の菩薩は、眞如法身を觀じて根本智を生ず、かく法身は觀境となりて菩薩をして根本智を生ぜしむるを法身說法といふ。

かくの如く、三論及び唯識家には法身說法せざることを明かすものなるも、眞如緣起を談ずる性宗

以上は、一應法身說法の義を立し得らるゝ邊あり、即ち眞如法身開發して萬法となり、萬有の全體これ眞如法身なれば、一切の音聲は皆法身の說法なりといひ得らるゝによる。されば天台宗に法身說法の説あり、しかも天台に於ける法身說法の義とは、理智冥合、所謂寂にして照、その寂照不二の眞如法身の體が、衆生の淨菩提心に冥應するを云ふ。即ち智者大師の維摩經略疏第一に

若究竟寂光無說無示而說者。法身無緣眞資<sup>二</sup>一切。無說而說即是法身說法<sup>三</sup>云

しかも天台にては三身相即の義より、寧ろ應身の釋尊の說法をば、法身の說法となすものである。もし三身分別していへば、法身はこれ無相常寂の理體である。この常寂滅の理は、もとより言説を絶し、心慮を泯し無說無示の理體である。

また華嚴宗の所説に依るに、華嚴の教主をば、眞應相融の佛身となす。即ち釋尊を教主となすも、その釋迦即十身具足の盧遮那佛となすものである。しかもこの盧遮那佛の所説の華嚴經に、性海果分の境界を説かれたるやと云ふに、十佛内證の境界は機教を絶し、言詮を絶するが故に、性海果分を不可説に屬するのである。蓋し天台も華嚴も、釋迦牟尼如來を本とし、或は三身相即してその釋尊の當體即法身なり、十身具足の盧遮那佛となす。しかるに弘法大師の所見よりいへば、法華經の教主をば應身佛となす。そは法華經は二乗のために説かれたるもの、即ち二乗が所對の機根なるが故に、その教主をば應身佛となすものである。また華嚴の教主をばこれ他受用報身佛となす。即ち變化身は地前



の菩薩の教主にして、三乗の法を説き、他受用報身は地上の菩薩のために、一乗の法を説き、法身佛は自受法樂の故に自内證の祕密を説く。

しかして華嚴經は、これ普賢等の菩薩のための所説なるが故に、その教主をば他受用報身佛となすものである。重々無盡法界の玄趣は、なほこれ普賢因分の所明にしてその毘盧遮那の果界に至てつは不可説不可得の境となすものである。されば自性本地法身の説法の深趣を開顯するものは獨り眞言密教である。しかして眞言密教の法身説法の義には、唯識家に云ふ生正智解の説法、即ち法身の體は、正體知の爲めに所縁の境となつて正智を生せしむる義も存すべく、また六塵の擧體、これ眞如法身の隨縁相なるより、松嶺溪聲をもこれ如來の廣長舌と觀る義趣も存するなるべく。また天台に云ふが如く寂にして照、この寂照一如の大覺體、一切に遍じ、衆生の心根に覺作を冥助するを法身説法の義となす意義も存するのである。一切の分別戲論を絶せる寂照一如、理智不二の自證の體は、法身の大覺體である。しかも未だ此の境を體せざる因人よりいへば、たゞこれ不可得の體である。無相の理である。しかしながらかゝる大覺體を現證せる一切諸佛は、一切衆生のために一切時一切處に自在無礙の靈用を示現せられつゝあるのである。またこの大覺を現證せる大覺の自體より、この大覺體を觀る立場がある。即ち果分に住して果體を自證する境地がある。この境地よりいへば、大覺體は寂照一如、常寂の體にあらずして無盡の功德を開顯しつゝある勇健の大覺體である。無限活動の靈的生活體である。

この大覺體には、自體自らを理解し自證する一々心識乃至不二心があると共に、この自内證三摩地の體を表現する如義語ありて、三世常恒にこの自證の境を開説せられつゝあるのである。所謂唯佛與佛、各説三密、自受法樂の體なると共に、化他大慈悲の本願力に依り、一切衆生をしてこの大覺體に引入せられつゝあるのである。大日經には大毘盧遮那成佛神變加持といひ、同經の疏には大日如來の所住の獅子座の釋に

今此宗明義言三師子者。即是勇健菩提心。從初發心以來得精進大勢無有怯弱猶如師子隨所執搏必獲無遺。即是自在度人無空過義也。

また大日經に大日如來の自眷屬として説かれたる十九執金剛四大菩薩等は、これ大日如來の無盡の功德を任持する差別智身なるが、この内大二眷屬より觀るも、如何に自證化他の無盡の功德を具足し、その大覺の自體が自體自らを開顯せられつゝあるやを了知せらるべく、またこの内大二眷屬に圍繞せられて、如來自ら三平等句の法門を開演せられつゝある等より觀るも、また淨菩提心の功德を如實に開顯する道を説かれたる、三句の法門より觀るも、また金剛頂經の五智五轉の法門は、この法身大覺の體を開顯せられたるものなるが、この理(中央法界體性智)智(東方大圓鏡智)理智不二(南方平等性智)の大覺體が、三世常恒にその三摩地を開説し(西方妙觀察智)一切をしてこの大覺體に引入しつゝある無盡の業用を圓具(北方成所作智)する大自在者なることを知らるゝのである。されば大日經疏には



是等世間以少福願尙有如是不思議用。何況如來法身而不能成就如是自在神力加持神變耶。然常途說法或云法性<sub>一</sub>或云法身<sub>一</sub>寂靜如空無所動作。都不說具足如是力用。以爲凡起神變<sub>一</sub>皆是有爲之心三昧之力。而不言法體如是<sub>一</sub>此其未了也

大師は付法傳に法身如來が、三世常恒にその自覺自證の境を開演せられつゝあることを釋述せられ法身智身二種色相。平等平等遍滿一切衆生界一切非情界。常恒演說眞實語如義語漫荼羅法教<sub>一</sub>等と明し給ひたるが、大日經の一切持金剛者皆悉集會の文を同疏に釋して

心王所住之處必有塵沙心數爲眷屬。今者心王毘盧遮那成自然覺。爾時一切心數無不入入金剛界中<sub>一</sub>成如來內證功德差別智印。如是智印唯佛與佛乃能持之。約菩提義<sub>一</sub>即有無量無邊金剛印。約佛陀義<sub>一</sub>即有無量無邊持金剛者。由<sub>一</sub>此衆德悉皆一相一味到於實際<sub>一</sub>故名集會<sub>一</sub>、

この釋文を深く解すれば、大日如來大覺を現成し給ふとき、一切世界の一切衆生は悉く大日如來の大覺のうちにつままれ大覺の大系統に連り、如來の無盡の智印を持する大日如來の眷屬たる祕義を成せる意である。たゞしこは如來の大覺の境より見給ひたる法界の實相である。我等は空三昧に住し、分別の戲論を絶するところに、この如來自證の加持力に接するのである。常恒三世の法身の說法を聽くのである、警覺開示せられるのである。この法身の說法はこれ祕密の本體たる法身如來の三摩地の果體を開說せられたる眞實の眞言である。この眞言に乗じて、法身の果體に通達せらるべきである。

しかして空三昧に住し、法身の說法を親聽せるものは金剛薩埵である釋迦牟尼如來である。即ち唯識家等には法身說法とは、生正智解所謂菩薩が眞如法身を觀境として正智を生ずる義に解し、天台にては正智を以て眞如法身を現證せる寂照一如の法身大覺體が、衆生の淨菩提心に冥資するを法身說法なりと云ふ。しかも法身をば言心永寂の無相寂滅の體となすものなるが、眞言密教にては、これらはなほこれ因人所見の法身觀にして、法身の眞實體を如實に開顯せざるものなりとなす。即ち眞言密教にては、法身には法身自ら自體を自證自知する聖智あり、自體相應の如義語ありて、自證の三摩地を三世常恒に自眷屬に開說せられつゝある眞實義を明す。この法身の說法、これ眞言密教である。

第二祖 金剛薩埵

金剛薩埵は、法身如來の所說の法門を、聽受せられ、これを結集し給ひたる尊である。付法傳に曰く

第二祖轉曰囉薩恒轉摩訶薩恒轉。親對法身如來海會。受灌頂職位。則說自證三密門。以獻毘盧遮那及一切如來<sub>一</sub>便請加持教勅。毘盧遮那如來言。汝等將來於無量世界。爲最上乘者。令得現生世出世間悉地成就。具如經說<sub>一</sub>。

眞言密教は、これ法身如來自内證の境界即ち如來の三摩地の境を開說せられたる教である。しかして如來自内證の境とは、心王の毘盧遮那自然覺を成ずるとき、塵數難思の心所眷屬悉く、心王大毘盧



遮那の覺體に住し、大日覺王の大系統に連り、無數の諸尊、皆これ一相一味到於實際の聖者にして、心王の大日如來、この自性所成の眷屬と三密平等句の法門を説き給ふ境である。この第一實際妙極の境は一といへば、法界唯一の毘盧遮那法身である、多といへば各々の諸尊皆心王毘盧遮那の體を全うせる具體法身である。しかも無數の菩薩衆の中には、金剛手がその上首にして、五智八葉九尊の心王の諸佛の中にては、毘盧遮那如來が究竟最上の尊である。されば無數の諸佛諸菩薩在しますも、如來の三摩地の體とは、果よりいへば、毘盧遮那如來にして、因よりいへば金剛手菩薩である。即ち三摩地の自體は、毘盧遮那法身と金剛手を以て盡す。此の如くの毘盧遮那と金剛手の二尊の關係をいへば毘盧遮那如來は本來究竟眞實の自證の大菩提に安住し、三世常恒にその自證の三摩地を法界に開顯し、自證の加持力を法界の衆生に蒙らしめ給ふ。衆生は冥にその加持力を被れども、痴暗の迷霧深うして、法身自證の加持を如實に體するを得ず、因分の菩薩は分に體するも、その全體を如實に體せず、この如來自證の加持力を如實に體するに至れるを果上の人となす。その果上の無數の心所の諸尊の中、金剛手菩薩が上首である。金剛手は如來と同一の覺體に住し、如來自證の加持力を如實に體するに至れるをば、法身如來より灌頂の職位を受けたりといふ。已に心王の毘盧遮那の法界加持力を如實に體するは、これ自心本有の大覺を顯現せるものである。かく自心本有の大菩提を如實に現證するは、これ同時に自證の三摩地を十方に表現するものである。

則說自證三密門。以獻毘盧遮那及一切如來。

かく毘盧遮那如來の法界加持力を如實に體するは、これ毘盧遮那如來に警覺開示せられたるものである。自心本有の菩提心の金剛寶藏を開見せるものである。菩提心の鐵塔を開見せるものである。常恒演説の如來の説法を結集せるものである。已に大日如來の遍法界の自證の加持を體し、如來の三密を持す、これ所謂 vajrapāṇi 即ち金剛手また執金剛である。

眞言密教の根本の本經を大日如來より聽受し、結集せるものは、金剛薩埵である。大師は大日經開題に大日經の最初の信成就の句たる如是我聞の文を釋し

問何人如是指語。答有三釋。初 *वज्रपाणि* 之詞也。次 *वज्रपाणि* 親之指言也。三 *वज्रपाणि* 爾有無三人増減。 *वज्रपाणि* 者金剛薩埵釋云。離傳聞一出工言。我金剛薩埵親從大日尊聞也。復次廣眼尊親指自證境。表如實智。說言如是我見聞覺知。此則如來爲達者以一句總說諸法。上地人一字一句中悉能解諸法盡也。云。

杲寶の「大日經疏玄談」に如上の意を述して

此中作三重釋。一金剛薩埵言。二大日尊言。三 *वज्रपाणि* 爾有言也。 *वज्रपाणि* 爾有者。一字一文遍法界。無始無終互三世。一一聲字皆帶理趣。法然而有誰人造作耶。次大日我聞者大日世尊發如實智。見聞如是法然理趣。唱云如是我聞也。後薩埵我聞者金剛手從大日尊親聞之。結集之日云如是我聞也。今所論約薩埵結集。兩部大經皆對告金剛手。結集流傳當其仁。是故東寺一家祖相傳以金剛手爲結集者也。他門兩祖釋雖入密家猶未脫顯網。顯密二教俱爲釋迦說。故以阿難爲結集者。凡如是我聞句次第相承有五重。一 *वज्रपाणि* 爾有無人造作。



二大日世尊之言。三金剛薩埵之言受以上三章如次自性自受用他受用三身也。四金剛薩埵受二大日勅。降闍浮提現釋迦身。教阿難唱如是。我聞。此是變化身也。五阿難受佛敕。結集諸經之時正安此言。此是等流身也。然則釋尊唱是言。阿難安此言。尋其源起自理佛智佛內證。兩部大經所安之如是我聞句流在釋迦教中。而如他家所傳者。依釋迦教勅兩部大經似安此言。蓋泳派忘源之謂歟。

本經の結集者は、金剛薩埵である。金剛薩埵大日如來の所説の經を結集すとは、大日如來より加持灌頂せられ、その自證の加持を如實に體し、法身の三密門を任持し、自證の法門を説くに至りしをいふ。故に敎の最初の如是我聞とは、これ金剛薩埵の言である。即ち金剛薩埵親しく大日如來の自證の加持を如實に體するに至りしをいふ。しかもその金剛薩埵の蒙りし自證の加持灌頂の本源は、大日如來如實知を發して、是くの如くの法然の理趣を證見するにあるが故に、大日如來の如實知を發し、自證の境を體するをば如是我聞といふ、即ち二に大日尊の言とはこの義である。また大日如來の大覺體には自ら能覺の智と所覺の法然の理趣とあり、その大日如來の所覺の法も、また自然法爾の大自然體なり。この自然覺體これ諸佛の師なりと共に大日如來の究竟の覺體にして、一切經の流傳の本源の體なるにより、この究竟の覺體に約して如是我聞をば釋迦爾の有なりと釋せられたものである。

しかるに果鈔には更に轉釋して、二義を出し、金剛薩埵、大日如來の勅を受けて闍浮提に降り、釋迦の身を現じ、一代の説法の經の最初に、阿難に敎へて如是我聞の句を置かしめたり、こゝに阿難尊者は釋迦如來の敎を受け、諸經結集のとき諸經の最初に此言を安す。しかれば如是我聞の句の本源を尋ねれば、大日如來の内證を體し親聽せる金剛薩埵が兩部大經の首に安するにあるも、漸く流傳して釋迦如來所説の經の最初に安せらるゝに至りしものなりとするものである。

此の如く本經の如是我聞の義、即ち大日經の結集の人について細かに論ずれば、種々の解釋あるも、弘法大師の所説に依れば、金剛薩埵を以て大日經のみならず、金剛頂經の結集者となすものである。金剛手を以て兩部大經の結集者となすは、兩部大經は何れも金剛手を對告衆となすに依る。しかして金剛手が、大日如來より自内證の法門を演説せるを聽受し結集せる秘旨を尋ねれば、金剛手が大日如來の自證の加持力を蒙り、法身如來自證の境を體し、法身の三密を任持するにあり。しかれば金剛手の結集の源流を究むれば、大日如來の自證成佛にあり、またその大日如來の自證成佛の體を究むれば、大日如來如實智を發して、法然の理趣を現證し、その法然の理趣と一體となれる大覺體にして、素より本有の理と修生の智と一體不二の大覺體なるも、而二門よりいへば、本有本覺の理と、修生始覺の智と分つて解せらるべきである。大師はこの而二門より釋せられて、如是我聞をば釋迦爾の有の言と、大日尊の言との二釋をなし給ひしものである。

かくの如く種多の解釋をなし得らるゝも、東寺一家は祖々相傳して金剛手を以て、兩部大經の結集者となすものである。



しかるに台密にては、慈覺智證兩大師は、密教を傳ふといへども、顯教を主として密教を解するもの、所謂猶未だ顯網の域を出でざるものにして、顯密二教俱に釋迦牟尼如來の説と爲すが故に、兩部大經をも阿難尊者を以て結集者と爲すものである。即ち如來入滅の後、阿難尊者遺教の結集に當り、佛勅を承けて、大小乗の諸經の初めに如是我聞の言を安ず。しかして兩部大經既に釋迦の説と爲すより阿難を以て結集者となすものである。尤も台密にても異説あり、慈覺安然是、兩部大經の結集者は、金剛手を主とし、阿難を伴となし、智證は阿難を結集者となすものである。

顯密二教共に、釋迦如來の所説なりと云ふ説よりいへば、一切經の最初の如是我聞は阿難の安じ給ふものなりといふことに歸すべきものなれども、弘法大師の説は、兩部大經は大日如來の所説にして隨つて結集者をば金剛手となすものである。しかして此の兩部大經の結集者たる金剛手とは、金剛頂經、攝眞實經、守護經等に依れば、これ即ち釋迦牟尼如來である。悉多太子所謂一切義成就菩薩は、空三昧に住し給ふとき、如來の警覺開示を蒙り、法の眞實義を現證し、究竟の覺を成せられ給ひしものである。法身説法を聽受し得べきものは空三昧に住して根本無明を斷じたる者ならざるべからず、しかして此世に於て眞に空三昧に住し、根本無明を斷じ給ひたるは、釋迦牟尼如來である。また法身の説法を聽くとは、法身大覺の自證三密の加持力を蒙り、その法身自證大覺の境を體するを云ふ。かく空三昧に住するとき、法身自證の大覺三密の加持力を蒙り、警覺開示せられ、つひに自證大覺の體を現

證するに至りしは、釋迦牟尼如來なるより、經に、悉多太子たる一切義成就菩薩即ち金剛手とは釋迦牟尼如來なりと説かれたるものである。大小乗一切諸經に、釋迦牟尼如來の現證し給ひし法は、法然常住なりと説かれ、またこの法を現證せられたる先覺者、即ち先聖の在しますことを説けり、即ち釋迦如來が出世不出世に關せず、この法然常住の法と、この法を現證せられたる先覺者たる佛陀の實在し給ふことを如來自ら開説し給ひしものである。しかしてこの法然常住の法、久遠實成の常住の佛身とは、これ理智二法身にして、この理智二法身は、三世常恒にその自證の三昧を演説し顯現し給ひつゝあるのである。釋迦牟尼如來、この土に出現し給ひ、この法然常住の法、久遠實成の佛陀の實在を現證し、この法然の法、久遠の佛陀を開覺せらるべき道を開説し給ひしものである。

かゝる法然常住の法、久遠實成の法身の大覺の境に直入直證する法門を開示するものは、眞言密教なればかゝる佛教の根本大義より觀て法身如來の説法を聽き、その經の本義を結集せるものは釋迦牟尼如來、即ち金剛薩埵なりとなすは、よくその眞精神を傳へたるものなりといはねばならぬ。

### 南天の鐵塔

龍猛菩薩、南天の鐵塔に入り、祕密眞言教を金剛薩埵より傳授し、これを閻浮提に初めて流布せしものなりとの、祕密眞言教の鐵塔相承の説を、明かに高唱せしものは、弘法大師である。大師は付法



傳に金剛頂經義訣の文に依り、鐵塔相承の義を述べて曰く

金剛智三藏說。如來滅後有二大德一名龍猛。先持大毘盧遮那眞言。毘盧遮那佛而現其身。現無量身。於虛空中。說此法門及文字章句。次第令寫訖即滅。即毘盧遮那念誦法要一卷是也。時龍猛大德持誦成就。即至南天竺大菩薩藏塔前。願開此塔。於七日中。遶塔念誦。加持白芥子。打此塔門。至第七日。塔門乃開。塔內諸金剛神一時踴怒不令得入。唯見塔內香燈光明一丈二丈。名花寶蓋滿中懸列。又聞讚聲。時此菩薩至心懺悔發大誓願。諸金剛神出來問曰。汝有何事。答曰。如來滅後邪林繁鬱大乘欲滅。聞之此塔中有三世如來一切法藏。願受持利濟群生。金剛命入。入已其塔尋閉。觀其內。即法界宮殿毘盧遮那現證宰都波是也。三世諸佛大菩薩。所謂普賢文殊等。皆住此中。即蒙金剛薩埵等灌頂加持。誦持所有祕密法門。宣布人間。又如前說。楞伽經如來懸記是其明證。

云々

またこの鐵塔は、これ如來神力所造、即ち龍猛菩薩の白淨の菩提心に依り感見せし塔にして、人の所造にあらざること、及び鐵塔中に安置しありし法藏は、これ釋迦如來所説の法にあらずして、法身大日如來所説の法門を、金剛薩埵これを結集し時を待ち人を待てるに、偶々龍猛菩薩の大機の人の開塔あるにより、これに眞言密教を傳授し給ひしものなりとは弘法大師の所説である。付法傳に

又問此塔者爲人工所造乎。爲當如何。答此塔者非人力所爲。如來神力所造。又問此塔中所有法藏者爲釋迦如來所説耶。爲何佛説乎。答非釋迦所説。何以故。應化佛不説內所證法。故。問若非應化佛説。爲法身説。答説此有二義。如法身説法章說。

上述の如く龍猛菩薩開塔して、祕密教を初めて人間に流布せしとは、これ弘法大師の創唱とも云ふべきものである。即ち羅什三藏譯の龍樹菩薩傳等に、雪山中に於て一老比丘より大乘經典を授かりしといひ、また龍宮に入つて大乘經典を傳へたることを記するも鐵塔より大乘經を誦出せしことを明かさず、また金剛頂義訣に依るに、時に大德有り、南天竺の鐵塔に入つて、金剛頂經を誦出せしことを記するも、その大德は龍猛菩薩なることを明記せず、されば龍猛菩薩南天竺の鐵塔より、祕密眞言教を流傳したることを唱導せしものは弘法大師なりと云ふも不可なかるべし。

かくの如く龍猛開塔のことを大師唱導し給ひしかば、その當時よりこれに對し疑難を懷くもの尠からず、かの宗叡の眞言疑目、道詮の群家諍論、或は徳一の未決等その代表的のものなるべし。蓋し鐵塔開見説は、大師に依つて高唱せられたるものゆゑ、これに對する疑難も、大師以後のことにして、印度、支那及び本邦にても、大師以前には存せざりしなり。

此等の疑難に對し、大師は付法傳に一應その會通あり、後學また「疑目」や「未決」等の疑難を會せんとして、漢譯經中より、義訣と全然同一義ならざるも、それに似通ひたる文を尋釋し、此等の疑難を通し、鐵塔説を成立せしむることにつとめたるものあり、果寶の玉印鈔の第一に、以上の疑難を會通せんとし、大日如來が金剛薩埵に授けし、證文として、教王經第一及び聖位經の文を擧げ、また金剛薩埵が龍猛に附法せし證文として、楞伽經第九即ち楞伽の懸記を出せり、玉印鈔には更に嚴郢の不空



碑文、或は三十七尊出生義等を引用し秘密の法門の相承は、大日如來、金剛薩埵、龍猛、龍智、金剛智、不空と次第相傳の説は傳統の眞義なりとせり、此等相承の文より觀れば、南天竺の鐵塔を開き金剛薩埵より祕密教を傳へたるものは、龍猛と觀るより外なければ、金剛頂義訣に一ノ大徳とあるを弘法大師は、これ龍猛と斷じ給ひしものである。しかして大師が南天竺の鐵塔を開き兩部大經を人間へ傳へたるものは、龍猛菩薩なりと斷ずる、唯一の依憑たりしものは、楞伽經懸記と龍猛菩薩に密教の根本義たる法身説法の觀念ありしとに基くものである。

鐵塔に對しては、古來より今に至つて、種々の説あるも、大途左の數義に攝せられる乎。

第一 大師の付法傳に依れば、この塔はこれ人の所造にあらずして、如來神力加持により、龍猛菩薩感見せしものなり。宛も彼の無著菩薩が、彌勒菩薩夜夜兜率天より天竺の阿踰遮國の講堂に下り、四ヶ月の間、毎夜説法せられしを筆録せしものが、かの瑜伽師地論等なりとなすが如きは、これ無著一人感見せしものにして、他人の知らざるところなるが如く、南天の鐵塔も龍猛菩薩が自心内の佛塔を開見せしものと觀れば、これ所謂理塔にして事塔にあらず、しかれば鐵塔開見とは、龍猛の本有の菩提心を開見せしものにして、塔内安置の大日金剛頂の兩部大經とはこれ質多 *citta* 加栗多 *hrdaya* の二心即ち一心本有の理智の體なり、即ち所詮に約すれば、色心理智にして、能詮に約すれば、兩部大經なり、かく鐵塔を菩提心體と觀れば、この塔は、周遍法界、三世常恒の體にして、龍猛が有せしのみ

にあらず、一切衆生等しく有するものにして、佛智顯現せば、何人も見らるべき心爲佛塔なりとなす。第二、弘法大師の付法傳に依れば、鐵塔はこれ如來神力所變の功德の體にして、理塔と解すべきもの様思惟せらるゝも、而も金剛頂義訣の文より見れば、南天竺の何れの地にか實在せし事塔なりとも解せらる。かつ他の經疏のうちに鐵塔の存せしことを證するが如き文あるを見る。例へば賢首大師の探玄記第十八に

日照三藏云此城在南天竺。城東大塔。是古佛塔。佛在世時已有此塔。三藏親到其所。其塔極大乃至於今現在

これ日照三藏、此塔の南天竺にありしを親しく目撃せしことを、賢首大師に語れるを、賢首大師自ら記せるものである。

又、法華傳第十にも、此塔のことを記して曰く

昔外國有鐵塔。高丈餘於中安置芬陀利迦阿差摩、摩訶毘盧遮那經等梵夾。各有百千偈。

なほ義淨三藏の著の求法高僧傳の無行禪師の傳のうちに

龍宮祕典海中探。石室眞言山處仰。

の文あり、無行は唐代に入竺して、大日經の梵本を得たる人なるが、義淨三藏彼地にありしとき、眞言密教の祕典はこれ石室より傳へ得たるものなりとの説を聞きしより、かゝることを記せしものなら



んか。しかしてこの石室とは所謂鐵塔のことなりならん乎、西藏の所傳に依れば釋迦牟尼如來は多くの眞言密教を説かれたることを明かす。しかして吉祥時輪經等の祕密經をば南印度のアマラプテイ塔に於て説かれたりと云ふより、梅尾教授はこのアマラプテイ大塔は、これ所謂南天の鐵塔なるべしといひ、河口慧海師は西藏傳印度佛教歴史に、もし南天の鐵塔を地上に求むとすればアマラプテイ塔を措いて外に類似のものを見出すこと能はず、しかも西藏傳に南天の鐵塔と云ふ名傳らず、その證左を缺くが故に、アマラプテイ塔を以て南天の鐵塔となすに躊躇すといふ。何れにしても此等の説はこれ鐵塔をば人の所造にして歴史的實在の事塔なりしと見るものである。上述の如く、弘法大師の説によれば、鐵塔は人の作れる因縁事實を有せる歴史的實在の塔にあらずして、如來の威神力に因り、龍猛菩薩感見せしものなりといへば、これ現前事實の塔なりとするも、この事實はこれ不可思議の神力所現のものにして、人の所造にあらざるなり、さればこの事實に直面せざるものよりいへば、これ一種の理塔といふことに歸すともいひ得らる。即ち弘法大師の説によれば寧ろ理塔となり、金剛頂經義訣等の説によれば、人の所造の歴史的實在の事塔といふことに歸す。

而して中古の宗學者は、この理塔と事塔の兩説をば、法爾隨緣は一法の兩義なりとの宗義により會釋し、義訣の義は隨緣を表とせる事塔説にして、弘法大師は、法爾の立場より理塔説を唱導するも、法爾隨緣は一法の兩義にして、離るべからざるものなれば、南天の鐵塔は、假令、人の所造たる事塔

たりしにせよ、この因縁の事實がそのまゝ阿字本不生の顯現なれば、歴史的の因縁の事實は、これ如來不可思議の威神力の一活動の因縁なりと觀れば、人の所造の因縁の事實の塔たりしにせよ、如來威神力の所現なり、また塔はこれ淨菩提心體にして、三世常住の理塔なりといふ理趣と相違せざるものとなす。

第三、鐵塔開見は妄誕信すべからずとの説。龍猛菩薩は密教の祖師にあらず、隨つて鐵塔より密教を誦傳せるとの説は妄誕なりといふ義は往々聽くところなるが、それらの所説には、固より一致せる定説あるにあらざるも、密教なるものは、もと釋迦如來の所説にあらざるも、如來滅後漸次波羅門の咒禁や、天部崇拜等の信仰が佛教に竄入し、佛教内に所謂祕密教が浸潤し、つひに種多の祕密教の經典成立せるに至りしものなりとなす説である。

佛滅後の結集を見るに、大衆部の五藏のうちに禁咒藏あるより見るも、また佛滅三百年頃存せしといふ小乗の法藏部も、一切佛教を五藏に分類し、その第四に咒藏なるものありしより見るも、またこれを支那譯經の方面より考ふるも、佛滅七百年即ち西曆二世紀後漢の獻帝の頃、龍樹菩薩出世時代已に支那に大乘經の一部翻譯せられ、また密教に關する經の一部譯せられあるを見るも、密教の一部は已に龍猛以前に存せしを觀る。されば龍猛が眞言密教を大成せるにあらずして密教の大部分ことに兩部大經等は、これ龍猛より數世紀以後即ち密教なるものは、大抵西曆四世紀頃より六七紀の間に成立



せしものにして、かの富蘭那文學や咀特羅の影響をうけて成立せしものなり、即ち兩部大經の成立は龍猛より遙か後代にあり、しかるを日本の密教家は龍猛が、南天の鐵塔を開いて密教を傳へたり等と稱し、密教の起源を龍猛に歸するは、龍猛は大乗佛教の開創者として尊敬せられ居たるより、密教にも特別の權威を確保せんがために、その創稱を龍猛に歸せるものなりとなすものである。大村西崖氏の密教發達誌等、その他近時密教の起源を語るもの多くはかゝる立場より説をなすものあるを見るのである。

第四、鐵塔に就ての管見。吾人は傳統の説なるが故に、強てこれを辯護しまたその説を固執せざるべからざる理を認めず、しかも龍猛菩薩鐵塔開見し、如來自證の境を説かれたる祕密教を人間に流布せられたりとの傳統の説には、深甚の意義の存するを認むるものである。

大師は眞言密教なるものは、釋迦牟尼如來の所説にあらずして、大日如來の説なり、その大日如來の説法を龍猛菩薩が南天の鐵塔を開き、これを人間に傳へたるとの説を唱導せられたるは、近代の如く大乗佛教は非佛説なり、或は佛教教義は漸次發達開展せるものなり等の説を唱へらるゝ時代なればともかく、大師の時代に於て、眞言密教は、一切佛教の究竟の教にして、しかも眞言密教は釋迦牟尼如來の所説にあらずして、大日如來の説なり、その大日如來の説を龍猛菩薩が始めて人間に流布せる

ものなりとの説を宣示せられたるは、當時に於ては甚だ大膽なる論斷なりと言はざるべからず、しかるにも關らず、堂々とこれを高唱せられたるには中心深く信するものありしに因るは明かである。これ佛教々學上よりの辨證と、その體驗と、令法久住皆成佛道の本義等より觀て、かくも鐵塔相承を高唱せられ給うたものである。しかして、鐵塔説を唱導せらるゝについては種多の依憑あるも、その根基をなすものは、前敍の如く、大師は入佛道の最初より、眞言祕密の法を修せられ、法身如來の本果を證し給ひ、如來の心肝即鐵塔の本體を得せられたるによる。南天の鐵塔とは、眞實常住、金剛不壞の法身の體にして、またこの塔に安置せられありし兩部大經は、この法身の三摩地を開説せられたるものである。

塔 Sūpa は、もと釋迦牟尼如來の舍利 Śarira を奉安せられたるものである。即ち釋迦牟尼如來は涅槃に歸入し給ひしも、金剛不壞の遺身の舍利は、如來常住の功德身を表するものである。舍利の堅固常住不壞金剛の體なることは、康僧會の吳の孫權に示したる事蹟に徴するも知らるゝのである。また塔は金剛不壞の法身の身を説かれたる經卷を安置せられたるものにして、塔即法身如來である。しかして法身の觀念は、佛教一貫の眞理趣にして、眞言密教に至つて究竟せるものなることは前來所述の如くである。

蓋し釋迦牟尼如來の一代佛教の要は、無我法中に眞我を開顯するにありといひ得らる。しかるに印



度及び支那にては、多く無我の理趣開示せられ、その眞我の實義發揮せられざるものありしが、無我法中の眞我の實義を開説するものは弘法大師の眞言密教である。しかしてその眞我たる不壞金剛の法身の體性を表するものは鐵塔である。されば南天の鐵塔とはこれ法身如來の觀念である。所謂毘盧遮那現證宰都波である。

大師の説を今日より觀れば史實と一致せざるものあらんも、これを以て大師の鐵塔説を云爲すべからず、大師の宗を開き教を垂れ給ひしは、佛教を客觀的に歴史的に究明し、その研究の成果に依れるにあらずして、自ら佛道を修行せられ、その自證の三摩地の開顯にあり。この主觀的自己内證の三摩地の體をば客觀的に基礎づけ、以て人をしてその教旨を理解せしめ、これを廣く一切に傳へんとせられたるものである。かくの如く大師の説は、實修實證に依れる眞理趣の開顯なりとの體験的事實を省察せずして、單に客觀的研究のみにより大師の説を云爲せんとしては、大師の教の正鵠を得ざると共に、客觀的事實の眞意義をも得ざるべし、隨つて今日より觀て大師の説が客觀的事實の研究と一致せざるものありとも、大師の發揮せんとせられたる眞理趣には、何んら増減なかるべし。たゞ根本の問題は、大師の自證の三摩地の體の究明である。

即ち小乗佛教よりいへば現象は、無常無我の有爲の妄法にして、唯識の説に依れば遍計所執の妄假なり、依他の假有である。眞如緣起の理を開説する實大乘の説によるも、現象はこれ無明有力によつ

て現起せし虚假の法なりとなすものである。しかもかゝる諸説に依りては、衆生の當相に眞實永遠の理趣を體する即身成佛の眞實義が成せないのである。

智度論に衆生法性に入れば法性となりといひ、楞伽經には、諸法の無自性無我は、衆生の所見にして、自性常住は聖惠眼の所見なりといへるが如く、眞實常住の眞實在は如來の大覺體である。大覺を體せる聖惠眼より見たる果界である。

この如來の果體を開顯し、法身常住の體性と、衆生本有の覺體とを開説するものは眞言密教である。南天の鐵塔は如來の身肝たる舍利を體とせるものにして、これ如來よりいへば、法身常住の體性にして、衆生よりいへば本有金剛薩埵の大菩提心體である。

しかして眞諦果海に於ける法身の説法と、この説法に警覺せられ、その本有の大菩提心を現證せらるべき道を明すものは、金剛頂經と大日經なれば、この兩部の大經をば南天の鐵塔より誦傳せられたりとなす深意思ふべきである。また法身説法の觀念を有せられしと共に、十方諸佛の實在を明かし十方の諸佛を念じ、現在に於て初地の位に登り、法身の説法を聽けるものは龍猛菩薩なれば、龍猛菩薩南天の鐵塔に入り、法身説法の兩部の大經を誦出せられたりとの説には測るべからざる深趣が存するのである。また我が高祖弘法大師入佛道の最初より、直に佛地の三摩地に住する眞言密教を修し、法性の眞際に徹し、如來の果境に一切衆生と共に直入直證せんとして法身説法の經にして鐵塔相承の兩



部大經を流傳せられたる祖意仰信すべきである。

## 龍猛菩薩

第三祖者。昔釋迦如來掩化之後八百年中。有二大士。名那伽闍賴樹那菩提薩埵。唐言龍猛菩薩也。舊云龍樹龍樹也。 誕迹南天。化被五印。尋本則妙雲如來。現迹則位登歡喜。或遊邪林。而同塵同事。或建正幢。以宣揚佛威。作千部論。摧邪顯正。上遊四王自在處。下入海中龍宮。誦持所有一切法門。遂則入南天鐵塔中。親授金剛薩埵灌頂。誦持此祕密最上漫荼羅教。流傳人間。楞伽經及摩訶摩耶經等釋迦如來所懸記。則是其人也。彼楞伽經說。我乘內證智安覺非境界。如來滅世後誰持爲我說。如來滅度後。未來當有人。大慧汝諦聽。有人持我法。於南大國中。有大德比丘。名龍樹菩薩。能破有無見。爲人說我乘大乘無上法。證得歡喜地。往生安樂國。云云。

上來引用の文の如く、弘法大師は那伽闍賴樹那 *nāgārjuna* 龍樹また龍猛と翻するも龍猛の譯を用ひらる。しかしてこの龍猛菩薩を以て眞言密教附法の第三祖となす。即ち南天の鐵塔の中に入り、金剛薩埵に遇ひ奉り、灌頂を受け祕密眞言乘を誦傳し、人間世界に傳へられたるは龍猛菩薩である。上來所述の如く大師は龍猛菩薩を密教の開祖となし給ひたるは、惠果和上の口説、不空三藏表制集、金剛頂經義訣、更に經典にその本據を求められ、楞伽經の懸記等に依られたると共に、龍猛菩薩が眞言密教の根本觀念を有し、密教の體驗者たりしによる。即ち龍猛菩薩の大智度論に密教の根本觀念たる法身

説法の義、及び眞諦果界に有佛有衆生の曼荼羅の實義を釋せられ、また龍猛の作として傳へられたる菩提心論に勝義、行願、三摩地の三種の菩提心を明され、三摩地の菩提心、即ち法身自證の體に直入直證する即身成佛の義を開演せられ、また同じく菩薩の作として傳へられたる釋摩訶衍論には眞如、生滅を超越せる不二果界の義、及び法身如來には法身自證の覺體を自ら證知する一々心識不二心あり、また此の自證の覺體を開説する如義語を有し給ふ等の祕義を明かさる。此の如く菩薩は眞言密教の根本義を開示し給ふと共に、現生證果、現身に初地歡喜地を證得せられたる眞言密教の體驗者たるに依り、菩薩をば眞言密教の開祖となし給ひしものである。即ち大師の二教論、十住心論、祕藏寶論、卍字義、聲字義、開題等に如上所擧の大智度論、菩提心論、釋摩訶衍論の文義を引用せられ以て眞言密教の實義を釋成せられ給うたのである。大智度論には密教教旨と思はるゝもの種多あるも、大師は法身説法の義と、眞諦有佛有衆生の文義を引用せられ給うたのである。即ち顯密二教論に法身の説法は密教にして、報應身の説法は顯教なることを判釋し、その法身説法の義を釋成せんとして、金剛頂經大日經の經文を引證せらるゝと共に、智度論第九の卷の法身説法の文を引用せられ、また二教論には三論、法相、天台、華嚴の顯教の四家大乘の根本義を提示し、以て眞言密教と淺深優劣を判せられ、華嚴の性海果分、天台の三諦圓融、法相の勝義諦、三論の八不中道その所明同じからざるも、其の究竟に至つては、法性眞諦は寂照不二、無相一味の法にして、佛なく衆生なく、所謂眞諦は彼此の差相



を絶し、生佛の假相を泯すとなすに至つては一なることを釋せられ、次に眞言密教は顯教にて無相一味の法と觀る眞諦果界に佛あり衆生あり、この眞諦果界の生佛は、これ所謂密號名字の生佛にして、等しく毘盧遮那法身の差別智印を任持する曼荼羅の聖者なることを開演せんとして、智度論第三十八卷の二重の二諦義の文を引證せられ、初重の二諦義の中に眞諦に佛なく衆生なき義を明かすは顯教にして、第二重の二諦の眞諦に佛あり衆生ある義を開示せるは眞言密教なることを判せらる。即ち俗諦は人格的共同の生活體であるが如く、眞諦は自心自覺の體性を如實に現證し、その眞實性を、如實に表現しつゝある靈的共同の生活體である。しかしてこの大覺體は一といへば、獨一不二の毘盧遮那具體法身にして、多といへば無盡無數の諸佛菩薩在しまし、三世常恒に各各自の法界三昧を顯現せられつゝあるのである。三世常恒に各各自心自覺の内證三昧を演說せられつゝあるのである。しかして俗諦と眞諦これまた而二にして不二なり、未だ自心實相を體せざる迷人よりいへば二諦不二ならざるも自心實相、眞諦の法性を現證せる果人よりいへば、俗諦の一切は法身大覺のうちにつゞまれ、法身大覺の大系統に連らなれるものである。しかして眞言密教は一切衆生をして、この如來自證の境に直入直證せしめ、如來の妙功德、自心の眞實相を如實に現成せしむる眞實道を明かすものである。然れば法身說法と、眞諦に佛あり衆生ありとの説は畢竟一理である。即ち法身如來は眞諦果界に唯一人ましますにあらずして、無盡無數の妙眷屬あり、各説三密、唯佛與佛、自受法樂の眞諦果界の眞實相が、

そのまゝ俗諦に感應加持せられ、衆生警覺の如來の說法となり、果界に引誘の自在無碍の無盡の妙業たるのである。されば法身說法と、眞諦に有佛有衆生の義を以て、眞言密教の深意を盡くせるものである。大師は此の如くの眞言の實義を開示せんとして、龍猛の大智度論を引用せられたるものである。

また大師は龍猛の作として傳へられたる菩提心論、釋摩訶衍論を密教の眞實義を釋せる密藏肝心の論藏となし、この二論を大師の著書のうちに引用せられ給うたのである。即ち菩提心論に勝義、行願、三摩地の三種の提心を説かれたるが、その勝義行願とは空と有、眞如と萬法、實相と因果、無我と慈悲、止と觀との大乘佛教の二大精神にして、この空有止觀の妙道を全うして、無上大覺を成就するに至るのである。その無上大覺の體か三摩地の菩提心である。即ち普通佛教は空有止觀の妙道を修し、三大無數劫を経て無上大菩提を成ずる道を説くものなるも、眞言密教は入佛道の最初より勝義行願、空有眞如生滅の相對界を超越し、直に如來果地の三摩地の境に直入直證する教である。しかして現生に佛德を成ずる即身成佛の道は、たゞ如來三摩地の法門に依つてのみ成せらるゝことを開示せんとして菩提心論を引用せられ給うたのである。菩提心論に三種の菩提心を説かれたるが如く、釋摩訶衍論には眞如、生滅、不二の三門を開說せらる。しかして眞如生滅はなほこの顯教の因界の法門である。即ち生滅の差相を遮して無相一如の眞如の理に歸することを明かすものなるも、密教は直に不二果分



に住することを顯示せんとして、この論を密藏肝心の論藏となし給うたのである。なほこの眞諦果界即ち法身大覺の體は、普通佛教にては言説を絶し、心慮を絶したる無相の法なりとなすゆゑ、法身の説法を開説せざるも、密教にては法身をば、かくの如く言斷心滅無相の理なりと觀するは、これ因人より觀たる法身觀なり、法身自體よりいへば、法身には自らの覺體を理解し、自證する心智あり、またこの果界自らの體性を宣示する果體相應の言語あり、以て三世常恒にその果體を開演しつゝある祕義を明すものである。しかして釋摩訶衍論には、十種の心識及び不二心を明し、前九の心識にては果界を認識し得ざるも、第十の一一心識及び不二心はこの果體を自證する心智なることを解釋し、また五種の言語を明し、前四種の言語にては、果界の實際を開説し得ざるも第五の如義語は、これ法體稱可の言語にして、よく果體の實相を宣顯すとすものである。しかして大師は顯教にて果體は不可説なり、不可言なり、心慮を絶すとすは、前四種の言語、前九種の心識に依るゆゑなるも、眞言密教にて、眞諦果界を自證覺知し、果界の實相を開説する祕義を明かすは、第五の如義語第十の一一心識及び不二心に依るものなることを釋成せんとして、大師の書のうちに釋摩訶衍論の五種の言説、十種の心識の文を引用せられ給ひしものなるが、要はたゞ一の法身説法の大義を成せんとするものである。菩提心論、釋摩訶衍論をば大智度論と同じく龍猛菩薩の書として、大師依用なされしも、菩提心論と釋摩訶衍論は、龍猛の作か否かは所論である。しかもその書の眞偽を論ずるよりも、大師は如何

なる義趣を宣顯せんとして、この論文を引用せられたるかをを知るを要となす。前敍の如く菩提心論も、釋摩訶衍論も畢竟していへば、法身の果體を開説して、この果境に直入直證せしむる祕密教の實義を闡明せる論藏と見給うたのである。

大師は智度論の法身説法及び、眞諦有佛有衆生の釋文を引用して、祕密藏の實義を釋し、かつ龍猛菩薩に密教思想を有し給ひしことを明かさんとせられたるも、大智度論には、なほ密教の教意と觀らるゝもの尠からず、大日經に阿字迦字等の字門の實義を説けり、しかして善無畏三藏の大日經疏には、智度論の四十二字門の釋文を引用して、大日經の阿字等の諸字門の實義を釋せり、その他大日經疏二十卷のうちに智度論中觀論等の文を引用せられたるところ多し、即ち大師は智度論の文を引用して、密教の教義を釋成すると共に、龍猛菩薩を密教の開祖となし給ひしが、善無畏一行の兩祖も、龍猛菩薩の論釋を以て、密教の教義を釋成し給うたのである。しかして善無畏三藏と大師と共に智度論の文を引用して、同一密教の教義を釋成せられたるも、その宣顯せんとする趣旨多少の相違存す、即ち大日經疏には、阿字無相の一心及び阿字の三諦義を釋成せんとして、智度論及び中觀論を引用し給うたのである。しかるに大師は無相の原底に表徳多法界の奧義を開説し、智度論の法身説法眞諦有佛有衆生等の釋文を以て、密教の多法界の實義を釋成せられたるものである。智度論は大品般若經を釋せるものなるが故に、無相不可得の實義を釋するものなれども、往々にして表徳の義がある、大師はその



表徳の義を以て密教の教義を釋成せられたると共に、この教の如實の體驗者として龍猛菩薩を密教の開祖となし給ひしものである。なほ智度論には密教思想と思はるゝもの多し、即ち諸佛無量の三祕密身の義、四十二字門の釋、定中の說法、或は諸佛を念じて現身に得益を成せし釋文、または現生に初地不退位を成ずる義等これ皆祕密眞言の義趣を明かすものである。

輓近佛教の歴史的研究盛んなりしと共に、密教經典の成立の時代等攻究せらるゝに至つた。しかし前敍の如く普通の佛教學者は眞言密教とは明咒または陀羅尼がその本體の如く考ふるより、その起原は遠く吠陀にありとなし、佛陀は明咒の誦持を禁じ給ひたるも、明咒を誦持せし婆羅門の徒が佛教に歸し、本と誦持せし明咒を潜かに誦持せしものが佛教内の咒藏の起原なりといひ、或は釋迦牟尼如來もまた善咒の誦持を教へ給ひしものが眞言密教の起原なり等と解するものあるを見る、大師もまた二敎論に六波羅密經の五藏の説文を引き、第五の陀羅尼藏これ眞言密教なることを釋し、その他大師の書のうちに明咒が眞言密教なることを明かされたるころ多し、しかも梵天、帝釋等所説の咒明即ち婆羅門所用の明咒は、これ眞言密教にあらざることを示され、また釋迦牟尼如來所説の經中にも明咒陀羅尼あるも、これまた眞言密教にあらざることを判釋せられ、たゞ法身如來の所説のみ眞言なることを開示せらるゝところに近代の佛教學者の眞言密教觀が大師の眞言密教觀と一致せざるものがある。即ち大師は咒藏が眞言密教なることを釋述しつゝ、しかも婆羅門所用の明咒及び釋迦牟尼如來所

説の陀羅尼はこれ眞言密教にあらすして、たゞ法身如來所説の眞言陀羅尼のみ眞言密教となすものである。これ如來常住の精神、久遠實成の法身に冥合する契機となるものゝ眞言なりとなすものである。しかも、法身如來に契合する契機となる法門はこれ法身如來の御聲である。法身の説法である、警覺開示の啓示である、加持の力である。大師は生滅の事象を超えたる久遠實成の法身如來の精神に生きる道を開示せんとせられたるものなるが故に、たゞ生滅の事象に依つてのみ凡てを解せんとする現代歴史的研究と一致せざるものあるは、もとよりそのところである。歴史的事象に依つてのみ解せんとするが故に、眞言明咒の起原をば婆羅門教にありとなし、また釋尊が明咒を往々説かれたるとなすも、その釋尊の明咒の起原をたづねて婆羅門教に歸するのである。即ち現代の多くの佛教學者は、明咒は釋尊が説き給はず、またその受持を禁せられたりしものなるも、明咒を誦持せし婆羅門の徒が佛教に歸入して後も、なほこれを誦持し、つひに佛教的立場より、この明咒を誦するに至りしものが咒藏の由來なり、これ眞言密教の起原となすより、眞言密教は釋尊の所説にもあらざれば、龍猛菩薩の所説にもあらずとなすものである。所謂佛教の咒藏なるものは龍猛以前に已に成立せるものにして、また大日經金剛頂經等は龍猛より數世紀以後に成立せるものとなすものである。或はまた龍猛に二人あり、西曆二世紀頃出生し、中論十二門論及び智度論等を造せし龍猛と、また西曆五六世紀頃出生せし龍猛とである。西藏傳に依れば龍猛に數十部の密教的著書あるが、こは第二の龍猛である。し



かして日本の眞言密教にて、龍猛を開祖となし、兩部大經を人間へ傳へたりとなす龍猛は西曆五六世紀頃存せし第二の龍猛である。この説に依れば龍猛、龍智、金剛智、不空等と相承せる年代等も自ら明かなるべく、即ち西曆二三世紀頃存せし龍猛、龍智と西曆七世紀頃存せし金剛智、善無畏等を以て師資相承なせしものなりとなすより、龍猛は三百歳、龍智は七百年の長壽者でありしが如く奇異の説を立せねばならぬことになるも、かくの如きはもとより解し得ざることにして、これ龍猛に二人あり密教經典を成立せしめし龍猛は第二の龍猛なることを知らざるより起りし謬解なりとなすものである。かくの如くは近代の佛學者に依つて唱へらるゝところなるも弘法大師が密教の開祖となす龍猛は、所謂楞伽經の懸記と一致せる龍猛、即ち西曆二世紀頃出世し中觀論、智度論等を造せし龍猛なることは、上來所述の如くである。即ち眞言密教の教相なるものは、兩部大經についていへば大日經の住心品なるが、この大日經の疏に西曆八世紀頃印度に存せし密教の阿闍梨にてブツダグファ Buddha-sūtra なる人の大日經の疏と、支那にて善無畏一行の兩祖に依つて成立せし大日經疏と、日本の弘法大師の釋とがある。(大師の大日經疏なるもの特に存せざるも、大日經開題其他大師の書のうちに大日經の文を引用せられて大日經意を釋せらる) しかして印度にて成立せしブツダグファの疏は寧ろ無相般若の教意にて大日經の阿字本不生の義を解せられ、龍猛の無相大乘教の義と一致せるもの、また支那にて成立せし疏は、殆ど中論智度論等の論文を引用し、三諦一實、無相一法界の義を釋述し、また

弘法大師は、阿字本不生の義をば表徳本有多法界の義を以て解せんとし、これまた智度論に依り、ことに密教の根本觀念たる法身說法の義を智度論に依て證せるものである。かく印度、支那、日本に互つて密教の教義に無相、三諦一實、本有常住等の教義に變遷開顯あるも、共に龍猛の中觀智度論の教意と合致し、またその論を本據とせるものである。此の如く眞言密教は、大智度論の撰述者であるところの西曆二世紀頃出生せし龍猛をば、密教思想を有せられしと觀るものなるが、弘法大師に至つては明かに眞言密教の根本觀念は法身說法にあることを闡揚せられ、その法身說法の義は龍猛に依つて説示せられたるより、龍猛をば眞言密教の開祖となすものである。即ち印度の佛教の諸大論士にして法身說法の觀念を有せしものは、龍猛のみなり、しかして兩部大經の正意は法身說法にあり、此の如く法身說法の觀念を有せられし、龍猛に依つて、法身說法を正旨とせる兩部大經を人間へ傳へられたるは、まことに深意の存するものがある。よし兩部大經は龍猛より後に成立せしこと明かなることありとせんも、その兩部大經に明かす法身說法の正旨は龍猛に依つて開説せられたるものなれば、この兩部大經の起原をば、龍猛にをくも何んら不可なるを觀ざるものである。即ち釋尊說法の根本觀念は法であり、法身である、その法身をば生きたる佛として、その法身の說法を明かせしものは龍猛なるが、かく佛法の根本義を究明して、法身說法の眞意義を宣顯せられたるは實に弘法大師である。

(昭和十五・五・十一)



## 一一 二教論及び寶鑰より觀たる弘法大師の根本教旨

## 一二 教論

弘法大師の著書の中、辯顯密二教論と祕藏寶鑰との二書は、所謂眞言密教に於ける判教の書である。即ちこの二書は佛教に明す無量の教義を、顯教と密教との二教に判釋し、佛教々義に體系を附し淺深の區別あることを示し、眞言密教は佛教の究竟眞實の旨を開説せられたる最も尊い教なることを闡明せられたるものである。即ち眞言密教は幾多の阿闍梨耶によつて印度及び支那日本に弘傳せられたれども、未だ判教をなし眞言密教の奥義を明かに掲げ出されたるものがなかつたが、弘法大師に至つてはじめて判教をなし、眞言密教の奥義を顯揚せらるゝに至りしものである。けだし印度の眞言密教は、教理よりむしろ實修を主とするものであつた。しかしてその教義に至つては、印度の大乘佛教であつた。龍樹菩薩の無相大乘教、または無著世親論士等の唯識の教義に依れるものが多い。その根本經典について觀るに大日經は多く無相中觀佛教の教旨にて解せられ金剛頂經は唯識の法相に依つて釋明されたるものをみるのである。即ち數百卷の眞言祕密部の經卷は、多くは曼荼羅を建立し、佛陀

善神を信奉し、その威神力を體驗する實修門たる事相に屬するものにして、その教相に至つては祕密部の典籍中わづかに大日經住心品等に説示せられてあるにすぎないのである。しかるに密教の經典が支那へ傳はりその根本經典たる大日經金剛頂經が唐の玄宗帝の開元年間に傳譯せられ講讀せらるゝに至るや、六期時代より唐代に互り支那にて開顯せられたる大乘教の深旨に依て解釋せられ、大いに密教の深意が發揮せらるゝに至つたのである。ことに善無畏三藏開元四年に大日經を印度より支那へ傳來せられ、これを翻譯するとともに、一行阿闍梨耶の爲に講せらるゝや一行阿闍梨は天台の教旨に通達せられたる人なりしより、龍樹の中觀、智度論、及び法華一乘等の教旨によつて解釋せらるゝに至つた。されば支那にて成立せし眞言密教の書のうち顯教密教の釋を見ることあるも、それは印度の大乗教でありし唯識中觀の三乘教をば顯教とし、支那にて開顯せる一乘教の教旨を密教となせしものである。日本の比叡山へ傳へたる密教、即ち傳教、慈覺、智證大師に依つて傳へたる台密にも顯教密教ある。日本の比叡山へ傳へたる密教、即ち傳教、慈覺、智證大師に依つて傳へたる台密にも顯教密教ある。一乘教とは根本の經典についていへば法華經、涅槃經、華嚴經、大日經、金剛頂經等である。比叡山の天台宗は支那の天台とことなり、天台、密教、禪、律の四宗を傳へるものなりしも法華經をその中心となすものである。したがつて法華經に依つて顯示せられたる一乘の教旨は佛教の最極究竟の深密の教意なりとし、大日經金剛頂經もその顯す理趣に至つては法華經と同一なりと觀て法華涅槃華



嚴經等の一乘經をば大日經と同じく密教と觀るのである。即ち台密にては密教に理祕密と事祕密の二義ありとし、五相三密の事祕密に至つては大日經金剛頂經にのみ明かざるものなるもしかもその所詮の理趣所證の理に至つては法華經も大日經も金剛頂經も同一なりと觀、またこれらの密教は共に釋迦牟尼如來の説かれたるものとなすものである。しかるに弘法大師の顯密二教の判教によれば、印度の大乗教たる龍樹の無相大乘教即ち三論宗、及び無著世親論士の唯識及び支那にて開展せられたる一乘教中の最極究竟の教旨を宣顯せると云ふ、天台も華嚴宗をもすべて顯教とし、大日經金剛頂經を密教とせられたのである。かくの如く弘法大師は印度の大乗教も支那の大乗教もすべて顯教とし、此等はすべて釋迦牟尼如來の所説なりとし、大日經と金剛頂經は諸佛の本地たる法身大日如來の大覺の體を開説せられたる佛教の究竟眞實の旨を闡顯せる密教なることを明かにせられたのである。かく印度及び支那にて開展せる大乘教をすべてこれ釋迦牟尼如來の説かれたる顯教となし、大日金剛頂經をば法身大日如來の説かれたる密教と判釋せられたるは、これ大師たゞに研究の結果によつてかゝる解釋をなせるにあらずして、眞實に佛道を修行せられ、その行に依つて密教の教意を體得し大日經金剛頂經を感得し、顯密の教旨を身を以て體驗せられたるによるものである。即ち大師は十八歳にして大學に入り諸典を研尋し、後、三教指歸三卷編せられ、儒道教佛教の三教を比較論究し、佛教こそ人生究竟の歸趣を開示するものなることを闡明し、自ら佛道を修せんとして十九歳のころ阿波の大龍の嶽

土佐の室戸の崎等に於て勤操大德より傳へられたる虚空藏求聞持の法を修し、したしく如來の靈感にふれ佛道の尊い理趣を身を以て體驗し、更に二十三歳のとき、最究竟の佛經を得んことを佛陀に祈請せられたが、精誠早く佛心に通じ、如來の靈告により、大日經七卷を大和の久米寺の塔中より感得せられたのであつた。しかしてこの經の深旨を明師について傳授せんとして、入唐の志を發され、三十一歳にして唐土に渡り、三十二歳の六月七月八月の三ヶ月に亙り長安の青龍寺に於て惠果和尙について灌頂壇に上られたるとき、大師は大日經感得以來多年の行によつて、已に大日如來の本果に住せられあることを現證せられたのである。こゝに於て惠果和尙より佛教の最究竟の奥旨を開説せられたる眞言密教の根本經典たる大日經金剛頂經等の經典を傳へられたのであつた。その委述を略するも、大師はもとより佛教の深要を尋求し、その研鑽につくされたと共に行に依つて佛教の最極究竟の法身大日如來の本果を現證し、自ら法身大日如來即ち遍照金剛の果位に住せられ、その尊き眞言密教を以て一切衆生を救濟せんとの一大信念より顯密二教の判釋をなし、眞言密教の深旨を宣揚せんとせられたのである。即ち印度の大乗教も支那の大乗教もすべてこれ釋迦如來所説の顯教なりとし、それを深く内に越え、應身の釋迦如來、報身の阿彌陀如來等の諸佛の本地身たる法身大日如來中心の佛教を開顯せんとせられたのである。かく印度及び支那に於て信奉せられ開顯せられたる應身佛報身佛とならびにこの應身報身佛の説かれたる佛教とを深く内に越え、これらの佛教をすべてこれ顯教なりとし、



これら諸佛の本身たる法身大日如來の果體を開顯し、法身中心の佛教を宣顯せられたるところに日本佛教創立の深い意義が存するのである。世人多く日本的佛教は鎌倉時代に開顯せられたりとなすも、鎌倉時代に弘傳せられたる淨土眞宗、法華宗、禪宗を深く研尋せば、何れも法身大日如來中心の眞言密教の教旨がその根基をなせるものなることを知らるゝであらう。

かくの如く弘法大師は印度及び支那の大乗佛教は未だ佛教の最究竟の理趣を顯はさざる顯略淺近の教なり、大日經金剛頂經に依る眞言密教は究竟眞實の理を明す密教なりとし、佛教に顯教と密教とありと觀て、顯密二教の判教をなし給うたのである。しかればその佛教の最極究竟の道體とはそもく如何なる理趣なりやといふに、佛法の最究竟の理は法身如來である。即ち釋迦牟尼如來は一代八十年の化益終りて拘尸那城外に入寂し給ひしも、釋迦牟尼如來の本身たる法身如來は常住不滅なりとは、小乘大乘顯教密教に一貫せる佛法の根本義である。しかしてその法身常住の觀念に至りては、小乘大乘顯教密教にわたり、その意義同じからざるものもあるも釋迦牟尼如來は緣起の法の實相を覺りて成佛せられ給へる旨を明かすものである。したがつてその緣起の法をば釋迦牟尼如來の師なりとし、また如來はその覺れる法と一體となり、法の常住なるが如く如來もまた常住なりとなすものである。しかしてその法身如來常住の意義を明かすに至つては印度の大乗佛教も支那の大乗佛教もほとんど一致である。所謂法身とは緣起の法の自性空寂滅の體である。かくの如く緣起の法の空寂滅の體を法身如來

となすが故に、法身といふも無神論的の體である。したがつてこの法身は色形もなく說法もなく直接に衆生濟度の靈用もなき非人格的理體である。しかるに弘法大師は、この法身如來は無相常寂滅の無神無我の眞如の理體でなく、生ける佛陀なりと觀給うたのである。即ち法身如來は無邊廣大なる形色を具有し、大智大慈悲の徳を具せる靈活自在の大覺者にして三世常恒にこの大覺の體を開顯せんが爲に說法し給ひつゝある旨を明かすものである。即ち印度の大乗佛教も支那の大乗佛教も常寂滅の無神論的法身より顯れたる報身應身佛には說法も衆生濟度の靈用の存することを明かすも、法身は無我無相の非人格的理體にして說法化度の妙用あることを開說せないのである。しかして衆生濟度の爲に法身より顯れ給ひし佛身は衆生救度の因縁つきなば、釋迦牟尼如來が涅槃の雲に隠れ給ひしが如く、常寂滅の法身の理體に還歸し給ふとなすものである。かの觀音授記經に阿彌陀佛も衆生救度の因縁つきなば、涅槃常寂の理に歸入し給ふと説かれたるが如きは、これ法身より顯れし佛身が衆生化益の因縁つきなばまた法身に還歸し給ふことを明かすものである。かく法より現はれし人がまた法に還歸すとなすが故に、人法不二を説きながらも常寂滅の法を眞實となし、法より現れたる人を非眞實の假法なりとなすものである。即ち一般佛教は報身應身の佛身を明かすもこの佛身は法身なる無神論的法の上に現れたる有神である、法よりあらはれし人なりとなすものである。しかるに弘法大師は印度支那の大乗佛教にて無神論的に説く法身佛をも有神論的に説き、法身如來に說法あり、衆生救濟の靈用あり、



法身如來は高く法界の頂きたる色究竟天に住し給ふと共に、十方世界に遍せざるなく至らざるなく、靈活自在、神用無碍の自在者なる實義を開演せるものである。かくの如く法身如來を有神論的に説けば佛教の根本義に相違せざるやの疑難あり、かゝる疑難の解説を二教論に述べられあるものを觀るに、大師は、法身觀に二面あり、法身佛を無相寂滅の空理なりと觀るはこれなほ無明煩惱を帶し、その煩惱の迷雲に遮へられ法身の眞體を如實に見ることを得ざる因人即ち人間の法身觀である。我等の如何なる能力を以てしても、絶對法身を如實に認識し得られないのである、したがつて人間よりいへば法身佛はたゞ否定的に一致せらるゝのみである。故に經には因人に對して法身を不可説なり、無相なり、空なりと説示せられ給うたのである。しかも法身の大覺體は空にあらず無にあらず、宇宙法界に眞實の實在はたゞ如來の大覺體たる法身の果體のみである。法身は諸佛の本地である。實在の中の眞實在、有の中の本有である。これらのことは大師は大日經金剛頂經の開題に開説せられたるが、二教論には

並約<sub>二</sub>因位談、非謂<sub>二</sub>果人<sub>一</sub>也。

と釋せられてある。即ち人間よりいへば法身は空である。しかも法身自體よりいへば法身は有空の對立を超えたる本有である。即ち一般佛教は法身を外よりわづかにその影像を見たるにすぎざるゆゑ、つひに法身は不可説無相なりと説くものなるも、眞言密教は深く法身の内よりその本體を開顯せられ

たる教である、法身如來自らその内證の境を開顯せられたる教法である。大日經金剛頂經に、法身如來の自在神變加持三昧より、自證の大智を以て一切衆生を平等に照見し攝取し給ふ普遍の加持力と、また自證の大智より一切衆生の各々の機根に應同して救濟し給ふ特殊の加持力たる無盡の加持身を十方世界に示現し給ふ祕旨を明かす。即ち印度及び支那の佛教は應身の釋迦如來及び阿彌陀如來中心の佛教なりしも、眞言密教は應身佛報身佛の大覺の本體たる法身大日如來中心の佛教である。かの法華の壽量品に近成の釋迦牟尼如來の實身たる久遠實成の報身佛を明かすが如く眞言密教にては報身大覺の根柢たる法身大日如來の大覺體を開顯せるものである。即ち印度の佛教は應身の釋迦如來中心にして、支那の佛教は報身佛を本とし、日本の佛教は法身大日如來を本とせるものともいひ得らるゝのである。支那の大乘佛教に諸法の實相を談じ、法身の常住法身の無限の功德を明かすものあるも、しかも密教より觀れば華嚴の教主もなほこれ報身佛である。しかして日本佛教には阿彌陀佛中心の淨土教釋迦佛中心の法華宗等あるも、淨土の阿彌陀佛も無始無終の法身佛の大覺體がその根柢となり、法華宗の釋迦佛も本有無作の法身觀がその根柢となれるものである。即ち印度の佛教は主として空三昧を明かすものなるが、この空三昧に依つて無明妄執の除かれたる菩薩の自性清淨の淨菩提心に法身の影像の顯現たる報身佛を觀るは支那の大乘佛教にして、日本の眞言密教はその法身の本質を開顯せるものである。しかして印度の大乘教及び支那の大乘教は應身と報身佛の説法を明かすも、法身佛の説



法を開説せざる顯教にして、一切諸佛の本體たる法身の大覺の體を開顯し、この法身佛の説き給ひたる經を眞言密教となすものである。

しかれば應身報身法身佛の開示せる教旨の如何なるものなりやを語らねばならぬも、こゝには省略するであらう。十住心の法門についていへば第七住心までは應身佛の所説の法門にして、第八第九の顯教の一乗教は報身の内證開顯の法門である。そして第十住心の眞言密教は法身如來所説の法門である。二教論についていへば印度の大乗教たる無相大乘教即ち三論、唯識の三乗教は應身の所説にして支那の大乗教たる華嚴宗の如きは報身の内證を開演せる法門であるが、弘法大師によつて開顯せられたる眞言密教は法身の内證を開示せられたものである。現在日本に流布せられある佛教についていへば、禪は應身の釋迦牟尼如來の内證の法門を傳へるものにして、淨土眞宗は報身の内證法門を傳へるものである。即ち淨土眞宗も應身の釋迦如來の説かれたるものなるも、その淨土の阿彌陀佛をば報身佛となすものである。しかして禪は空三昧を明かし、人生の矛盾苦惱をばすべて空なりと達悟することを明かすものである。けだし空三昧に住して一切の苦厄を度する教旨をばこれ釋迦牟尼如來の所説の根本義なれば小乘大乘ひとしくこの義を明かさないものはないのであるが、禪はこの教旨を専ら傳へるものである。しかして空三昧に住し無明妄執を除かるゝに至れば、明鏡に萬像を現するが如く、

菩薩の淨菩提心に法身佛の影像たる報身佛を感見するに至るのである。しかも空三昧に住し無明妄執を斷破し、一切の苦厄を度脱することの容易ならぬものあるより、報身佛の救濟を仰がんとするものは淨土眞宗である。しかし乍ら我等の求佛の至深の要求は最極究竟の如來の眞身たる法身佛に到達せずば止まないものである。こゝにその報身を見たる微細なる分別の念たる業識をも空觀によつて破するところに、如來の眞身たる法身佛が顯はるゝのである。起信論に

和合の識相を破し相續の心相を滅して法身顯現す

これ業識をも破して無分別の一念が法身佛を證見する實義を明かせしものである。しかして眞言密教はこの法身大日如來の本誓三昧をば自在神力加持三昧と稱するが、この自在神力加持三昧即ち大日如來の大覺體を開説せられたる經によれば、普遍平等の加持力と、特殊差別の加持力を以て法界の衆生を攝救し給ふのである。即ち普遍平等の加持力とは大日如來の自證の大智を以て法界の衆生を平等に照見し、一切衆生を自證の加持力を以て悉く引攝してひとしく法身の大果のうちに安住せしむるものにして、これ法身自證の境より一切を見たる境界である。しかも一切衆生は直接無媒介にてかゝる法身自證大覺體を體得し得ざるが故に、法身如來の自在神力加持三昧より、一切衆生各々の機根に相應して無盡の加持身を示現し、この特殊一門の加持身より、普門の大日の大果に攝入せしめ給ふのである。その普遍平等の自證の加持力よりいへば、一切衆生は法身大日如來の大覺體に安住せるものなる



も、衆生はなほその實相を自覺せざるが故に、無盡の加持身を現じ、各々衆生の所願を満足せしめその一門より法身法界に證入せしむるものである。大日如來より示現せる無盡の加持身は、大日如來の無盡の功德を開顯し、各々の衆生の希願に應同するものなるが故に、この加持身の三昧門は多く祈願の法門である。しかして祈願の最初はこれ人間の意志に生きんとするものなるも、しかも祈願の極致如來の威神力を體するに至れば人間の意志が消滅して如來の意志、如來の本誓願を己が本誓願として佛心に生きるに至るのである。即ち特殊の加持力より、普遍平等の加持力を體するに至るのである。眞言密教には息災・増益・敬愛・調伏等の四種五種の法を修し、衆生各々の希願を成就せしめ給ふ無限の救済力を開顯せるものである。しかもその祈願の極致は有相の悉地に即し無相の悉地を體せしむにある。大日經疏には有相の悉地に即して無相の悉地を體する道を明して、世間三昧、出世三昧、大空三昧の釋あるが、これらは佛陀善神を信じ、特殊の靈感を體するとき、無執無念に住し、信する自身も、信せられる所信の對象たる神佛も、また所願のことながらもすべてを空じつくし、信するものなくして信じ、願求するものなくして求むる無信の信、無願の願に住するとき法身如來常住の眞實の生を體得せらるゝに至る道を明かせしものである。祈願の念の根柢には眞實の生命に生きんとする深い欲求が存するのである。しかも祈願の初めは人間自らの意志に生きんとして信仰の極致、如來の靈力にふるゝに至れば、人間的意志はそこに消え如來の意志、如來の本誓三昧を己が本誓三昧として佛心に

に生きるに至るのである。

上來の説明により佛教は眞の自心を見、眞佛を見る要道を明かすものなることを知らるゝであらう。即ち佛教に空三昧に住し、假我假神に對する妄執を離るゝ菩薩の淨菩提心中に、自ら眞佛の影像たる報身佛を感見することを明かす。然して眞佛を求むるところに報身佛を見る業識即ち第八識をも空じ、無分別智が眞佛たる法身の體性を體得するに至るのである。この法身佛を中心とする眞言密教にては、法身自證の加持力たる普遍の救済力と、神變加持の特殊の救済力たる無盡の加持身を示現し、この加持身を念じつひに本地大日如來に契合する道を明かすものである。かくの如く法身より示現せる無盡の加持身を信念するとき、その信を淨化し淳化せざれば迷信に陥り、假神假佛にとまり、つひに本地身を知り自心の眞性を體し得ざるが故に、終には特に信念向上の次第を明かされるのである。十住心の法門は、この信念向上の歷程を開説せられたるものである。

二教論には三論唯識天台華嚴の顯教四家大乘と眞言密教との教義の淺深を重々に判釋されあるも、要約していへば顯教は法身説法を明かさざるも密教は之を開演するものである。顯教は法身果界の實相を説かざるも密教は果界を開顯するものである。顯教は眞諦には佛なく衆生なく、一味の法なりと説くも、密教は眞諦に佛あり衆生ある深旨を示すものである。なほ密教には十惡五逆の罪障深き者を



救ふ教益あること及び現生に如來の徳を體する即身成佛の義を示すも、顯教にては罪業重きものを救はれざること及び三大無數劫を経て漸く成佛すべき教なること等種々の教旨を明かされてあるも、こゝには眞諦は一味の法にして佛なく衆生なく神なく人なしといふ神祕主義的教義たる顯教の説と、眞諦の源底に佛あり衆生あり神あり人ありといふ人格主義的密教の教旨との相違をのべようと思ふ。二教論には顯密二教の相違を判釋せんとして前敍の如く法身の説不と果界の説不と、眞諦に佛と衆生の有無とを釋せられあるも此の三義は同一の理趣である。即ち最初の法身の説不はこれ法身如來の正報についての説にして、第二の果分の説不は法身の住せられる境界についての説である。而して第三の眞諦に佛と衆生の有無の義は依報正報の不二一體の立場よりの釋にして、究竟していへば、第一の法身第二の果分、第三の眞諦もその實體は一である。即ち法身は依正不二・性相一如の自在者である。大覺體である。しかるをしばらく正報・依報・依正不二と分ちて釋せられたるものにして法體は一であり、しかして法身は一體なるもこれを衆生より觀るのと法身自體自らの開顯とは天淵の相違ありて、衆生よりいへば法身は無相なり空なり不可説なるも、法身自體よりいへば法身は金剛不壞の覺體にして、三世常恒にその大覺の體を表現し説法せられつゝありと説かれたるが如く、その果界も法身は無相にして説法せざる義を明かす顯教にては果界を不可説といひ、法身の説法を明す密教は果分の眞實際を開説すといふ、またその眞諦の釋にしても顯教にては眞諦は無相一味にして佛と衆生の假相を

混じ、自他の差相を絶すとすも、眞言密教にては眞諦に佛あり衆生ありとなすものである。

顯教の諸教に説くところ同じからざるものもあるも、眞諦に佛なく衆生なく神なく人なく、眞諦は一味無相の非人格的法なりと云ふに至つては一である。禪淨土教等もすべてこの立場にあるものである。眞言密教はこの一味無相の眞諦即ち無相眞如の源底に物心一如の具體的實在たる六大一實の體性を開顯し、しかもこの六大一實の體は法然本有の自然覺體なると共に、自らその覺體に目覺めんとする必然性を有する祕義を明かすのである。三世の諸佛とはこの覺體を如實に現證し其覺體に安住し宇宙の性相に大自在を得、大智大慈悲を以て衆生を救攝し給ひつゝある覺體である。この如來の覺體は多にして一、一にして多である、多よりいへば無量無邊の諸佛在しまされるも、一よりいへば眞然として同一覺に住せらるゝので、この一如の大覺體は即ち法身大日如來である。即ち眞諦とはこの一多不二の大覺體を云ふのである。

かゝる境地を體する入信の道程についていへば、入信の最初は佛と衆生との對立あるもその信純淨の極致に至ればその對立をも絶し生佛一體の境に入り、更に一體の相をも忘るゝ所謂無信の信に徹するとき、法界に遍滿せる法身大日如來の大覺體に冥合し如來金剛の身を體得せられるのである。即ち入信の最初は對立あるも、つひに生佛一體の祕觀に入り、その一體の相をも忘るゝところに法然に永



遠眞實の如來の生を得らるゝのである。即ち宗教的經驗として云ひ得らるゝことは、神佛を信じその靈感を體することゝ、否定的に絶對者と一致することゝ、絶對者のうちに住し、生かされて居ることゝである。顯教に俗諦に佛あり衆生あるとは、入信の最初にしてつひにその信純淨の極致、生佛一體の祕觀に住し、その一體の相をも忘るゝに至るところこれ顯教の無相一如の眞諦の實相である。かゝる祕境を體するとき法爾に如來常住の生を得て如來の本誓を己が本誓願として、如來と共に無盡の妙業窮まるなきに至るのである。眞言密教の眞諦に生佛の差相を觀るといふはかゝる境地の實相の開顯である眞諦に差別の相を見ると云ふも、絶對的個である法界の全我を帶せる我ならぬ我である。弘法大師は入定留身して靈活自在の如來の妙用を此の上に示現せられたるは、かゝる境地を現證せられたるものである。大日如來の光に照らされその中に生かされ如來と共に無窮に生きるはこれ人生の歸趣にして人類の眞實永遠の安住地の開顯である。

## 二 祕藏寶鑰

祕藏寶鑰も二教論と同じく、一代佛敎を顯密二教に判釋し、以て眞言密教の最勝無上の敎なることを闡明せられたる判敎なるも、十住心論及び祕藏寶鑰に開演せられたる十住心の法門は、顯密二教の淺深を明す判敎の外に、佛陀に歸命し、眞佛を體得するに至る信念向上の歷程を開示するもの、所謂

菩提心の轉昇の道程を示すものである。かくの如く十住心の法門には、顯密二教の敎義の淺深を開明する判敎の義と、菩提心の轉昇を明かす兩義存するも判敎はむしろ兼意にして、その正意は菩提心の轉昇の義を宣顯すにありと觀るは、十住心論第一卷に

今此の經に依て眞言行者の住心の次第を顯す、顯密二教の差別亦此の中にあり。

等の釋に依るものである。大師の十住心の法門は大日經の住心品に説かれたる三劫段の法門に依れるものなるが、三劫段の法門は淨心續生の次第、即ち菩提心の轉昇の義を明かされたものなるが故にその三劫の法門に依つて建立せられたる十住心の法門も、淨菩提心の續生の義を正意となすものである。しかしてこの信念向上の進趣の次第、即ち菩提心轉生の次第に種々の深意存するも、大別すれば二途あり、一は初め顯敎を修し次に密敎へ轉入する次第にして、一は最初より密敎を修する人の信念向上の歷程を示すものである。即ち一は世間敎より佛敎へ入り、小乘大乘と次第轉昇し、つひに第八住心に於て眞如の理性に安住するとき、その眞如の體性もなほこれ究竟の解脱地にあらずとの如來の警覺開示に依つて、つひに法爲本の敎より如來の果界たる第十住心へ轉入する從顯入密、所謂迂回の機根の進趣の歷程にして、一は最初より、佛果地に住し、佛の三昧即ち眞言の法門を修し、佛を心外に見、心内に見、つひに絶對の法身如來の果體に契合する、所謂直往の眞言行人の菩提心の轉昇の次第である。初め顯敎を修しつひに密敎へ轉入する十住心の次第に種多の敎旨あるも、後にも明す如く空



を觀じ寂然不動、生死の迷相を離るゝ性空觀と、因縁生起の假有を見て進修息まざる菩薩の不行とである。即ち空を觀じ生死界の苦相に動せざること大地の如く、また因縁の差相を觀、萬行を進修して息まざること河水の流れにも比すべきである。かく空觀に住して、しかも萬行を進修するをば鳥の空中を飛行するに比況して釋することがある。即ち顯教は空を歩む教ともいひ得らるゝのである。鳥が西より東に飛行するは光明を望んでゝある。かくして光明を望んで西より東に進み、つひに光明界に進入するはあたかも空觀爲本の顯教より、如來の光明を仰ぎ如來自證の光に依つて、一切を見んとする眞言密教の境地に轉入するにも比すべきである。しかして一切衆生は如來大覺の光明界裡に住しながら自ら無明妄執の暗室に眠るものなるが、本有の菩提心の勢力と、如來の加持力に依り菩提心を發し、佛を心外に求め、心内に觀じ、つひに絶對の本地法身を體する直往の眞言行者の菩提心轉昇の次第は、光明界裡に住しながら自ら暗室に眠るものが、光明を慕うて窓を開いて光明に接し、屋外に出てゝ全身光明に浴するにも譬ふべきである。即ち顯教は空を歩む教なりといひ得べくんば密教は光明を歩む教ともいひ得らるべきである。かくして光明を歩み光明に照らされ、自ら光明の體となり、永遠無窮に光明を放つて一切を照破し盡くす實義は、十住心の建立に種々ある中の祕密曼荼羅の功德開顯に約する十住心の義に比すべきである。十住心の法門に種々の意義があり、上述の如く顯教より密教に轉進する義を明かすと共に最初より密教即ち第十祕密莊嚴心たる如來の果地に住しながら如來を

忘れたるものが、求佛の念を起し、如來を心外に求め心内に求めつひに如來の眞身を體するに至る次第を開説せるものである。しかして此の義を十住心の法門の主なる教旨となすものである。しかるに如來の眞身を體得し、その如來の功德を永遠に顯現しつゝある佛徳の開顯をまた十住心の義に依て説くことがあるのである。最後に述べた祕密曼荼羅の功德開顯に約する十住心とはこの義である。

以下は十住心の教旨について述べんに、十住心の法門を判教と云ふ方面より觀れば、眞言密教の教體を原理として、當時傳へられたる世間教、即ち儒教、道教、婆羅門教、佛教の教義を綜合し、これに一大系統を附せるものにして、その構想の大なること、印度支那日本の三國の佛教家の判教にその比を見ないのである。印度及び支那日本にて古來判教をなせしもの數十家あるも、それは何れも釋迦牟尼如來の説かれたる佛教について小乘大乘、三乘一乘、聖道淨土等その教旨の淺深を判せられしものであつた、しかるに弘法大師の十住心の判教は當時傳へられた世間の道德、宗教、印度に行はれた佛教支那にて開顯せられたる佛教を凡て包攝し、これに淺深の優劣あることを闡明し、しかして眞言密教はこれらの教旨をも超えんと共に、これらの諸教を包攝せる最勝の教なることを開演せられたるものである。十住心の法門は別に敍せるが如く(拙著祕藏寶鑰の大綱)第一住心は一向惡業を行じ、少しの善をも修せざる無道德の生活をなす心品にして、第二の住心は人倫を全うする人乘である。即



ち儒教の三綱五常、佛教の五戒十善等の教を奉行する分齊である。第三住心は佛教以外の世間の宗教を信奉するものである。第四住心より第九住心までは所謂釋迦牟尼如來所説の顯教にして、萬有の衆因縁生無自性空の玄趣を示し、世間の宗教に立する宇宙創造の神我否定の義趣を説くものである。しかして無我無自性の空觀に住し、假我假神を空じつとしたるところに顯はるゝ、眞我の本體たる法身大日如來の果體を開顯するものは第十の住心たる眞言密教である。かくの如く十住心の教旨は超越的神を立する西洋のキリスト教的宗教をも超え、寂滅爲樂の印度の佛教をも超え、支那にて開顯せる天台華嚴の一乘教をも超えたものである。即ちある意味に於て釋迦牟尼如來の佛教をも超えこれを根本的に生かせるものである。釋尊の教の根本觀念は無我無神の眞如の理體である。しかるに大師はその無神論的法身を有神論に説き、生ける如來として三世常恒に説法し、その大覺體に具する無盡の靈體靈用を永遠に開顯しつゝある祕義を宣顯せられたるものである。上述の如く十住心の法門を判教として觀れば、第九住心までは釋迦牟尼如來の説かれたる顯教にして、第十の住心は大日如來の自内證を開説せる眞言密教なりとして、佛教に顯密二教の淺深あることを判釋せられ、以て眞言密教の最勝の教王なることを宣顯せられたるものである。しかして前九種住心は釋迦如來の顯教なりと云ふも、弘法大師の十住心は大日經に説かれたる八心三劫の説に依られたるものにして、この八心三劫は大日如來の説かれたるものなるより、十住心に明す前九種住心の顯教は大日如來の説かれたる顯教にして、

釋迦如來所説の顯教はこの大日如來所説の顯教に攝せられるものなり等のこと祕藏寶鑰の大綱にゆづりこゝに略するであらう。

なほ十住心に明かす顯密の法門について述べんに、顯教の教旨無量なるも無我と慈悲、因果と實相、眞如と生滅、眞空と妙有、寂と照、止と觀、理と智、涅槃と菩提等の法相に依つて開示せられたる教旨である。しかしてこれらの法相は名義異なるものもあるも義趣一致に歸すべければ、何れの法相に依つて釋するも可なるべきも、今は理智、寂照等の法門によつて明かさんに、小乘佛教は寂を本となす教なることは個人格の永劫に寂滅に歸せる無餘涅槃を究竟の證果となすに依つても知らるべく、また第六住心の唯識宗には理寂の體たる涅槃と共に、照智即ち菩提の實義を明かすも、有爲の智より無爲の理に歸するを宗極となすものである。第七住心たる三論には無自性空寂の理に契證する般若の眞智を明かし寂照一如、理智不二の無上大覺を成することを明かすも、その無上大覺の體も不可得無相なりと説くものである。

## 智度論第九十四に

阿耨多羅三藐三菩提も亦自性空にして、佛の所作に非ず、大菩薩の所作に非ず、阿羅漢、辟支佛の所作にも非ず、常に寂滅の相にして戲論語言なし。



第八住心の天台には寂の理をば空假中の三諦と説くが故に、この三諦を照見する智に三智を開いて理智不二、寂照不二の妙法を明かすも智は境の寂理に依て起るものなれば、つひに境智不二の大寂に歸するを宗極となすものである。四念處の第四に

境寂なれば智も亦寂なり智照なれば境も亦照なり、一相無相にして、無相一相なり、即ち是れ實相なり、實相は即ち一實諦なり、亦虚空佛性と名づけ、亦大般涅槃と名く。

法華經第一方便品には一實相の諦も無諦の諦なることを説いて

諸法は従本來、常に自ら寂滅相なり。  
といへり。

第九の住心の華嚴宗も、寂照不二を説きつゝも、つひに大寂の理に歸するを宗極となすものである。その大寂の理とはこれ毘盧遮那如來の果體である。しかも華嚴宗にはこの毘盧遮那如來の果體をば不可説に屬するものなるが、この華嚴に云ふ不可説の果體の實相を開顯し、この果體に直入直證する道を明かすものは眞言密教である。

華嚴宗にては、極無自性の空寂の理をば、重々無盡の理として説くが故に、その無盡の理を照見する智もまた十種の智(十は無盡を表す)を明かす、華嚴經第三盧遮那佛品に諸佛無量海に入るに十智ありとて十種の智を説く。これ理も無盡なるが故に、智もまた無盡なることを示すものである。華嚴に

示す理趣を能證の人についていへば、寂即ち理の普賢菩薩と、照即ち智の文殊菩薩と、この理智不二の法界體たる毘盧遮那如來である。華嚴の入法界品には智の文殊菩薩が理の普賢菩薩に歸入し。つひに理智不二の不可説の毘盧遮那如來の果體に證入する理趣を説かれるのである。しかしてこの毘盧遮那如來は不可説不可得の大寂定に住せられるのである。即ち華嚴經の入法界品に善財童子五十五(五十二とも云ふ)の知識に法門を尋求しつひに普賢の法界法門に歸入する相を説かれあるを觀るに、五十五の善知識の最初は文殊菩薩にして、最後に第五十五の普賢菩薩の道場に善財童子を導く第五十四の善知識も文殊菩薩である。かく文殊菩薩に導かれて普賢の道場に入るは、これ智より理に照より寂に歸し、理智不二の法界に證入する深旨を表すものである。しかして經には文殊菩薩が善財童子を普賢の道場に引入して、文殊が還り攝して現せずと説かれたるが、文殊は相を隠して現せざるは、これ能縁の智まづ寂に歸するを表し、能縁の智が寂に歸すれば、所縁の理も空寂に歸し能所相泯、理智一如の法界の大寂の理に歸する深意を顯すものである。この能所一如の法界體は、これ毘盧遮那如來の果體なるが、華嚴經には、この毘盧遮那如來の果體は不可説不可思議の體なりと説かれがあるのである。しかしてこの不可説不可得の果體を開顯し、この果體を體得する道を示すものは眞言密教である。即ち華嚴經の究竟の地が、眞言密教の出發點である。たとへば帝徳を仰がんとして五十三驛を経て帝京に至る道程を示すものは顯教である。しかして臣民としては王宮はうかゞひ得ざるより、たゞ



不可説不可得と云ふより外なきが如く、因人としては、如來の果境は不可説不可得である。しかるにこの國土は帝王のしろしめし給ふ王土にして、そのうちの人民は皆王臣なる理を了得するに至れば、五十三驛を経て帝都に至らずとも、各人は皆帝王の赤子なることを自覺せられ、各人の本務を盡すところに、王化に浴し、臣節を全うせられるが如く、法界は皆これ毘盧遮那如來の果體の開顯なる理趣を體すれば、我身即佛の大自覺を成せらるゝに至るのである。

十住心に無量の法門存するも、これを大別すれば第一二三の世間三ヶの住心は、これ三界六道の因果差別界の方面に立てられたる説にして、下界の苦龜障を厭うて、上界の淨妙離を欣ひ上界に轉生する教である。しかるに第四第五の住心の小乗教にては三界有漏の差別界を厭離して、寂滅の涅槃に歸する旨を説く、つぎに第六住心の唯識宗にては眞如と萬法、無爲と有爲とを並べ説くも、未だ眞如萬法の不二一如の理を開演せず、従つて有爲の差別界の方面に教を立て、十界の差別の相を明かし三大阿僧祇劫に四十一位の階位を経て、つひに自受用身の佛果を成ずる道を開示するものである。即ち小乗の灰身滅智、空寂の涅槃に住する人が廻心向大して無上の佛果を欣求し、四十一位の道程を経て佛果に至る義趣を明かすものである。しかるに第七住心の三論宗第八住心の天台宗第九住心の華嚴宗の所明細かに觀れば異なるものもあるも、第六の住心の唯識宗にて眞如萬法、無爲有爲、平等差別の二門

並べ説くも、むしろ有爲の差別界の方面に於て教を立つるより相宗と稱するが如く、第七住心の三論第八住心の天台第九住心の華嚴は有爲無爲、事理、因果と實相の二門を開説し、しかもこれら二門の不二一如の理を顯はすものなるも、二門のうちむしろ眞如平等の理性を本として説を立するものである。即ち唯識にて有爲差別を表とするに對せば、むしろ無爲の法性平等の理を本とするより此等諸宗を性宗と稱するのである。しかして眞如平等の眞諦界には自他の差相を絶し、生佛の假相を混すとすものである。即ち因果の差別界の方面にては十界の差相を明かし衆生と佛、迷悟等の區別を存するものなれども、因果差別界に立つる衆生と佛の人的なるものを非眞實となし、衆生と佛との差別の相を絶せる一如平等の非人格的眞諦眞如の理を眞實となし、この眞諦に歸入するを宗極となすものである。即ち一切の差別相を混絶し凡てが一如平等の理なる汎神的教義である、主客、迷悟、神人等の分別を絶し、無相の理に歸する深祕主義的説である。かくの如く無相一如の理に住し、上諸佛として求むべきを見ず下衆生として度すべきを見ざる大寂理に住するとき、かゝる一如の理に住するは、これ究竟の解脱地にあらずとの如來の警覺開示に依り、一如の理より起つて無上眞實の佛境界へ趣入し如來眞實の果徳を體得する道を開かすものは弘法大師の開説せる眞言密教である。上述の如く汎神觀的平等法性の理を明かす第八九の住心より起つて更に高き佛境界を欣求し、第十祕密莊嚴心に趣入する教旨を示すところに弘法大師の十住心法門の建立の意義が存するのであつて、大師はたゞこの一大事



を開顯せんが爲に眞言密教の教義を開演せられたのである。従つてこの第八九十の住心の相違を明かにすると云ふことは十住心の法門の眼目であると共に、このところに小乘大乘、顯教密教、また印度の佛教と支那の佛教と日本の佛教思想の特異點等をも知り得らるゝのである。即ち小乗の空寂滅の涅槃に住する人がこの無餘涅槃より起つて回心向大して大乘の大涅槃を欣求するが如く、第八九の住心の人も、その當位の果たる寂滅の大涅槃を究竟の安住地とせず、この大涅槃より起つて、眞實無上の如来の大果に直入直證する道を示すものは眞言密教である。即ち世間三ヶの住心には地獄、餓鬼、畜生等の惡趣より人間界へ進む教旨も存するも、むしろ人間界より更に天上の神の世界へ昇上する婆羅門教乃至世間一般の宗教の義を明かしこれら淺近なる教旨を厭はしめ、眞實解脱の教に進趣せしめんとするものであるが、世間三ヶの住心は差別界の方面に立てた教である。然るに第四五の住心はかゝる差別界を離れて空寂滅の涅槃界に歸するを明かすものなるが、第六住心はまた有爲差別の方面に教を立てたるものである。しかるに第七八九の住心はまた無爲平等の理を本とせる教である。しかして眞言密教は、諸大乘の最究竟の理趣とせる一如平等の眞諦の源底に、更に佛と衆生、神と人との差相を明かし衆生をして高き佛果を欣求せしめ、佛と衆生との感應加持の祕觀に依つて、佛徳を體得する理趣を開説するものである。

即ち一般佛教は俗諦に佛あり衆生ありといふも眞諦には佛と衆生の差別の相なく、一味平等の法な

りと云ふものなるが、眞言密教には俗諦にも眞諦にも衆生と佛、神と人との差相を觀るものである。しかして俗諦と眞諦との區別は、俗諦とは分別の念を以て觀る現前の差別相である。したがつて自心の外に佛を觀るものであるが、眞諦は佛も衆生も等しく、本覺の覺體に住し、一々が法界の全我を帶し、法界加持本有の三密の體である。しかして無相眞諦の法を本とする教と、眞諦界中に本有の人を立する二教の相違は、かの第八九住心の人が、眞諦無相の理に安住するとき、その無相眞諦の體は、眞實の安住の地にあらずとの如来の警覺あるところに於て知らるゝのである。その警覺し給ふ如来は高く法界の頂に在しますと共に、また一切處に遍在し給ふ尊なることは、左の大日經疏第一の文によつても知らるゝのである。

「如来有應の處に隨つて此宮にあらざるはなし獨り三界の外にあるのみにあらず」。また如来の警覺は如来より果界の扉を内より開いて、警覺の聲を發し、如来の光明を示し、眞身を現じ給ふのであるが、また警覺せらるゝ人が、外より果界の門戸を開くのであるかと云ふに、これ所警覺の人が、如幻空の法の實相を知り、身心を死灰に歸せしめ無識身三昧に住し、人間性を空じつくすところに、彼より開かれず此より至らざれども、水澄淨なれば月現するが如く、法爾瑜伽の理として、如来の聲をきゝ、その自證加持の光明にふれ、その眞身を體せらるゝのである。これらの理趣は左の金剛頂三十七尊の心要の文等に依つても了會せらるゝであらう。



願もなく求もなく是れ眞の解脱なり、此の三相空に由るが故に、即ち解脱の法門に入り斯の正理を悟る。即身に光明あつて廓として法界に周ねく、即ち毘盧遮那正體智に同するなり云。

十住心論、祕藏寶鑰等に依れば、警覺せられる第八住心も如實知自心といひ、能警覺の體たる第十祕密莊嚴住心をも如實知自心と云ふ。即ち共に理智不二の一心を知るといふも、一は所警覺にして一は能警覺の區別あるは、一は理智不二の一心の體をば無相の法と觀、無念の念に住し、生佛の差相を絶した眞如の法のうちに自己を失ひ、眞如の法と一體となるを如實知自心と云ふ。即ち第八住心にて如實知自心と云ふもこれ都絶能所の遮情の一心してなほ因分に屬す。しかるに十住心論に第十の住心を究竟して身心の源底を覺知す等と釋せられたるは、遮情表徳不二の一心、即ち不二果界の大覺體たる六大一實の自然覺體を覺知し現證するを如實知自心と云ふ、されば同じく如實知自心と云ふも、因心と果心との異りがあるのである。十住心を因果に分ては前九種住心は因分にして、第十住心は果分なるが故に第八と第十は因果のことなりがあるのである。第十の住心は果心なることは、十住心論に身心の實義を知るをば兩部曼荼羅の果徳の開顯なり、または身心の究竟を知るは即ちこれ祕密莊嚴の住處を證するなり、大覺世尊の大智灌頂地に入るものなりと釋せられたるに依つて知らるゝのである。また興教大師の眞言淨菩提心私記に

眞言の淨菩提心は、是れ自性法身心地法界大日如來心王の具體なり、亦は一切衆生の色心の實相、普門海會の平等

の種子なり、故に大日經疏第二に云はく、此心は即ち是れ如來の自然智なり、亦是れ毘盧遮那の遍一切身なり、心の如くなるを以ての故に、諸法も亦是の如し、根塵皆阿字門に入る。(中略)又此の淨菩提心は是れ一切衆生の自然本有の心地の實際、即ち是れ一切智智なり、實の如く了知するを名て一切智者と爲す。云。

第八住心の因心なることはその所攝の宗教たる天台の説に依つても知らるゝのである。天台宗にては心佛衆生凡て三千圓具の實相の體なれども、佛界及び衆生界の實相觀じ難きより、専ら因心の本具即ち自心の實相を觀するものである。大師は十住心論に第十の住心を釋して

祕密莊嚴住心とは、即ち是れ究竟して自心の源底を覺知し、實の如く自身の數量を證悟す。所謂胎藏海會の曼荼羅金剛界會の曼荼羅、金剛頂十八會の曼荼羅是れなり、(中略)經に云何菩提謂如實知自心と云ふは、此れ是の一句に無量の義を含めり、堅には十重の淺深を顯はし、横には塵數の廣多を示す、(中略)大日經王には無量の心識無量の身等を説く是の如くの身心の究竟を知るは即ち是れ祕密莊嚴の住處を證するなり。故に經に云はく、若し大覺世尊大智灌頂地に入んぬれば、自ら見に三昧耶の句に住すと、(中略)今此の心王の如來無始無終にして各自の法界三昧に安住せり。故に下の文に云く、時に薄伽梵大日如來廣大法界加持を以て即ち是の時に於て法界胎藏三昧に住して入佛三昧を説き給ふ。時に釋迦牟尼佛は寶處三昧に住して自心及び眷屬の眞言を説き、是の如く普賢は佛境界莊嚴三昧に住し、彌勒は發生普遍大慈三昧に住し觀自在は普觀三昧に住し、金剛手は大金剛無勝三昧に住する等の類皆悉く是れなり。無量の十佛刹微塵數の三部五部の諸尊の四種曼荼羅、各各に自證の三昧に住する是れなり。一切持金剛者皆悉集會とは、此は心數の妙眷屬を明す、心王所住の處には必ず塵沙の心數ありて心數を以て眷屬と爲す、今心



王の毘盧遮那自然覺を成ず、その時に一切の心數即ち金剛界の中に入て如來内證の功德差別智印と成らずと云ふことなし(中略)然も此の毘盧遮那内證の徳、加持を以ての故に一一の智印より各々執金剛の身を現す、形色性類皆表象あり、各々本縁性欲に随つて衆生を引攝し給ふ。若し行人慙懃に修習して、能く三業をして本尊に同ぜしむ、此の一門より法界に入ることを得れば、則ち是れ普く法界門に入るなり。

此の如く

祕密莊嚴住心とは、即ち是れ究竟して自心の源底を覺知し、實の如く自身の數量を證悟す。所謂胎藏海會の曼荼羅金剛界會の曼荼羅金剛頂十八會の曼荼羅是れなり。

または

是の如くの身心の究竟を知るは、即ち是れ祕密莊嚴の住處を證するなり、故に經に云く若し大覺世尊大智灌頂地に入んぬれば自ら見に三昧耶の句に住すと。

または

心王の毘盧遮那自然覺を成ず、その時に一切の心數即ち金剛界の中に入て如來内證の功德差別智印と成らずと云ふことなし。

または

若し諸の行人慙懃に修習して能く三業をして本尊に同ぜしむ。此の一門より法界に入ることを得れば則ち普く法界門に入るなり。

此等の文義は何れもよく第十祕密莊嚴住心、即ち眞言密教の教旨を顯示せるものである、即ち心王の大日如來大覺現成のときその大覺體一切處に遍じ、宇宙法界は大日如來の靈體靈用の顯現、即ち一大曼荼羅體を成するのである。しかして大日如來の大覺の聖慧眼を以て見れば、一切衆生は大日如來の大覺現成のとき同時に自然覺を成就し、大日如來の大覺の眞際に住せる金剛薩埵である。しかも衆生は迷妄の故にこの理趣を知らず、空しく三毒五欲の荒野にさまよひつゝあるものである。しかるに本有の菩提心の勢力即ち自然覺體に目覺めんとする菩提心自體の必然性と、如來の加持力等に依り、こゝに無上の佛果を欣求するに至るのであるが、しかも因人は直接無媒介に絶對の本地法身を諦見し得がたきものあるゆゑ、大日如來より示現せられたる無盡の諸尊のうちの一尊を信奉し、その一門より普門の大日如來に契證する道を明かすものである。

二教論の御釋に依るも、眞言密教の本體即ち祕密莊嚴心の體は、法身大日如來の大覺體なることを知らるゝのである。即ち二教論には顯教と密教との根本的相違は、顯教は教の根本觀念たる眞如法身をば、無自性無相の非人格的法なりと説くに對して、密教は法身をば生ける大日如來なることを開演し、その大日如來三世常恒にその自證大覺の體を説示せられつゝあることを明かさる。即ち二教論に祕密の本體を釋して

今祕密と云ふは、究竟最極法身の自境を以て祕藏となす。



大日經疏等に依れば、この法身大日如來とは本不生中の理智一如の自然覺體が、その自體自らを覺悟し現證せる大覺體なることを明かさる。大日經疏に法身大日の正覺三昧を釋し

是の故に正覺の三昧は、諸法の本不生を覺るが故に、唯是れ心自ら心を證し、心自ら心を知る、久遠より以來常如實際にして變易あることなし、即ち是の如く心自らは是の如く縁に住するを以ての故に名けて等持と爲す。此れ正しく是れ毘盧遮那本尊なり、所現の無盡莊嚴藏も亦是の如くの本尊を離れず。

また云はく

經に云はく時に佛一切如來一體速疾力三昧に入り給ふとは、謂く此の三昧に入る時、則ち一切如來は皆同一法界の智體なりと證知し、一念の中に於て、能く次第に無量の世界海微塵等の諸の三昧門を觀察して、是の如く是の如くの若干の衆生は彼彼の三昧門の中に於て、道に入ることを得べしと知り云

また云はく

自心は本より以來不生なりと覺る即ち是れ成佛なり、而も實には覺もなく成もなし云

金剛頂略出經に曰く

普賢法身一切に遍じて、能く世間の自在主と爲り、始め無く終り無く生滅なし、性相常住なること虚空に等し、一切衆生所有心、堅固の菩提なるを薩埵と名く、心不動の三摩地に住して、精勤決定するを金剛と名く云

此等の文は皆これ祕密莊嚴心の本體は、大日如來の大覺體なること、及びこの大日如來の大覺體よ

り見れば、一切衆生皆大日如來の大覺體に住するものなることを明かされたるものである。大日經開題に

上み大日尊より下も六道の衆生の相に至るまで各各の威儀に住して種種の色相を顯す、並びに是れ大日尊の差別智印なり、更に他身にあらず、故に經文に我即法界我即金剛身我即天龍八部等と云ふ。是の如く法身互相渉入する猶し絹布の絲縷の堅横相結して不散不亂なるが如し。

しかして大日如來の正覺體即ち祕密莊嚴住心をば、大師は究竟して身心の源底を覺知し、現證せる覺體なりと釋せられ、大日經疏には、正覺の三昧は諸法の本不生を覺るが故に、唯是れ心自ら心を證し、心自ら心を知る、久遠より以來常如實際にして變易あることなし等と釋し、或は本不生の理に自ら理智ありて、自ら本不生を覺ると云ふ。これらの至願をたづぬるに自ら遮情、表德、否定、肯定兩義の存するを觀るのである。遮情よりいへば大覺の體は不可得、不可説にしてたゞ否定的に一致せらるべき體なるが故に、本不生の中に理智あつて自ら本不生を覺り、または心自ら心を證し、心自ら心を覺り、智が理を證し、照にして寂と云ふは、所謂無念の念である、智も本不生の寂理に住し、理もまた本不生の寂理に住し、緣境俱に本不生の體に住し遮情絶言の極致に於て正體智顯現し、大覺現證の表德の體をば大日如來のみ有まして無我の中に大我を得給へりとも説かれ、或は斯の正理を悟るとき、即ち身に光明ありて廓として法界に周ねく即ち毘盧遮那の正體智に同ず、または普賢法身一切に



遍じ、能く世間の自在主となり無始無終無生滅、性相常住にして、虚空に等し等と説かる。此の如きはこれ理智一如の自然覺體を現證せる如來の果體である。この大覺體は遮情表徳の兩面の釋あるも、大日經疏等には遮情の説多く、大師は表徳の料解をなされたのである。かの六大體大の義は、この大日如來の正覺體の開説である。大日經に大日如來の自證大覺の體を説いて

我れ本不生を覺り、語言の道を出過し、諸過解脱することを得、因縁を遠離し、空は虚空に等しと知る。

と説かれある經文に依つて、六大説を立せられたるより觀るも六大體大は色心不二の自然覺體を現證せる大日如來の大覺體である。したがつてこの六大はこれ九種住心の因人所見の有碍假妄の色心を遮し聖智所見の性徳圓滿海、法然本有、無碍輪圓具足の毘盧遮那如來の身心の體性である。こゝになほ述ぶべきことは、中古以來の宗學者に顯教は無相眞如の法を教の本體となし、眞言密教は六大和合の本有金剛の人を教の本體となす等の釋をなすを見るが、かゝる解は何んら不可なかるべきも、單に六大體大の義よりのみしては大師の人爲本の教旨のなほ顯はれざるものがある。大師は即身義に六大四曼三密の三大圓融の義をば、即身成佛の即身の義なりと自ら釋せられ、次の法然具足薩般若等の一頌即ち本有の五智を現證せる圓鏡力故實覺の體をば成佛の義と示され、十住心論に究竟して身心の實相を覺知し現證せる體、これ祕密莊嚴の大日如來の大覺體として明かされたる等より觀ても六大不二本有の五智を現證の體が究竟成佛の體にしてこれ毘盧遮那の本地の體である、大日經疏第二十卷に毘盧

遮那本地身をば五轉の中央の**梵**字と釋せられあるより觀るも、法身如來は本有の覺體を現證し、始覺が本覺に冥合し、始本の相を絶せる法然本有の大覺體である。この五智現證の覺體これ毘盧遮那の本地にして、この大覺に生き三世常恒にその大覺の體性を顯現しつゝある體が、正しく顯教の寂照の理の法に對する人の義である。中古の宗學者にして六大本有の人を宗極として、その六大本有の義と共に明かされたる五智の覺體を現證の義に重きを置かざることが、やがて邪流の遠源をなすものある等より、この言をなしたのである。もとより五大即五智輪にして六大と五智とは同一體なるべきも、大師は三大圓融の義をば即身と釋し、五智現證の義を成佛と注せられたるやうに、絶對智が絶對の理を現證しその自證大覺の體を三世常恒に演説し無盡の靈用を法界に示現せられつゝある五智の圓滿開顯の體が毘盧遮那如來の本地の體にして、この覺體が顯教の無相眞如の法に對する人の實義である。

また祕藏寶鑰の第十祕密莊嚴心の釋に依るも、第十住心は九種住心の因分を超えたる毘盧遮那如來の大覺の果體にして、この大覺體より見れば、一切衆生は等しく毘盧遮那具體法身の徳を具するが故に、この實相を體すれば、現身に如來の果地を體得せらるべきことを明かし、

九種の住心は自性無し。

轉深轉妙にして皆な是れ因なり。

眞言密教は法身の説。

祕密金剛は最勝の眞なり。



五相五智法界體。

四曼四印此の心に陳す。

刹塵の渤駄は吾が心の佛なり。

海滴の金蓮は亦吾が身なり。

一一の字門萬像を含み。

一一の刀金皆な神を現す。

萬徳の自性輪圓して足れり。

一生に莊嚴の仁を證することを得べし。

なほ祕藏寶鑰に如上の義を敷演せんとし、初に大日經に眞言の法門を信修する者は、三大無數劫の間に六度萬行を修して、成就せる菩薩の福智の無量の功徳を、現身に悉く成就すべきことを説かれたる經文を引用して祕密莊嚴心の義を明かし、また祕密莊嚴心とは大日如來一體速疾力三昧、即ち自證大覺の果體なることを開示せらる。しかしてこの祕密莊嚴心の曼荼羅の果體を體得すべき道として説かれたるものは、眞言密教の實踐道たる事相門である。しかもこの事相門のことはこゝに述べべからざることも、實踐道に依らずばまた明かし難きものあるより祕藏寶鑰に祕密莊嚴心を釋せんとし、て引用せられたる菩提心論の三摩地段等に依つて一應の解をなせば祕藏記には諸佛法界身なるが故に我身諸佛のうちに入り、我れまた法界身なるが故に諸佛我が身中にありと示されたるが、我等は本來法身大覺のうちにあつて如來を見失うて居るのである。如來のうちにあつて如來を離れ迷ひつゝある我等は如何にして如來に契合せらるべきぞとならば、たゞ如來に歸命し、如來のうちに己を空しうし如來金剛の身を體すべきである。大日經疏第五に自身を捨て、諸佛に奉獻する祕旨を明かされ身の不

可得空を觀じ、身心を死灰に歸するとき如來金剛の身に同じ、それより以後の一切の所作は皆如來に代り衆生を成就し佛國を莊嚴するものにして、一々の所作に無限の功徳を有することを示し、

此の身を捨てて、用ひて一切如來に施し奉る、此れより以後の動止施爲凡そあらゆる所作は皆如來解脱の爲めにして、己身の爲めにあらず、種種の熾然萬行を以て佛土を莊嚴し、衆生を成就すと雖も、法性自爾にして、造作する所にあらず、其れ能く是の如く奉修する者はれを無邊の福聚と名く、是れを無盡の福河と名く、涓滴の善根を造るに隨つて法界海の中に投ぐるを以ての故に、乃し衆生界を極むるに至るまで亦窮竭なし。

眞言密教は大日如來の自在神力加持三昧を開顯するものであるが、この大日如來の三昧に本來自證の大覺に住し、その自證大覺の絶對の加持力を以て、一切衆生をこの大日の大覺のうちに住せしむる普遍の加持力と、また無量の衆生の機根に應同し、各々の機根に相應の法門より、これを大日如來の大覺の境に引攝せんとして無盡の加持身を示現し給ふ特殊の加持力があるのである。分別の念を離れ得ざる衆生は、直接無媒介に絶對の大日如來の自證大覺の體に相應し難きものあるより、その大覺の果體より示現し給ふ、普賢、文殊、觀音、彌勒等の特殊の一門の尊の三昧門より、普門大日の本果に契證するものである。祕藏記に因人が如來果上の法を修するより、如來無上の果徳を現身に體せらるゝことを示されたるが、我等衆生は不自在不自由の因果制約のうちに入り種々の矛盾苦痛に悩みつゝあるものである。しかるに如來は因果の制約を超越せる大自在者にして絶對の自在神力を有し給ふの



である。我等は己を空しうして淨月輪の如き心に住し、如來を信じ、それを信することのいよく深きに至れば、その自在力を感得せらるゝに至るのである。即ち心月輪のうちにその大自在者を念ずることの深ければ、精神の上にも、身體の上にもその自在力を感じ、つひに不自在不自由の矛盾苦惱を自ら離脱せらるゝに至るのである。神佛を信じて靈感を得らるゝはこの理によるものである。しかし無量の諸尊のうち有縁の一尊に歸命し、その尊の内證功德力を體得する道を開示するものは、息災増益、敬愛、調伏、延命等の所謂眞言祕密の事相門である。何れの法を修するにしても、入我我入觀、正念誦字輪觀と云ふものがある、入我我入觀に於て行者の心月輪のうちに如來の身を引入せしむることにより如來の三大無數劫の間に成就せられたる無邊の福智の功德力を一念に體得し、また如來の眞身のうちに歸入することに依り、如來の御心のうちに生かされるに至るのである。しかし更にこの自覺を堅固ならしめんがために、正念誦に於て、その本尊の眞言即ち名號を千反萬反念誦するのである。明鏡に物の現するが如く、淨心を凝らして信修すれば心月輪のうちに、本尊の威神力を體せらるゝに至るのである。更に最後に字輪觀を修するのであるが、その字輪觀に於て正しく道の眞源を體するに至るのである。その字輪觀に遮情表徳の兩觀がある。その遮情の觀とは一切否定の空觀である。表徳觀とは心月輪觀である。心月輪のうちに本尊を觀じ、その心月輪を漸次増大せしめて宇宙法界に周遍せしむるはこれ果上大日如來の大覺體に歸源するものである。即ち大日如來の自證大覺の大

光明に一切の分別の妄執を焼きつくされ、大日如來の果體に契合するに至るのである。しかしその大日如來の果體は一にして多、多にして一である絶對無上の獨一の大覺體なるも、無盡の諸佛の自證大覺の體は法身大日如來と同體にして、諸佛は大日如來の大覺體に住し、一大圓覺を成せるのである。されば本地大日の果に契合すれば同時に諸佛の内證に契ひ、一門の内證法門に契へば普門大日の本果に契ふ。即ち心月輪を法界に遍せしめ、無心無念に住するに至るとき、分別の妄執、大日如來の大光明に焼きつくされ法身の本果を體すると共に、無盡の諸佛の法界加持力を體するのである。しかしその月輪を漸次縮少せしめて、もとの一肘量の心月輪に歸復するのである。この一肘量の月輪は方分あれども方分を絶せる本地加持不二一如の體である。しかしてかゝる佛境界を體せる自心は我にして我にあらず、法界の大我を體せる我である。我即法身、我即金剛の我である。入道の最初は曼荼羅の諸佛と對待あるも。つひに對立の相を離れて一體となり、つひにその一體の相をも絶するところに、大日如來をはじめ曼荼羅の諸尊の緣起、即ち諸尊の威神力の顯現しまた己を空しうして、如來に歸命するところに、毘盧遮那の眞身を體することを示されたる左の不空三藏の金剛頂瑜伽略述三十七尊心要の文等を讀まばその教旨を會せらるゝであらう。

國師大三藏和上、舍暉院承明殿の大道場に於て、頃ろ餘暇に因て梵經を披讀し、忻然として顔せを熙しめ法樂虛適す、大慈の戸を開いて諸の童蒙を誘き、大に良縁を啓いて知見せしむ。我が祕教は汗汗として漉り無く、法體幽微



にして實に際を窮め難し今且く瑜伽の教跡に依つて略指南を爲し眞言の行門爰に理趣を開く、今説く能觀は毘盧遮那佛報身是れなり、所觀は四智の如來なり、能觀は是れ四方の如來所觀は是れ十六大菩薩なり、能觀は是れ心所觀は是れ境なり。八供養及び四大護菩薩等各々能所を具す、能所を具すといへども、能所の體本と空なり、空有の理本と無なれば中道の心斯に契ふ。今此に金剛界の三十七尊大曼荼羅及び賢劫の千佛外金剛部の二十天及び四十天等を建立す、此れを初原として展轉して無量の曼荼羅を相生するなり。

又曰く

空無相無願解脫門に入るとは、所謂空とは一切の法皆空なり、空の體も亦空なれば空も亦不可得なり、無相とは地水火風男女等の相並に青黃赤白なり、此の十相に於て一切の萬法體を擧て皆空なり。一切の相空にして不可得なりと爲す無願とは凡そ所修の道は三界の希望を絶せり、願求する所あるは皆是れ有相なり、永く妄想を絶し願求する所の心を斷つ、願もなく求も無き是れ眞の解脫なり。此の三相空なるに由るが故に即ち解脫の法門に入て、斯の正理を悟る、即ち身に光明有て廓として法界に周し、即ち毘盧遮那の正體智に同す、皆愚瞶耶 *idiotia* の眞言を誦するに由る。此の密印を結んで即ち三密觀解脫門に入り一境一心にせよ、即ち當さに證悟すべし。次に三祕密口印此の三密に由て三業清淨なり。此の身法界に滿つ、微塵悉く是れ一切諸佛なり、一一の佛の前に於て、皆自身有て諸佛の足下に於て禮拜し承事し、供養し懺悔し發願すと觀ぜよ。云々

實修に關する事相門のことは、こゝに述べ得られざることゆゑ、一應その教旨の要諦を明かせしませである。祕藏記に諸佛法界身なるが故に我身諸佛のうちにあると説かれたるが、諸佛のうちにあつ

て諸佛を忘れたる我等は、たゞ己を空しうし如來に歸命するとき如來金剛の身に同するのである。念々無念にして如來を念するとき、本地加持不二の如來の大果を成せらるゝのである。日月輪觀を修し、生佛而二不二の妙體を證すべきである。あらゆる生物は太陽の光に照らされて生育されるが如く、我等の心靈は絶對的眞靈たる大日の光明に照らされるのである。我等の本有の大菩提の心月輪は大日の自證の光明に照らされ大日の光明のうちに生かされ、自心の心月輪のうちに大日の住するを體するところに佛格を成するに至るのである。(昭和十八年六月十日)

### 三 再び辯顯密二教論に就て

泰西の宗教學者のうちに、佛教は空の教なり、客觀を空じ主觀を空じ、自我を亡ぼすべきことを説くものである。佛陀は世は苦なり、生は死よりも悪しとなし、死の亦死たる涅槃に歸すべきことを説けり、此くの如く佛教はたゞ消極的に世界を救濟したるものにして、積極的に之を復活する道を明かすものにあらずまた佛教に慈悲即ち無我の愛を説く、しかして其の愛は一切の人類及び一切の有情に及ぶも、而も其の愛たるや彼等有情の生命に高尚なる價值あることを認めたるより起るにあらずして彼等が自己と同じく、生の苦に陥ることを憐むより起りたるものである。されば佛教の慈悲は、其の第一に重んずべき最高の徳にあらずして、第二の徳なりと謂ふべし、しかして其の慈悲を重んずるは、



畢竟慈悲は、個々物に對する尊敬を否定して、個人的感情の絶無なることに於て、やがて思想感情共に消滅せる個人我泯滅と其の趣を一になすものである、こは暫らくケヤードの宗教進化論に依るものなるも、同氏のみならず泰西の宗教學者のうちに、佛教をば空の教なりと解するものが多いのである。佛教は生んとする意志、自我を相續せんとする欲望を斷じて、涅槃に歸すべき道を明かす空の教なりとして歐米に傳へられたることが、彼の地に佛教の振興しない所以ではあるまいか。弘法大師も佛教即ち釋迦牟尼如來の説き給ひたる顯教は究竟は空の教なりと斷じ給うた。大師は卽字義に小乘に身心空滅の涅槃に歸すべきことを説き、大乘に諸法の空を明し、空理を觀せしむるも、衆生本有の自覺體、如來常住の大覺體は空滅に歸すべきものにあらざること、及び顯教の大小乘即ち聲緣二乘、唯識三論天台華嚴等の諸宗は、たゞ遮情空觀の教、即ち損滅無我の字相を明かして、未だ表徳大我の字義の眞際を開説せざるものなることを釋し、

諸二乘等擧無我之利斧。斫身心之柴薪。然猶一心本法寧有損滅。故名汗字不損滅。又大乘空觀之猛火。燒人法執着之塵垢。無有遺餘。三密不損猶如火布垢盡衣淨。汗字實義亦復如是。復次或破遍計之昏樓。壞依他之幻城。三密本法豈有毀傷乎。汗字實義應如是知。又有人厭有爲之非眞。欣無爲之離妄。絕言語道於廢詮之門。滅心得自在故。不住自性故。因緣所生故。相觀待故。以是六義故。名諸法損滅。云云

即ち顯教は因緣生無自性無我の義を説き、生佛の假相を絶し自他の差相を泯せる無相の法に契證すべき道を明かす損滅の教にして、未だ遮情の極致に開顯せらるゝ表徳大我の實相を開説せざるものと判じ給うた。即ち大師の十住心論等の御釋に依るも、小乘は身心空滅、所謂個人格の永劫に空無に歸することを宗となし、また大乘佛教は一如眞如の法を明かすもしかも法より緣起せし人は妄假にして法のみ眞實なりとし假なる人より實なる法に歸入すべき理趣を明かす、しかして一如眞如の法も無自性不可得にして、住すべき眞實の體にあらずとなし、無住の住を道の眞際となすものである。天台華嚴等に諸法無自性空なるが故に、無障無導、一即一切、圓融相即の理を談するも、これたゞ空觀のうち假有觀にして、所謂空裡の幻華に過ぎざるものである、されば菩薩眞空妙有の理を觀じ、假有に出で、大慈悲の萬行を修するも、これたゞ夢中の萬行にして覺め終れば、能度の人も所度の人もなく、能所主客共に一如の空に歸すとすものである。

また應身報身等の如來大慈悲の化他の妙用を明かす、しかもこの報應二身の化他の妙用はこれ衆生の妄分別に依つて現起せし如來の隨緣方便業にして、法性法身法爾不變眞實の妙用にあらざるが故に、化緣盡きなば、法身の體に還歸し給ふのである。即ち事識に依つて應身を感見し、業識に依つて報身を見る、しかるに菩薩空三昧に住し、事識を斷じ、最後心の金剛喻定に於て微細の能所たる業識を斷せば、應報二身共に一如の法身に歸し、其の相を泯じ給ふのである。即ち報應の二身は、これ法身



なる一如の法より現せし人なれば、化縁盡きなば、畢竟は無相の法に歸し給ふのである。即ち顯教の大乗教は因果と實相の二門を建立し、俗諦因果門には佛あり衆生あり、十界の差相存すとすも、眞諦實相は一味の法にして、生佛の假相を絶し、自他の差相を泯すとすものである。しかして因果と實相の二門不二を明かすも究竟は因果の差相を遮して、實相一如の法に歸するを宗極となすものである。即ち小乗は個人格の永劫に空滅に歸すべき道を明かすものにして、その大乘も生佛の差相を遮し一如の法に還歸すべき旨を説き、しかもその一如の法に自性なく無相無住、常寂滅をその體となすものである。しかれば大小二乗その所明異りあるも、人を假とし無餘の涅槃、一如の法に還源すべきを明かし常寂滅を宗致となすに至ては、その歸趣一なりといひ得らるべきである。

しかれば何故に釋迦牟尼如來の説き給ひたる顯教は、此の如く否定の否定を説き、たゞ空三昧に住すべきを宗致となせるやと云ふに、釋迦牟尼如來の説は、これを法報應三身に約していへば、報應二身の所説である。しかして報應二身は、我執迷妄を有する因人のために、法身より化現せる佛身である。即ち報身は十地の菩薩のために、應身は地前の菩薩及び二乗凡夫のために應現し、機根契當の法門を説き給ふものである、しかも因人に對しての報應二身所説の教の根本義は無我無自性にあり、そは因人とは我執を帶し、我執迷妄に依て生死に輪廻するものなるが故に、これら因人に對しては、たゞ無我空三昧を説き、空理を觀せしめ、我執煩惱を斷じ生死因果の境を解脱せしむることが説教の

本旨なるがゆゑに、報應二身の所説は無我空三昧を根本義となすものである。されば因人爲本の報應二身の所説には、如何なる立場にても我觀實在觀を立すべきでない、もし我觀實在觀を立せば、我執深き因人は却てその我執を深からしむるとまた因人の如何なる精神作用に依るも、眞實在を認識する能力なきより、因人爲本の報應二身の教にては、有爲も空なり無爲も空なり、人も空なり法も空なり般若も空なり、菩提も空なり、如來も空なり、涅槃も空なり等と開説せられ、一切の我觀實在觀を打破せられ、たゞ否定の否定を説かれたる所以である。此の如く顯教は報應二身が因人に對しての説なれるが故に、空三昧に住し、我執を斷すべきことを主として説かれたるものである。即ち空三昧に住し、寂滅平等究竟眞實智に住すべきことを明かされたるものである。

しかるにこの寂滅平等眞實智に住するとき、この空三昧に住するは、これ究竟眞實の佛果を得すべき道にあらずとの如來の警覺開示を蒙り、此の如來の聲に聽き、法身自證の加持に依り、高く因分を超え無盡莊嚴の佛果の眞實際を開顯せるものは弘法大師である、即ち大師は空觀爲本の佛教をして本有の教たらしめ、無我爲本の佛教をして大我の教たらしめ、遮情爲本の佛教をして表徳の教たらしめ、法爲本の佛教をして人爲本の教たらしめ、因分爲本の佛教をして果分爲本の教たらしめ、遠劫成佛の佛教をして即身成佛の教たらしめ報應爲本の佛教をして法身爲本の教たらしめたるものである。即ち大師は印度支那日本の三國の佛教の諸大論士と立脚地を異にし、全然新たな立場より佛教を根本的



に見直し、以て佛教の究竟眞實の積極的旨趣を開顯し給ひしものである。もつとも因人爲本の佛教にても無我空三昧を修する本旨は、聖智を得て法性を現證し、無上大覺を成ずるにあるが故に、報應二身の所説のうちにも、雲間に龍鱗を見るが如く、往々如來究竟大覺の境を開演せられるのである。大師はこれを往々有斯義の密教として判せられてある。また支那六朝時代より唐代に亘り、涅槃經、法華經、華嚴經等に依り、幾多の人師が大乗の極致は法性の積極的旨趣を開演するにありとなし、法身常住、佛性常住、諸法實相、眞空妙有、相即圓融等の妙有の祕義を明かさるゝに至つた。しかも前敎の如く報應所説の因人爲本の佛教は、空觀を根基となせるものなるが故に、顯敎大乘の表徳説も畢竟は遮情空に歸するのである。もし然らずして積極的有觀我觀を立せんか、これ因人爲本の其の教本來の教旨に違背することとなり、外道邪見として破斥せらるべきものである。即ち報應二身の教説に基いては、如何なる立場にても、積極的我觀實在觀を立すべき餘地がないのである。聖慧眼を有し給ひたる大師は、此の理趣を徹見し、在來の因人爲本の佛教と全然其の立場を異にし、高く果分に住し法身自證の光明に依つて一切を見、一切に如來常住の生を顯得する祕義を開演し給うたのである。此の如きは佛教々義の根本的見地の轉換にして、實に佛教に於けるコペルニクスの轉廻とも稱すべきものである。

しかれば大師は如何なる信念と智解とに依り、三國の佛教家の未だ曾て談せざる、境地に到達せられたるや、大聖の自内證もとより窺察し得ざるものもあるも、二教論等に依れば、大日經金剛頂經楞伽經智度論釋摩訶衍論菩提心論等を憑據とせることを示さる。しかして此等經論の所明の中、殊に因分より果分、顯敎より密敎への轉入の歷程を明かされたるものは、兩部大經に説かれたる警覺開示である。

即ち小乗の無餘涅槃に入れるものが大乘の大涅槃に到る廻心向大の説と、大乘の常寂滅の涅槃に住するものが、法身如來の曼荼果海に轉入するに至る所謂警覺開示の説とは、これ實に佛教々義に於ける二大轉換にして。佛教の教義上より云ふも、自心の自然覺體を現證するに至る、淨菩提心開見の義より云ふも、まことに留意を要する重要な點である。空三昧に住するとき、これ如來眞實の大果を成ずる道にあらざれば、正に五相成身觀に住し、以て如來の大果を成すべしとの、如來の警覺開示は、無量の義趣存するも、己を空しうして如來に歸命し、如來金剛の身に同じ、如來の大果を成ずることを得る、祕義を開説せられたるものである。弘法大師は入佛道の初めより、如來の三摩地に直入直證する眞言密敎を修し給うたのである。即ち虚空藏菩薩の祕法を修し、佛徳を現成し給うたのである。後、當時本邦に傳來せられありし佛教の所論を披見せられしも、大師の至高至深の心中の要求を満足せしむることを得ざりしゆゑ、更に深甚の經典を得んことを諸佛に祈願し、大日經を大和の久米寺の塔中より得給ひしことを大師の御遺告に記るされてある。思ふに大師出家後、披見し給ひし經論



は空三昧爲本の顯教であつた。しかるに已に密教を實修し、如來の三摩地を現證し給へる大師は、かゝる理觀の空教に満足し給ふはずなく、遂に密教に依り深く如來の三摩地を體得し、一切世界中、唯一眞實なるものは、一切如來の究竟の覺體たる法身如來の自證大覺の體のみなることを覺知し給うたのである。即ち大師は大日經開題に大日如來の大覺の自體を釋し

至、如<sub>レ</sub>祕密曼荼羅金剛心殿。是則最極究竟心王如來大毗盧遮那自性法身住處。心王大日孕<sub>三</sub>身<sub>二</sub>而圓圓之又圓。心數曼荼羅<sub>三</sub>十地<sub>二</sub>以本有之又本。恒沙眷屬鎮住<sub>三</sub>自心之宮。無盡莊嚴常遊<sub>三</sub>本初之殿。云云

また大毗盧遮那成佛の成佛の義を釋して

成者不壞故不斷故不生故不滅故常恒故堅固故清淨故無始故無終故。此則法爾所成非因緣所生<sub>二</sub>故<sub>一</sub>佛者梵語之略也。具云<sub>レ</sub>沒駄<sub>二</sub>翻云<sub>レ</sub>覺者。言<sub>レ</sub>覺者不眠名<sub>レ</sub>覺開敷爲<sub>レ</sub>義。又常明故照了故如實知見故。一切賢聖一切凡夫各有<sub>三</sub>分覺。然未<sub>二</sub>究竟<sub>一</sub>。如來兩覺圓滿洞達故曰<sub>二</sub>大覺<sub>一</sub>。云云

即ち一切諸法の中、本有常住、眞實普通の實在は、たゞこれ法身大日如來の大覺の自體のみなることを顯示せらる。しかるに顯教の經論に法身を空なり、無相なり等と釋せられたるは、これ顯教は因人の爲の説なるに依る。即ち大師は法身如來は因人よりいへば空にして果人よりいへば本有なることを明かし並約因位談、非謂果人也と釋し給うた。此くの如く因人の虛妄分別の邊よりいへば法身は空にして、如來聖智見よりいへば有なりとの高判はこれ顯密二教因果二分の見解の、根本的相違點を示

されたるものである。しかして法身自證大覺の果分の實在の開顯よりして、一切衆生を本有薩埵として、其の實在を確證し給うたのである。大日經疏に大日如來が大覺を成じ給ひしとき、一切衆生等しく大覺の大系統に連り、金剛薩埵の覺位を成せしことを釋し、

心王毘盧遮那成<sub>三</sub>自然覺。爾時一切心數無<sub>レ</sub>不入<sub>三</sub>金剛界中<sub>二</sub>成<sub>レ</sub>如來內證功德差別智印<sub>上</sub>

これ等の釋文の至願を究むれば、所謂、一佛成道觀見法界草木國土悉皆成佛の意にして、大日如來大覺位を現證し給ひしとき、一切衆生悉く、その自證の光明に照らされ、大日如來の大覺の大系統に連らなり、各々その自證の覺位を成じ、本有薩埵として、永遠の實在性を得たる祕義を開演せられたるものである。即ち無我無自性を説き、一切の我觀實在觀を否定するは、因人爲本の顯教の所明なるも、空三昧に依つて聖智を得その聖智に依つて法性を現證せられたる如來大覺の自體と、その大覺の光に照らされたる一切世界の眞實常住の祕義を明かすものは眞言密教である。即ち如來自證大覺の境に、眞實在觀を立するものは密教である。かくして眞諦果界に佛と衆生、即ち本有の大日と金剛薩埵との實在を明かし、その眞諦の生佛は本來靈的融合即ち本有の加持をなせる祕義を開顯し、この理趣を觀じて、即身成佛の大果を成ずることを説き給ふものである。

しかして眞諦果界に佛と衆生との自性本有の義を説けばとて、これ眞言密教は我説を立する佛教内の邪見外道にあらずして、一切佛教の究竟の果境を開顯せられたるものである。七卷楞伽經第四無常



品に

一切凡愚分<sub>二</sub>別諸法<sub>一</sub>。而諸法性非<sub>二</sub>如是有<sub>一</sub>。此但妄執無<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>性相<sub>一</sub>。然諸聖者。以<sub>二</sub>聖慧眼<sub>一</sub>如<sub>レ</sub>實知見有<sub>二</sub>諸法自性<sub>一</sub>。大慧白言。若<sub>二</sub>諸聖人<sub>一</sub>以<sub>二</sub>聖慧眼<sub>一</sub>見<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>諸法性<sub>一</sub>。非<sub>二</sub>天眼肉眼<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>同<sub>二</sub>凡愚所分別<sub>一</sub>。云何凡愚得<sub>レ</sub>離<sub>二</sub>分別<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>能<sub>二</sub>覺<sub>二</sub>諸聖法<sub>一</sub>故。佛言大慧。我非<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>說<sub>二</sub>寂靜空法<sub>一</sub>。墮<sub>レ</sub>於有見<sub>一</sub>。何以故。已說<sub>二</sub>聖智自性事<sub>一</sub>故。云云。

即ち一切諸法性相無きと云ふは、これ凡夫の妄分別に約する説なり、しかるに聖人の聖慧見を以て諸法を見れば、諸法に自性あり、此の聖慧見に依り諸法に自性有ることを説くも、これ外道凡夫の有見に墮するものにあらずとの楞伽經の所説は、よく密教の本有觀の立場を開説せられたるものである。即ち唯識に正後二智所了の眞諦の有を説くが如く、密教の性相本有の義は、全く法身如來自證大覺の聖智見の境界を開説せられたるものである。祕藏記に顯教は攝相歸性、密教は性相本有を明かすことを述べその密教の性相本有とはこれ如來聖智見の境界、即ち證の處の性相の本有なることを釋し

性之處性相宛然而本有也。譬如<sub>二</sub>日月與<sub>二</sub>光明<sub>一</sub>。日月者性光明者相。是性是相不相離本有者也。是故曰<sub>二</sub>性相常住<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>離<sub>レ</sub>佛而衆生有。不<sub>レ</sub>離<sub>レ</sub>衆生而佛有。如<sub>レ</sub>是融入不<sub>二</sub>相離<sub>一</sub>。云云。

此の如く密教は、自性法身大覺の自體の本有を明かしその大覺の果體より神變加持の無盡の化他の妙用を現する所謂從果向因の曼荼羅の開顯を明かすを正意となすものである。然れば密教は生佛本有

の義をのみ明かし空三昧の理趣を談せざるやと云ふに、密教の正意よりいへば本有本覺從果向因を明すにあるも、機の趣入よりいへば、始覺修生、無執無著空三昧に住して、本尊の三摩地法を修すべきことを説くものである。

上述の如く空三昧を明かすは顯教にして、法界本有を説くは密教なりとの教旨は弘法大師の何れの書にも釋せられあるところなるも、今暫らく顯密二教論について解せん、二教論は法身説法章とも稱せられ、顯教の大乗教にて無神論的理法と觀る法身を有神論的に説きその法身の妙體妙用を明かし、法身佛の説法の義を闡明するものである。しかも今法身説法についての詳解乃至此書に釋せられある種多の義趣に言及することを省略し、大要左の三項目について、敘するであらう。

一、眞言密教は法身の説法、即ち果上の法門なること

二、顯教の大乗教の本體は眞如法身なり。しかも其の法身をば無神論的理法なりと遮詮的に釋するも、密教は表詮的に其の妙體妙用を開顯するものなること。

三、法身大覺の果體、眞諦法性は生佛の假相を絶する。平等一味の理法なりと汎神論的に解するものは顯教の大乗教なるも、密教は眞諦果界に生佛本有の實在を明かし、寧ろ人格主義的實在論とも稱せらるべき理趣を談ずるものなること。

二教論の最初に佛身に法報應の三身あり、その中、報身應身の説法は顯教にして、密教は法身の説



なることを判せらる。

夫佛有三身。教則二種。應化開說名曰顯教。言顯略逗機。法佛談話謂之密藏。言祕奧實說(中略)若據祕藏金剛頂經說。如來變化身爲地前菩薩及二乘凡夫等說三乘教法。他受用身爲地上菩薩說顯一乘等。並是顯教也。自性受用佛自受法樂故與自眷屬各說三密門。謂之密教。此三密門者所謂如來內證智境界也。等覺十地不能入室。何況二乘凡夫誰得昇堂。故地論釋論稱其離機根。唯識中觀歎言斷心滅。如是絕離並約因位談。非謂果人

也。

二教論にかぎらず大師は顯密二教の淺深を判釋せらるゝとき。その能説の佛身より判せらる。これ所説の法門の淺深は、能説の佛身の優劣に基くとの見解に依るものである。今三身説法の義相を果寶抄の意に依り一應略釋せば、應身即ち變化身は地前の菩薩及び二乘凡夫等の感見するところの佛身である。此等の人は未だ眞如法身の理を證得せず、たゞ分別事識に依つて一々の事法に於て心外の領解を作す。此の如くの機に對して現する所の佛身は必ず分齊あるが故に、變化身の卑小の形を顯す、此の變化身所説の法は三乘教である。三乘教とは法相三論の兩宗である。彼の兩宗所談の宗義淺深あるも、總じて之をいへば兩宗共に眞如緣起を談せず、事理性相未だ全く融せざる義あり、事法若し法性に融せば、一々の色相法界に逼じて分齊を離るべし、しかるに事理性相別なるが故に必ず事法に分齊を存す、即ち變化身地前の人に對して説く所の法門定て此の域を出でず。次に他受用身は臺上の報身

である、色相莊嚴殊妙にして、法界に逼じ分齊を離る。これ十地の菩薩は已に眞如の理を證し、一切の諸法は皆眞理を離れずと了す。眞如の理性は萬法虛融の體なるが故に、所として至らざるはなく遍せざるはなし、此の理に契うて感見する所の佛身は、必ず相好光明法界に周遍して分量を離る、故に他受用身十地の菩薩に應ずること最も其の理あり、此の佛所説の教はこれ一乘なり、一乘とは法華華嚴の兩宗なり、又所談の宗旨は淺深ありといへども總じて之をいへば、兩宗共に眞如緣起の義を談じ、性相即一を以て宗極となす。機法相應する意知るべし。

次に自性自受用の理智法身は、これ正しく密教所説の佛身なるが、この法身はこれ等覺十地の境界を越え、無明業相の妄念を離れたる位に、法爾の功德法性の理に契うて、其形を現じ、更に迷機に對せず法性獨り存す、即ち彼の他受用身は周遍法界の佛身なりといへども、猶十地の菩薩に對す、十地の菩薩は所見の理未だ窮まらず、所斷の惑未だ盡きず、是の故に十地の位に隨つて十身遮那の別を成ず、即ちなほ分轉の域を越えず、又業識の妄念未だ亡せず、故に能見の外に所見の佛體あり、猶心外の境を越えず、しかるに佛果の中には微細の能所たる業識を離れ能見凡て空なり、この業識能所を斷じたる佛果の境は、一々の諸法皆法體に住し、此の法の外に餘法を見ず、相對を絶して法界に住す、此の中に建立する所の能化所化大に普通の建立と異り、即ち此の境地は大師の所謂都絶能所の能所に對して、向ふ所舉體同なるが故に、佛を本地自性身と名け、機をば自性所成の人と號し、教をば自受法



樂の説と稱す。已上は二教論の果實抄の意に依つて三身説法の義相を一應敍せしものなるが法身の境は業識を離れ、一切の法は能所相對の相を絶し、法界體に住して、法性法爾の功德を顯す、即ち法法位に住せる境である。しかして法法位に住する道の眞源は、阿含經般若經法華經等に説かれたるところにして、眞言密教にも、法法位に住する深義を開演す。しかもその法の理趣の詮顯如何によつて大小顯密教旨を異にするに至る。即ち諸法本來寂滅相に住すとなすは顯教にして、密教は法は本來自覺體なり、その本有の自然覺體を現證し、法爾の法性に住するを法法位に住する如來の果體なりとす。即ち法本來自然覺體なりと共に、その自心性に自ら覺めんとの必然性、所謂菩提心の勢力あり、また已成如來の加持力に依り、修生の菩提心を開發し、始覺修生の極、本覺の覺體を現證し、始本の相を絶せる不二一實の大覺體を成じ、その大覺の自體に住し、その自體を動せず、三世常恒に、その大覺の三摩地を表現せるもの、これ法身の説法である。心王の法身大日如來大覺の體を現成すると同時に一切の心數眷屬同じく覺位を成じ、心王の大日自證の三摩地を開説し給へるを聽受すると共に、各々自の三摩地を開説して、自受法樂、各説三密の妙境、これ如來果界の實相なりとす、大師此の義を顯明せんとして、二教論に金剛頂分別聖位經の文を引用せり。

自受用佛從心流出無量菩薩。皆同一性。謂金剛性。對遍照如來受灌頂職位。彼等菩薩各説三密門。以獻毘盧遮那及一切如來。便請加持教勅。(中略)一一菩薩。一一金剛。各住本三昧。住自解脫。皆住大悲願力。廣利有情。

若見若聞悉證三昧。功德智慧頓集成就矣

無明を斷じて開顯せられたる法法位に住する眞諦果界は、諸法常寂滅に住する一如平等の世界にあらずして、一切諸法各々その自性の自然覺體を現證し、各々自の法界三昧に住し、その本誓三昧を三世常恒に開演すると共に、本誓悲願に依るが故に、廣く一切衆生を法界曼荼羅に引攝する妙用を現じ給ひつゝあるのである。大日經金剛頂經、釋摩訶衍論、菩提心論、及び大師の御書物皆如上の義趣を顯示せざるはなし、大日經に説かれたる阿字本不生の理をば、疏には心自證心心自覺心と釋せられ、或は本不生理、自有理智。自覺本不生等と解せられ、經には我一切本初。號名世所依。説法無等比。本寂無有上等と説けり。しかして此等は、凡て大日如來の自證大覺の體を開演せられたるものなるより觀るも、眞諦自性の體は、法を現證せられたる如來の三摩地の體、即ち自然覺體を現證せる人本となすべきことを知らるゝのである。金剛頂經の五智一心の義も同じく此の義を明かすものにして大師の六大一實の義ももとより此義を開演するにあり、即ち顯教に明す眞如無相の一心の源底に六大一實の體を開説すると云ふのみにては大師の六大緣起説は、不二果上の緣起なる意義未だ顯はれず、この六大體大が理智不二、各具五智の實覺智體にして、この體性を現證せるものは毘盧遮那本地法身である。この大覺體より見れば、三細六麁の妄法の緣起の當相そのまゝ毘盧遮那法身の差別智身たる祕密曼荼羅の開顯である。その他釋摩訶衍論の不二摩訶衍、菩提心論の三摩地の體何れも毘盧遮那如



來の大覺の三摩地の體を祕密眞言の體性となすことを明かされたるものである。されば大師は二教論の初めに釋摩訶衍論の五重の問答の釋を引用せられ、顯教の大乗教はなほこれ無明の分域にして、眞言密教は不二摩訶衍の明の境界なることを釋せられ、また不二摩訶衍の體に眞生二門の諸佛を攝する義を釋する文をば、慈行抄等には、不二は法にして大海の如く、諸佛は百川の流れて海に入るが如く假なる人が實なる法に歸する意に解するも、大師は不二摩訶衍の體をば、即ち佛體なりと釋せり。不二門の諸佛は其の德勝れたるが故に、眞生二門の諸佛は不二門の諸佛に攝せらるゝ義なる意に解し給ふ。此等の釋例に依るも眞言密教は人法不二を説きながら、寧ろ法を現證せる人を本とするものなることを知らるゝのである。

如上の如く弘法大師は、自心の自然覺體を現證せる毘盧遮那如來の大覺の體は、眞言密教の本體なると共に、一切佛敎の道元なることを開説し給うた。しかしてかゝる秘旨を闡明するものは、たゞ眞言密敎のみなることを明かさんとして、華嚴、天台、法相、三論の四家大乘の究竟の理と眞言の所明とを對明し、以て此等四家大乘はなほ因分爲本の顯敎にして、法身の自證大覺の果體を開説せざるものなることを判釋せり。今此等四家大乘の判釋の委述をば略し、たゞその概説にとゞめんに、印度の大乗敎として三論法相を擧げ、支那の大乗敎中にて天台と華嚴とを擧げ、此等四家大乘を以て諸大乘の所明を盡せるものとし、密敎と對辨して、顯密二敎の淺深優劣を判せられたるものなるが、大師の

此等四家大乘に對する御諭釋を見るに、眞諦空を明す三論宗、及びその三論の敎系に屬する天台に對しては、これ入佛道の初門にして、未だ法身如來祕奥の境を開顯せざる遮情敎なりと判じ、眞諦の有を認めながら、なほ廢詮談旨聖智内證の境となせる法相宗、及び果海の實在を暗示しながら、なほ果海をば不可説に屬せる華嚴宗に對しては、その廢詮談旨の眞諦、不可説の果分は、これ祕密眞言乘の體にして、この聖智内證の眞諦、不可説の果分を開説するものは、眞言密敎なりと釋せり、蓋し三論宗は無相遮情敎にして、入佛道の初門たりの説に對しては、別に釋を要せざるところなるも、天台は三論宗と同じく遮情敎にして入佛道の初門なりとの御諭釋に對して、一言解を加へんに天台は三論の敎義の開展せるものにして、隨つて無我無相を宗極とし宇宙の本體とか、法界の大我と云ふが如き、我觀、實在觀を立せざること、かの智者大師の摩訶止觀の觀不思議境の説段や、法華玄義の二諦境の釋等に、攝論學派の阿梨耶識や、眞如識を立つる地論學派の説に對し、第八識または第九識等の微細なる心識は、これ上位の菩薩の定中に見る心識にして、これ本來の心にあらず、かゝる心識を執して諸法の本源となすが如きは、これ菩薩無明の見なりとて評破せられてあるに依るも知らるゝのである。但し天台宗は宋朝に入て所謂山家山外の法義の論争あり、後の天台の學者は平等の理中にも差別を見、空中にも三千を立し、無明を除くも三千の差相あると云ふ、天台の有相家たる山家四明智禮の説を以て、天台の正統説なりと稱するも、弘法大師の所判よりいへば、天台は應身佛所説の法華經を



所依の經典とし、その所對の機は愚法二乘にして、これ因分中の因分の教である。金剛喻定以還の因分に於ては、如何なる立場にあつても、我觀、實在觀、有相觀を立すべきでない、もし因分の立場にあつて強てかゝる積極説を立せんか、これ已にその教の立場を逸出せる邪見外道たるべきものである。大師は天台を無相爲本の遮情教なりと判じ給へるは、法華經の藥草論品に

如來知<sub>レ</sub>是一相一味之法<sub>レ</sub>所謂解脫相、離相滅相、究竟涅槃、常寂滅相、終歸<sub>レ</sub>於空。

或は止觀輔行に

當<sub>レ</sub>知四句求<sub>レ</sub>心不可得。求<sub>三</sub>三千法<sub>二</sub>亦不可得<sub>中略</sub>亦縱亦橫求<sub>三</sub>三千法<sub>二</sub>不可得、非縱非橫求<sub>三</sub>三千法<sub>二</sub>亦不可得。言語道斷心行處滅故名<sub>三</sub>不可思議境<sub>一</sub>（中略）當<sub>レ</sub>知第一義中一法不可得。況三千法。世諦中心尙具<sub>三</sub>無量法<sub>二</sub>況三千耶。

これ即ち第一義中一法不可得、言語道斷心行處滅を宗極となすことを示すものである。天台はかゝる境地を宗極となすより無相爲本の教なりと判じ、入佛道の初門なりと釋し給うたのである。

喩曰此宗所觀不<sub>レ</sub>過<sub>三</sub>三諦<sub>一</sub>。一念心中則具<sub>三</sub>三諦<sub>二</sub>以<sub>レ</sub>之爲<sub>レ</sub>妙。至<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>彼百非洞遣四句皆亡唯佛與佛乃能究盡。此宗他宗以<sub>レ</sub>此爲<sub>レ</sub>極。此則顯教關楔。但眞言藏家以<sub>レ</sub>此爲<sub>レ</sub>入道初門。不<sub>レ</sub>最秘奧<sub>二</sub>仰覺薩埵不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>不思。

これ即ち二教論に於ける天台に對する御諭釋である。

次に聖智所了の眞諦の有を認めつゝも、因人にあつては、廢詮談旨の境なりと云ふ法相宗、或は不可説と稱しつゝ、果分の實在を説く華嚴宗に對しては、眞諦は言斷心滅といひ、果分不可説と云ふは、

これ因人の言心に約す、即ち顯教の當分にては、眞諦は廢詮談旨なり果分不可説なるべきも、その廢詮談旨の眞諦、不可説の果分を果分相應の言心を以て開説し給へるものは眞言密教なりと判じ給ふ、以上の所述に依つても知らるゝが如く大師は十住心論にも、二教論にも、天台より華嚴の教説を高しとなし給ひしは、これ天台は理事無碍、華嚴は事々無碍の理を明かし華嚴の事々無碍の説が、六大無碍の眞言の説に親近せると云ふ義より來りたるにあらずして、天台は緣起因分に止まり、高き果分の實在を説かざるも、華嚴は不可説といひながらも、祕密果分の境界を暗示するゆゑ、天台より華嚴を高しとなせるものである。即ち天台はたゞ因心の本具を説き、佛果自在の境も因心の一念を出でずと高し、高き佛果を因位に引き下し、本有の一念を觀せんとするに對せば、華嚴には緣起と共に性起を明かし九界の迷人をして佛果の上に引きあげ、一切世界をして舍那の果體に同せしめんとするものである。かくの如く天台はたゞ緣起の當相に止まり、華嚴は舍那果人の性起の祕旨を説くが故に眞言密教にては、天台より華嚴の教義を高しとなすものである。しかしこゝに知るべきは、華嚴に於ける性起と、性海果分とに、可説不可説の異りあるといふことである。即ち華嚴の性起品に佛身の自在無礙の大用を明かすもこれ賢首大師の説の如く性起品はこれ十地品の因位と同會の説にして、しかもその説主は、これ因位の普賢菩薩である。隨つて開演せられた如來の果相もこれ因果相對の果にして究竟自在眞實如來の大果にあらず、即ち究竟の果分たる舍那の果體は、唯佛與佛の境にして不可説なれば、性



起と性海果分とは可説不可説相對絕對の異りあることを知るべきである。しかして弘法大師の所判によれば華嚴に明かす不可説の性海果分これ眞言密教の本體なり、即ち天台、華嚴、眞言の教意の不同を華嚴の所明に約すれば、次の如く緣起、性起、性海果分に相當するものがある。しかれば華嚴の性起は佛身の無礙の化用を明かし、從果向因の幽祕を開説せられ、殆ど眞言密教の教意と同一なるかの如く思はるゝものもあるも、弘法大師の所判よりいへば、性起はなほこれ因分に屬すべきものである世の佛學者にして眞言密教と、天台華嚴との關係を論ずるものを見るに、弘法大師に六大無碍の説等あるより、密教は華嚴の事々無碍を六大と説きしまでにして、事々無碍と説を同じうするものなり、また天台の三諦の中の假諦の方面に屬する教なり等と解するが如きは、未だ眞言密教ことに弘法大師の教の眞意を得たるものと云ふべからざる乎。

四家大乘の所説を仔細に觀れば、眞諦空を立する説と眞諦有を唱ふる等の異説あり一概に論じ得ざるものもあるも、眞諦は無相の理體にして佛なく衆生なき一味の法なりと見るに至つては一である。即ち佛と衆生との十界因果の俗諦の差相は、これ衆生の分別の妄念に依つて現起せしものである、されば根本無明を斷じ差相悉く盡き一心の本源に歸し、無相空の一味の理に住するを究竟眞實の眞諦となすが故に、眞諦は所謂生佛の假相を絶し、自他の差相を泯せる一味の法なりとは、これ顯教本來の教格である。但し天台の山家にては、眞諦に三千の差相を見んとするものなるも、こは前敍の如く、圓

融無碍、相即相入の天台の説、即ち圓教中道の理も、因緣即空の通教の説を本として説かれたるものなれば、究竟は第一義中一法不可得の理に歸すべきものである。また華嚴の所明幽玄深奥にして片言隻語のよく盡すところにあらざるも、華嚴經は海印三昧所現の法門にして、その海印三昧は眞如本覺を體となす。しかして其の眞如本覺は空有不二理智不二の妙體である。この理智不二空有不二の法門、もし能證の人に約すれば普賢、文殊の二菩薩と毘盧遮那如來との三聖である。されば華嚴經は毘盧遮那と普賢、文殊の三聖圓融の妙旨を開説せられたるものなりとも觀らる。しかして彼の入法界品を觀るに、文殊菩薩善財童子を引いて普賢菩薩の道場に赴き、文殊身を隠くして其の相を顯はさるは、これ文殊と普賢の二聖圓融の秘旨を顯はす、所謂入法界である。即ち入は能證の智にして文殊、法界は所證の理にして普賢である。かく理智兩つながら亡し、悲智並べ泯し能所双絶し不可説の舍那の果海に沒同するを一經の宗致となすものである。即ち文殊普賢は一切菩薩の上首なるが、此の二菩薩毘盧遮那の果海に沒同するは、これ一切の菩薩の毘盧遮那に歸することを表すものである。またこれ因緣の俗諦の個別をして無相眞諦の理に還源すべき理趣を示すものである。しかして理智双泯する毘盧遮那の果體は不可説不可得なりとす。此の如くなるが故に弘法大師は四家大乘の所明義趣無量なるも、究竟は俗諦には佛あり衆生あり十界因果の差相を觀るも、眞諦は生佛の假相を絶せる一味無相の法なりとなしこの俗諦の差相より眞諦の無相の法に契證する道を明かすものなりと判せり。しかるに



密教は顯教に無佛無衆生の一味の法と觀る、法位に住する眞諦の法體をば本有の自然覺體となし、その自然覺體を如實に現證し、法界三昧に住する如來の三摩地の體をば眞諦の實相となすものである。即ち顯教の無相眞諦の本源に於て、六大一實の自然覺體を開顯し、一切諸法は凡て此の如來大覺の體に住する祕義を開演せるものである。こゝに於て眞言密教は、顯教の無明緣起の境を超越し、如來内證の果徳を開顯する祕教なる旨趣知らるべきである。しかして此の眞諦、果に約すれば本有の大日如來、因に約すれば本有金剛薩埵である。即ち眞諦に佛あり衆生ある實義を開説するものは眞言密教である。かゝる旨趣に依るが故に二教論に四家大乘と眞言密教との對辨終りて、その旨趣を結せんとして、二重の二諦義を立し、初重の俗諦有相眞諦無相は顯教、第二重の眞諦有相は密教なる義を釋成し給ひしものである。

此くの如く眞言密教は、顯教の眞諦果界に本有の自然覺體の實在を明かしその自然覺體を現證せる大日如來の果徳を開顯する教なることを知るに至れば、眞言密教なるものは在來の佛教と異なる種々の祕義を開示するものなることを知らるゝのである。即ち心王の大日自然覺を成ずるとき、無數の心所も同時に大覺を成じ、大日の果體に住し、心王心數の諸尊各自の三昧に住し、その三昧の實相を開演し表現すると共に、本誓悲願の故に法界の衆生を法界曼荼羅に引攝せられつゝあるは、佛果の妙體妙用なることを知らるべく、また我等衆生は如來の大覺の體よりいへば、如來を離れざるものな

れどもその實相を知らざる我等よりいへば、如來と無限の隔りを生ぜしものである。而も如來の加持力と、衆生各自心の自覺體に目覺めんととの必然性、即ち菩提心の勢力あるに依り、佛果を欣求し、自心の本性を現證せんとする菩提心を生ずるに至るのである。こゝにその信をしていよく純淨ならしめ、その行をしていよく堅固ならしむるとき、無上の覺を成せらるゝのである。即ち弘法大師はかゝる教旨を開説せられたると共に、自らその教旨を現證し給うたのである。即ち大師の即身成佛、入定留身は如上の教旨にて解すべきものである。かゝる密教の教旨よりいへば一切衆生の最高至深の欲求は、自心の自覺體を現證するにあり即ち一切世界は自心自覺の相である。隨つて密教にては宗教も道德も唯この一大事を成ずる道として説くものである。こゝに來て佛教は生々榮々の道を杜絶して死々滅々の境に導く空の教なりとの印度以來の厭世寂靜觀を全然離脱せるものは眞言密教なることを知らるゝのである。即ち密教は如來の果體に直入直證し、煩惱業生の生死の生を一念に超え、如來常住の生を得て、成佛國土成就衆生を理想とせるものにして佛教中、最も積極的教なることを知らるゝのである。顯教と對比して此等密教の特異性を釋し行かんには、盡きざるものあれども、終りに顯教は法中心の教なるも、密教は人中心の教なることについて數言を加へんに、根本佛教にては生ける釋迦牟尼如來の佛格が教團の根本觀念であつたが、後に佛教は法中心の教となり理觀爲本の宗教となり、血もなき熱もなき智解の教となつた。しかるに密教は法位に住する法は、これ常寂滅の體にあ



らずして、自然覺體なり、この自然覺體を現證する不生不滅の生ける法身大日如來を教體となし、教の根本觀念となすものである。即ち密教は佛格爲本たる點に於て根本佛敎の敎旨を開顯せるものといはるゝのである。法爲本の顯敎より人爲本の密敎への展開は、種多の方面よりの論述を要するものあれば疎解をなし得ざるも、法爲本の敎は究竟すれば、人爲本に歸すべきは自然の數である。蓋し法中心説よりいへば、人は凡て法より生せしものである。しかるに法より生せし人が、法の自性を現證せんとする自覺心を生じ來るは、これ法本來自覺體たるに因る。即ち法を觀じて大覺を生ずるを宗極となす敎は、法を觀じて成就したる究竟の大覺體を敎の根本觀念となすに至るは法然の歸趣である。されば眞言密敎は法の源底に、その法を現證せし人を觀るものである。即ち法よりも覺者の三摩地の體を根本となすものである。所謂四諦の法は聲聞の三摩地、十二因縁は緣覺の三摩地、唯識は彌勒菩薩の内證法門、般若は文殊菩薩の内證法門、法華は觀自在菩薩の内證法門、華嚴は普賢菩薩の内證法門、金胎兩部の密敎は大日如來の内證法門なることを明かすより觀るも人法不二を説きながら、寧ろ人爲本となす旨趣を看取せらるゝのである。

此の如く弘法大師の眞言密敎は、如來の聖智見、法爾本有の自然覺體を開顯せられたるものにして、一切佛敎の究竟の敎である。興敎大師は顯敎は因縁生無性の義を本義となし、密敎は法界本有の理を説くものなりと釋せられたるが如く、密敎は本有本覺を敎の本體となすものである。しかれば密

敎にては空義を明かさざるやと云ふにしからず、大日經金剛頂經等を始め、密敎の經軌のうちに頗る空義を廣説せられるのである。されば台密の人師等は、顯敎と同じく因縁無性の義を以て密敎の敎義を解し、また印度及び支那の密敎は本不生空三昧を本として説かれるのである。しかれば弘法大師は何故に一般佛敎の說に相違し、また密敎の經論の説相に背いて、本有大我の義を高唱せられたるやと云ふに、こは深く兩部大經の正宗より觀給うたものである。即ち本有本覺の實義を開説せずば、如來大覺の果體、經の正宗が開顯せられざるより、本覺爲本の敎を宣説し給うたのである。

兩部大經は何れも法身大日如來の三摩地を開演せられたる經である。即ち大日如來が從身流出の果人の爲めに本有大覺の體を開説せられたるものにして、彼の報應二身が因人のために無我爲本の敎を説き給ふと異り、法身大覺の體を直顯直示せられたるものなるが故に、經の正宗を如實に開説せんには、自ら本有本覺爲本、果體爲本たらざるを得ないのである。しかれば空三昧は密敎徒の受用すべき法門にあらざるやと云ふにしからず、經の正宗よりいへば法身自證大覺の果體に直入直證するにあるも、凡夫は直にこの如來大覺の體に直入直證し得ざるが故に、大日經には、初地本有佛果の前に三劫六無畏の空三昧爲本の地前の法門を建立せられ、金剛頂經には最初空三昧に住し、つひに如來の種三尊の身を觀すべき五相成身觀を示す。即ち地前に空三昧を修することに依つて三劫の惑障を斷じ初地本有の佛果に契證せらるべきである。地前に人空法空等の空三昧を修し、三劫の惑を斷じ、初地の佛



果に契證するに至る菩提心轉昇の狀相等をこゝに委釋する餘裕なきが故に、密教に依り如來を觀念し如來の内證に契合せんには空三昧に依らざるべからざる所以の一二を示さんに、池水澄めば天上の日月星辰等その象を垂るゝが如く、空三昧に住し、一心を清淨にして、佛陀を念するとき、生佛本有の加持の佛境界の影像を感見することがあるのである。しかも池上に映する天象に愛着して仰いで天上の日月を見ずば、眞の天象の眞相知り得ざるが如く、空三昧に住し、無執無著にして如來を念ずるとき、無明妄執消除せられ、一念の淨信如來本有の果體に契ひ、自心本地の佛體を現證せらるべきである。かくの如く兩部大經の正宗よりいへば本有の覺體を直顯するにあるも、これを受用する凡夫の宗教としては空三昧に住し三密の法門を修すべきことを明かすものである。なほ弘法大師の本有の教義の由來、即ち兩部大經の中には、殊に金剛頂經即ち不空三藏の所傳なること等、また大師以後に台密の人師等に依つて本有の教旨隱蔽せられんとせしを濟暹、興教大師等に依つて其の眞實義發揮せらるゝに至りしこと等を敍せざるべからざるものもあるも、他日の機會に譲り今は省略す。(昭和十年十月)

### 三 三部書を中心として觀たる大師の思想

弘法大師の教義の中心觀念、即ち眞言密教の根本觀念は法身大日如來の自證大覺の果體である。大師は佛教を顯密の二教に分ち給ひしが、その顯密二教の教義の相違點を擧ぐれば、種多あるべきも、その根本的の教體についていへば、因縁生無自性無我の理趣を教體となすものは顯教にして、法身大我の本有の果體を開顯するを宗極となすものは眞言密教である。即ち因縁生無自性無我の理を觀じて、分別の妄執を絶し、無相般若の眞智を得て無上菩提を成ずる道を明かすは顯教にして、眞言密教は無上菩提を成じたる如來大覺の果體に直入直證する教である。即ち眞言密教は入佛道の最初より、佛地の三昧道に住し、現生に無上覺を成就する即身成佛の妙門を開くものである。蓋し顯密の兩教は同じく法身如來を究竟の教體となすものなるも、その法身如來を因人の方面より觀んとすると、また果分より觀るの相違によりて、二教その所説を異にするに至れるものである。即ち能所主客の細念を絶し得ざる因人よりいへば、周遍法界、無限廣大の法身をば如實に觀ることを得ざるより、たゞ遮詮的に法身は無相なり、無我なり、不可得なり、諸法無自性の空理なり等と説くも、この法身の自體を現證せる果人よりいへば、法身は空ならず、本有の中の本有、無我の中の眞我、實在中の眞實在である。



顯密の二教同じく法身如來を究竟の教體としながら、一は因縁生無自性無我の法を法身なりとし、密教にてはその法を現證せる毘盧遮那如來の自證大覺の眞我の果體を教體となすと説けば、顯密二教の教義はその根底に於て無我と大我、空と有、法と人との相違の存するが如く思惟せらるゝもこは先に述べしが如く、共に同一法身を究竟の教體としながら、その法身を因分より觀ると果分より觀るの相違に基くものである。この義を明かに説かれたるものは弘法大師の吽字義である。吽字義に摩字吾我不可得の義を遮情、表徳等の諸義に約して釋し、十信、三賢、九地、因滿の因人よりいへば法身は一相一味無相不可得、言縁の相を絶し、心慮の路絶えたる寂滅絶言の體である。しかも法身の體性を如實に現證せる大日如來の大覺の果體は、無我の中の大我なり、心王の大日如來自然覺を成じ給ひしとき無數の心所悉く大覺の果體を得することを明して曰く

四種法身雖其數無量。而體則一相一味無此無彼既無彼此寧有吾我。是則遮情實義。此處則金剛已還四種行人等希兮夷兮。如響如盲絶之又絶。遠之又遠。四句不及六通亦極。是名絶言之實義。經云摩字者大日之種子。一切世間雖計我我而未證實義。唯有大日如來於無我中得大我也。心王如來既至如是地。塵數難思心所眷屬誰不得此大我之身。是則表徳之實義。

蓋し遮情表徳その説重々なるも密教は遮表並べ明かし、顯教は密教に對せば遮情の一邊を説くものなりといふべし。即ち顯教は無明我執を帶する因人が我執を斷破して無相般若の眞智を得し、無上菩提

を成する教なるゆゑ、無我無相を教の中心觀念となし、密教は無上覺を現證せる果體を開顯する教なるがゆゑ如來大我の實在を明かす。即ち一は因分の教、一は果分の教、因果二分その見地の相違により、無我と大我、法と人、空と有その所説を異にす、二教論に此の義を釋して

並約因位談。非謂果人一也。

といへり。これ佛教の究竟の教體たる法身如來を無相不可得の理體なりとし、法身に色形もなく説法もなく、衆生攝取の靈用もなき無相不可得の理體なりと説くは、並に因分の教なるも、密教はその法身如來の究竟大覺の實體を開顯し、法身は本有常住の靈的實在にして、無限の徳相を具し、衆生攝取の妙用あり、三世常恒にその自内證の法を開説する果分の教なることを釋述せられたるものである。

かくの如く顯教は無相無我の法を教の根本義とし、密教は法身大我の實在を明かすものなることは二教論十住心論等何れもその旨を闡明せられざるはなし。二教論には法身佛の説法を明かすは密教にして法身佛をば非人格的眞如の法なり、無相の理なりとし法身佛の説法を明かさざるは顯教なり、また法身果界の實相を開演するものは密教にして、法身果界の體性は、無相なり、不可説なり、一味一相の理體なりとして、その實相を開説せざるは、顯教なることを述べ、法相、三論、天台、華嚴の四家大乘の根本義と、密教の宗極とを對明し、無所得中道、眞諦空の理趣を宗極となす三論宗は、これ因人の我執を斷絶するを本とせる教にして遮情教なり、入佛道の初門なりと斷じ、同じく三論の教理



を本として開説せられたる天台の三諦圓融、一念三千の理も、究竟は無相不可得の理に歸する遮情教なり、因心の本具を本とし、法身の果體を開顯せざるものなることを喩釋せられ、法相宗には眞諦有の妙趣を説くも、しかもその勝義勝義の眞諦究竟の體は、因人の思慮を超越せる不可得不可説の體なりとなすものなるが、この不可説の眞諦果界の實相を開顯するものは眞言密教なることを顯示し、華嚴にて事々無碍重々無盡圓融の妙理を明かすも、これなほ普賢因人の所了の境なり、即ち天台の一念三千も、華嚴の事々無碍も皆これ無自性無我の理を本として説かれたる因人爲本の教なり、しかして華嚴宗には、かゝる普賢因人所了の境界の外に法身果界の實在を暗示す。即ち法相宗に眞諦は眞有なりと説きながら、而も因人の所了にあらず、廢詮斷旨の境なりといひ、華嚴に果界の實在を明かすもこれ普賢因人の境にあらざれば、不可説に屬す。しかるにその不可得不可説の果體をば如實に現證せる法身大覺の自體には、自らを開顯する妙用あり、この法身大覺の自内證の境を、法身自ら開顯せるものは眞言密教なることを顯示せらる。かく四家大乘と眞言密教との宗極について對明をなし、更にこれら四家大乘の所明と眞言密教の宗極とを總合して釋し、四家大乘の所明一様ならざるも而も因縁生の俗諦に於て十界の差相を明かし、佛あり衆生ありとなすも、眞諦は生佛の假相を絶せる一味の法なり、不可得の理體なりと説くに至つてはその歸趣を一にせるものなることを述べ、この因縁生の俗諦の差相と、一味平等の眞諦の理、即ちこの事理不二、眞俗不二の體をなほ對象としてその實相を如

實に現證せる法身大覺の果體あり、この法身如來自證の大覺の體よりいへば顯教に云ふ眞俗の二門、事理の兩界は凡てこれ法身大覺の自證の光明に照らされ、大覺の内容となり法身無限の果相を表現せる曼荼羅體たるなり、即ち眞言密教にては法身大覺の眞諦果體のうちに十界曼荼羅を開顯せるものである。大日經開題に

上從大日尊至六道衆生相。住各各威儀顯種種色相。並是大日尊之差別智印也。非更他身。故經文云我即法界我即金剛身我即天龍八部等。

これ十界は法身如來の果體を表現せる差別智印なり、曼荼羅の果體なることを明かされたるものなるもかく十界が法身の果相なり、差別智印なりとの秘義は、何に依つて現成せられ、何に依つて開演せられたるやといふに、これ法界の體性たる心王の大日如來が大覺を成ずるとき、一切の諸法は凡て大日如來の大覺の自證大智の光明に照らされ、同一覺を成ずるゆゑである。吽字義にこの義を釋して

唯有大日如來於無我中得此我也。心王如來既至如是地。塵數難思心所眷屬誰不得此大我之身。

かゝる教旨は大日經疏や祕藏記、十住心論等にも開説せられる  
祕藏記には

心王毗盧遮那成佛時。無數心數同時成佛。

此等は大日如來の心王の體が大覺を成ずるとき、心數も心王と同じく大覺を成ずることを示すものな



るも、上述の如く大日如來とはこれ法界の體性なるが故に、その法界の體性たる自然覺體が、如實に自性を現證せるとき、法界の諸法同一覺を成じ、大覺に住し、如來の果相を表現せる差別智印たるなり、吽字義に此の義を述べて

經云。我則法界我則法身我則大日如來我則金剛薩埵我則一切佛我則一切菩薩我則緣覺我則聲聞我則自在我則梵天我則帝釋乃至我則天龍鬼神八部衆等。一切有情非情無不摩字。是則一而能多。小而含大故名圓融之實義。これ法界の體性たる大日如來が自證大覺を成せるとき、一切諸法悉く大覺の果體に住せる祕境を開演せるものにして、大日經疏に

知阿耨多羅三藐三菩提於法平等無有高下。是故如來亦名一切金剛菩薩。亦名四果聖人。亦名凡夫外道。亦名種種惡趣衆生。亦名五逆邪見人。大悲曼荼羅正表此義也。

十住心論

若能明察密語名字。深開莊嚴祕藏。則地獄天堂佛性闡提煩惱菩提生死涅槃邊邪中正空有偏圓二乘一乘。皆是自心佛之名字。焉捨焉取。

これ即ち心性を證悟し、無上大覺を成じ、法界同一覺を現成せる境地を開説せられたるものである。大日經疏に法身大覺の體を釋し、自證成佛の體は、如實智を以て一切の諸法を了々に知見することとなり、諸法の體と相、不生滅と生滅、平等と差別を如實に見て此等の諸法を超越し、此等諸法を大覺の

内容とし、此等諸法に自在を得たる體なることを釋し、

成佛者具足梵音應云成三菩提。是正覺正知義。謂以如實智知過去未來現在衆生數非衆生數有常無常等一切諸法。皆了了覺知故名爲覺。而佛即是覺者。云

また曰く

此宗中佛陀名覺。是開敷義。謂由自然智慧遍覺一切法。如盛開敷蓮華無有缺點。亦能開敷一切衆生。故名佛。

また曰く

佛智慧清淨故出諸觀上。(中略)是故佛智無礙(中略)以下如是淨菩提心出過諸觀離衆相上故於一切法得無罣礙。譬如虛空之相亦無相故萬像皆悉依空空無所依。如是萬法皆依淨心淨心適無所依。

また如實智を以て一切を知るとは、これ無上の眞智を以て法界の性を證することとなり、自心性の法然本有の自覺體を直觀自證することとなり、この自證大覺の體は、一切因人の主客能所の分別智の認識の境にあらず、此等諸見を出過し、超越せるが故に不可得なり無相なり、空なりと云ふも、しかもこの自證の大覺の體は本有金剛の眞實在體なり、所謂無我の中の大我なることを釋し、

今謂一切智智即是智中之智也。非但以一切種遍知一切法。亦知是法究竟實際常不壞相不增不減猶如金剛。又曰く



又如下虚空遠ニ離戲論分別ニ故無ニ和解相ニ無ニ開曉相ニ諸佛自證三菩提當知亦爾。唯是心自證レ心心自覺レ心云云  
又曰く

本不生理自有ニ理智ニ自覺ニ本不生一。

十住心論に第十住心即ち眞言密教の體性は、衆生本有の自然覺體を如實に現證せる覺體なることを開説し

祕密莊嚴住心者。即是究竟覺ニ知自心之源底一。如實證ニ悟自身之數量一。所謂胎藏海會曼荼羅。金剛界會曼荼羅。金剛頂十八會曼荼羅是也云云

二教論には眞言密教の體性は法身大日如來の究竟大覺の體なることを明かし

今謂ニ祕密一者。究竟最極法身自境以爲ニ祕藏一。云云

十住心論に衆生本有の色心、本有の自然覺體を自覺現證せる體が、これ眞言密教の體なることを開演し、二教論には果に約して法身大日如來の大覺の體性、これ祕密眞言の體性なりといへば、祕密眞言の體性を明かすに因果説を異にする如くなるもこはたゞ釋相の異にしてその所詮一に歸するものである、即ち二教論は法身大日如來の大覺の果體の實在を明し、法身の説法を高唱するものなるが故に、祕密眞言の體性は毘盧遮那如來の大覺の體なりといひ、十住心論は大日經の如實知自心即ち因心本有の自然覺體を如實に開覺する、始覺上轉の相を十種に開説せられたるものなるが故に、本有の因心を

如實に證悟せる自覺證智の體性これ眞言祕密の體なりと説かれたるものにして、因果一應説を異にせるが如くなるも、しかもその祕密の體性は本有の自然覺體を如實に現證せる自證大覺の體性なりと説くに至つてはその宗致一に歸するものである。なほ大師は六大本有の法界體これ祕密眞言の體性なることを開説せられたるは、即身成佛義なるが、こは後に釋するが如く、三密加持、入我々入の祕觀に住し、現生に如來の果徳を體得せらるゝは、これ衆生と如來とは共に本來色心一如の體性に住し、その體性本來無碍融即せるが故に、三密加持速疾顯の大祕義を成せらるゝ、理趣を開示せられたるものにして、加持瑜伽を成ずる原理として、六大法界體性の理を明かされたるものである。

上述の如く佛敎に諸法因縁生無我無自性の義を説き、あらゆる神我、あらゆる實在觀を打破するは、因人の分別思惟の上に立てんとする實在觀なり我觀である、しかも無我を觀じ一切の分別妄念を絶せる無上大覺の果體如來大我の實在を明かすものである。しかして弘法大師の眞言密教は因分の境を絶せる如來大我の果體を六大法界の體なり、色心本有の體性なりと説くより先徳のうちには、顯敎の無相眞如の本源に六大四曼三密の三大圓融の實義を示すは密敎なり、顯敎に説く絶對無相の一心の自體をば、六大一實、色心不二の體性なる旨を説くものは、密敎なり等と釋せるを見る。しかも單に無相の一心を六大無碍の體ありと説くものは密敎なりと釋するのみにては、なほその眞意を得たるものにあらざるべし。大日經疏には心自證心、心自覺心といひ、或は本不生理自有ニ理智ニ自覺ニ本不生一といへ



り。即ち一切の分別戲論を絶せる本不生の理體にたゞ理智ありと云ふのみにあらずしてその理智は自らの自體を現證せる覺體なることを明かす、これらは無相一心の本源に六大不二、物心一如の實在體を開説するを密教となすにあらず、色心不二の自體が自らを現證せる自證大覺の體、これ祕密教の體性なることを顯示せられたるものである。

上來は弘法大師の教義の根本觀念は法身大覺の果體の實在を明かし、この果體に直入直證する道を開説せるものなることを闡明せんとて、暫らく二教論等の所釋に依つて、その義趣の一端を述べしものなるがなほ十住心の法門に依つてその義を釋せんに、大師は一代佛教をは、その所明の理の淺深によつて十種に分られたるも、そのうち顯教の所明の出世間の教旨をは第四の住心より、第九極無自性の六ヶの住心に攝盡せらる。しかして第四の住心をは唯蘊無我心といひ、第九住心をは極無自性心と云ふより觀るも顯教は無我無自性の理を示し、空を觀じて我執無明を滅盡し、廓然無生の境に住するを示極となすことを釋明せるものである、即ち小乘佛敎は個人格の永劫に空無の境に住する涅槃を理想とし、その大乘敎は個體をして一味平等の眞如一心に歸没する理趣を説き、個體各々法身常住の生を得、我即法身、當處即法界、現身に佛德を成じ、此の土に淨土を現成する即身成佛の祕趣を開説せざる遮情敎なり、損滅の敎なりとせり。大師の卍字義に此の義を釋して曰く

所謂損滅者苦空無常無我故。四相遷變故。不得自在故。不住自性故。因緣所生故。相觀待故。以是六義一故名諸

法損滅。今所謂卍字實義者不如此是也。經云。卍字報身義。此報者非因緣酬答之報果。相應相對故名曰報也。

此則理智相應故曰報。心境相對故曰報也。法身智身相應無二故名報。性相無碍涉入故曰報。體用無二相應故曰報也。是故常樂我淨卍字實義無損滅一故云

これ顯教は萬法の因緣生の義を説き、諸法は因緣生なるが故に無常なり無我なり、苦なり空なり、畢竟は空寂滅相の理に歸する旨を宗要とする敎なるも、密敎はこの寂滅一味の法身眞如の理體の本源に於て、法界本有如來常住の妙體を開顯するものなることを報身佛によせて示す。即ち顯教にて報身佛とは三大無數劫に六度萬行を修して成就せる因緣酬答の佛果なるも、密敎の報身佛は因緣所成の始覺佛にあらず、法然本有の大覺體なることを開明せんとして、報とは相對相應の義なるも、その相應相對とは理智相應、心境相應、性相相應、法身智身不二一體の大覺體なることを明かす。即ち法性は性相一體、體相用無碍、色心不二の自然覺體なることを釋す。しかも異相遷變なき一如不動、十自在、常樂我淨の本有金剛の法界の實相は、これ法身大覺の自證の光に依つて一切を觀たる境なることを説く、

今以佛眼觀之。佛與衆生同住解脱床。無此無彼無二平等。不增不減周圓周圓。云云

此等の釋文に依つて知らるゝが如く、大師は佛敎に二途あることを示し、一は無我無自性を觀じ、我執無明を滅盡し、一心の本源に歸入するを教ふる所謂顯教にして、一は無上大覺を現成せる毘盧遮那



如來の大覺の體に直入直證し現生に大覺を成ずる道を明かす密教なりとせり。随つて大師の佛教は此の如來大覺の果體の實在を顯示するを宗要となすものである。即ち法身大我の本有觀がその教義の根底をなすものである。

大日經開題に法身大覺の本有常住の祕旨を釋し、

成者不壞故不斷故不生故不滅故常恒堅固故清淨故無始故無終故。此則法爾所成非因緣所生(中略)如來兩覺圓滿洞達故曰大覺。此覺亦非因緣所生法然所得。

又曰く

況復曼荼佛圓之又圓。大我真言本有之又本。云云

梵綱經開題には

夫道之本無始無終也。教源無造無作也。亘三世而不變。遍六塵而常恒。然猶無示者則目前不見。無說者則心中不知。泊乎雙圓性海常談四曼自性。重如月殿恒說三密自樂。人法法爾興廢何時云云

此等の文は人法本有の理趣を示されたるものである。しかして大師の本有觀の由來するところを尋ぬるに、これ大日經、金剛頂經の經旨に依れるものである。即ち金剛頂經には、五智を現證せる法身如來の三世常住、本有金剛の實義を開説せられ大日經には初地淨菩提心の本有常住の實在を明かす。即ち兩部大經に因果本有の實義を開説せらる。かく兩部共に本有の實義を開説するものなれども、大師

の本有觀は寧ろ金剛頂經に依れる乎。即ち善無畏三藏所傳の大日經にも本有と無生、表徳と遮情の不二一如を明かし、東因發心中因發心を並べ傳ふるも、しかも無畏所傳の大日經疏は遮情無相の一法界を表とし、東因發心を主とす。しかるに大師の教義は無相一法界、東因發心の義よりも、本有多法界中因發心を明す不空三藏所傳の教旨を本となすものである。

しかして兩部大經を印度の大乗佛教たる中觀唯識の教旨に比するに無相一法界を説く大日經は眞諦無相空の義を明かす中觀佛教の所明に近きものあり、五智の本有を説く金剛頂經は四智心品を明かし眞諦の有を説く唯識の所明に一應同するものがある。唯識宗にて俗諦たる遍計所執性は因人所見の實我實法にして、體用都無の境なるも、依他起性はこれ如來後得智の所了にして假有なり、圓成實性は如來の正體智所了の眞如實性にして、これ眞有なりとなす。即ち後得智所了の依他の相と正體智所了の眞如の性の有を明かすは密教にて大日如來の自證大覺の果體の本有常住を示し、この如來の三摩地の體より見れば性相は常住なり、性の處の性相は本有なる理趣を明かすに相同するものがある。

無相一法界の義を明かす大日經は眞諦無相を宣説する中觀の所明に同じ五智本有の一心を明かす金剛頂經は眞諦の有を談ずる唯識の談に相似するものありといふも、こはたゞ一應相似の義ありと云ふのみにして、その所詮の義趣にもとより顯密二教の教格の異なりあるは云ふまでもなきことである。即ち大日經金剛頂經はこれ如來果地の境界を説くものである。しかして本有常住の眞實體は、たゞ如



來大覺の果體のみである、即ち本有の説はこれ如來果地の境地にて初めて説き得らるべき教旨である。大日經は無相一法界の義を明かすと云ふも無生と本有、遮情と表徳を並説せられあるが經の正宗は一切衆生をして、初地本初不生の淨菩提心に契證せしめんとするにあり、しかも因人は一念に本初不生の心地に契證すること容易ならざるが故に、初地の以前に三劫六無畏の法門を建立せらる。その三劫に人空、法空、中道觀を明し、人執、法執、無明の惑品を斷破することを説く、しかしてこの三劫の惑障を斷するの地前法門には本有の説なく、たゞ無自性無我の義を示す。この地前の無相觀によつて一切の惑障斷盡するとき初地本有の菩提心開顯せらる。かく三劫の無相觀に依つて顯はるゝ初地本有の菩提心を大日經の正宗となすものである。こゝに於て大日經の本有の淨菩提心體は無明の惑を斷除せるところに現證せられたる心體なること、及び地前三劫の法門は凡て無相觀を根基として説かれ地前因分中には本有の實在の義立せず、本有の實在觀は、分別の妄念を絶せる淨心顯現の果上の境地にて説かれたることを知るべきである。大日經にて無相觀により三劫の惑を斷除して現證せる初地淨菩提心體の本有常住を説くが如く、金剛頂經も五相成身觀に依つて本有の五智を現證せる毘盧遮那如來の果體の本有常住の義を明かすものである。

かくの如く大日經は初地本有の淨菩提心を正宗とし、金剛頂經は五智を現證せる毘盧遮那如來の果體の實在を明かすより、大師は深く兩部大經の經旨より觀て密教は如來果地の境界を開顯し、果體本有の功德を開説せる教なることを明かし給ふ以て大師の本有觀の根基知るべきである。しかして大師は毘盧遮那如來の本有の果體を示すと共に衆生本有の淨菩提心の實在を明かしこの如來の自證大覺の體と、衆生淨心とはその本源に於て靈的冥合をなせる本有加持の祕義を開説し、この生佛本有加持の祕義を體得する即身成佛の宗旨を開演し給うた。

眞諦法性はたゞ一味の法にして、生佛の假相を絶し、自他の差相を混ずとは多くの佛教の所説なるも大師は眞諦法性の本源に無盡無數の自然覺體の實在を明かす。即ち小乗は六境を認知する六識を説き、大乘は唯妄の第七識、眞妄和合の第八識、唯眞非妄の第九識、非眞非妄の第十識を明かすこの眞非妄の第十識はこれ絶對究竟の一心の眞源にして言亡慮絶、一味無相の理體なりこの無相一心の底に色心不二の自然覺體の實在を明かすものは眞言密教なりしかしてこの色心不二の自覺體は無量無數にして各々その自性を任持し、その本性を動せず、しかも無量無數の自然覺體は各々法界に遍じ冥然として靈的融合をなせること、あたかも千燈の燈體その自體各別なるもその燈光冥然として同體なるが如く、兩足多しといへども同一水なるが如く、多にして一、一にして多、所謂而二にして不二、不二即而二の妙體なることを卍字義に述べて曰く

同一多如。多故如如。理理無數。智智無邊。恒沙非喻。刹塵猶少。兩足雖多。並是一水。燈光非一。冥然同體。色心無量。實相無邊。心王心數。主伴無盡。互相涉入。帝珠錠光。重重難思。各具五智。多而不異。不異而多。故



名一如。一非レ一。無數爲レ一。如非レ如常。同同相似。云云

諸佛はその自性を體得し、萬徳を開見して遍法界無碍自在の廣大の果相を成じ、衆生は自らの本性を覺知せず、法界を攝して一塵のうちに入り、虚空無碍のうちにて自ら石壁の牢獄を造り三毒の曠野に迷ふ。されば一切衆生をして、その自心性を如實に開顯せしめんとして、衆生本有の淨菩提心を如来大果のうちに住せしめ、生佛一體の祕義を體し、凡身に即して如来の妙業を成ずる深眞趣を卍字義等に開說せらる。一切衆生は色心不二の自然覺體に住する金剛薩埵にして、その自心の本性を如實に體得せんとする必然性がある、衆生にこの本然の菩提心の力あると共に、如來自證の加持力があるが故に、こゝに歸佛の菩提心を生ずるに至る。かく菩提心を發起し、如来に歸命するとき、感應加持の力に依り、現身に佛徳を成就することを得、即ち眞言密教なるものは、感應加持の力に依り佛徳を現證する祕旨を開說するものである。

蓋し如来の智慧は普く法界の衆生を攝取するが故に、生佛互に感應ある理趣は一切佛教の等しく説くところなるも、しかもその至願を尋ねれば、生佛感應の義はこれ生佛の差相歴然たる因縁生の俗諦の方面の說にして、生佛の差相を絶せる眞諦眞如の體に於ては、感もなく應もなくたゞこれ一味の法なりと説くものである。随つて感應の極致つひに生佛感應の境をも越えたる一如の法に歸するを教の極致となすものなるも、弘法大師はこの感もなく應もなき眞諦界中に生佛の自然覺體の實在を明し、

生佛の六大體性の無碍即ち本有の加持の理趣に安住し、修生の三密に依つて此の本有の加持の祕趣を體得する即身成佛の義を闡揚せり。

蓋し眞言密教の特質は三密加持にあり、三密の法門を修して有相無相の悉地を成ずる道を説くものは密教である。即ち三密加持速疾顯の一句は印度、支那、日本の三國の密教に一貫せる密教の特質である。弘法大師の即身成佛義の最初に金剛頂經、大日經、菩提心論の二經一論八ヶの文を引證せられたるが、此等は菩提心を起し、佛果を求め、如實に三密を修すれば現身に如来の果徳を成せらるゝことを明かすものにして、何故に感應あり現生に成佛せらるゝやの理趣を説かれたるものではない。たゞ三密加持速疾顯の義を示されたるものである。然して大師は三密加持速疾顯の理趣を明かさんとして六大無碍常瑜伽、四種曼荼各不離の實義を述べ給ひしものである。金剛頂經に依れば生佛の曼荼羅重々無碍なるが故に、一念如来に歸命すれば、凡身に即して佛身を成ずる旨を説かれ、大日經には加持感應するは、生佛の自體同じく阿字の大空位に住し、自性平等なるが故に、如来に歸命し、一念に能所を斷すれば如来金剛の身を成ずる義を説くものである。この本不生の訖哩陀耶の一心を開說して地水火風の五大となし、質多心を第六識とし、この理智の二心の不二、即ち六大無碍常瑜伽の義を顯示せるものは弘法大師である。この六大無碍常瑜伽はこれ能所主客を斷する都絶能所の一法界の本源に開顯せられたる法爾瑜伽の能所である。都絶能所の上の法爾瑜伽の能所とは色心不二、理智不二、境



智不二の自然覺體は無盡無數にして、しかも各々の自體に住し冥然同一體をなせる覺體である。生佛の體性は平等平等なるが故に、この自心性を如實に體得せんとの最高至深の要求を生ずるに至る、かくして始覺の菩提心を生じ、修生の三密を修し、つひに生佛一如の六大法界の本有加持の體性を體得するに至る。即ち三密加持に依つて佛徳を成せらるゝに至るは生佛の體性本來加持無碍なるによる、此の如く體大無碍なるが故に相大不離なり、生佛の體相無碍涉入せるが故に、三密の妙用を修すれば感應加持の瑜伽の秘趣を體せらるゝのである。上述の如く體相用三大圓融の妙旨を開説して、即身成佛の實義を明すものは、大師の即身成佛義である。しかして三密加持速疾顯の義は印度、支那、日本の一切の密教に一貫せる特質にして、四種曼荼羅重々無盡の義は、金剛頂經に説かれたるところなるが、たゞ六大無碍常瑜伽の義は大師に依つて創唱せられたるところである。大師は何故に即身成佛義を成せんとして六大無碍の義を説き給うたのであらうか、即ち三密加持速疾顯の義は生佛共に阿字本不生の一心に住する理趣に依つてもその義成立せられ、また四種曼荼羅重々無碍の理趣に依つてもその義一應成せらる。しかれば大師は如何なる理趣を闡明せんとして前來の祖師の未だ説かざる六大無碍、四曼不離、三密加持の三大圓融の教義を成じ給うたのであらうか、思ふに三大圓融の教義に依らずば、大師の所謂即身成佛の實義が開顯せられざるによる。

蓋し即身成佛の一應の理趣は實大乘教の等しく説くところの眞如緣起説に依つても説示し得らる、

しかも大師は即身成佛義を成せんとして、眞如緣起説に依らず六大緣起説を開演せられたる所以を知れば、阿字本不生の無相一法界の理を所由として即身成佛義の成せざる所以の一端を知り得らるべき乎。

即ち顯教の大乘佛教に眞如緣起の理を明かし、因緣生の萬法の當體不生不滅の眞如法身の體なる玄趣を説き、生滅即眞如、娑婆即寂光、凡身即佛の理を成するが故に、この眞如緣起の説に依つても即身成佛の義一應成じ得ざるにあらず、しかも眞如緣起説は眞妄和合の生起を明かし我等の身心は無明有力に依つて緣起せる假相なり、眞如の妄的發現なりとして、緣起の差相を攝して眞如一心の理に還源することを説くものである。かくの如く身心の當體を迷妄となし、一心の本源に歸せんとする眞如緣起説に依つて、眞の即身成佛義が成せざるや明かである。されば無相眞如の理を觀じ無明を滅盡しつひに證得せる一心眞如の玄底に本有の理智、色心の實在を明し、この理智不二の自然覺體が自らの自體を現證せる毘盧遮那如來の果體の眞際を開説するに、六大四曼三密の三大圓融の法門を以てせらる。此の如く六大緣起は無明因分の境を超越せる如來果上の功德の開顯を明かすものである。この六大緣起の法門により一切衆生の色心の當體はこれ如來果相の顯現なり大日如來の差別智印なり、眞實在の正當なる開發なる理趣が闡明せられ、即身成佛の大義が初めて開顯せられたものである。然して阿字本不生の一心緣起の説もこれ秘密果上の緣起を明かすものなるも、その淺略の一邊眞如緣起の義



に同ずるものあるゆゑ、大師は阿字緣起の説により給はず本不生の一心のうちに理智あつて理智自らその自體を自證せる大覺の果體の開顯を明かすに六大緣起の説を以てせらる。

密教は法性を體得せる法身大覺の果體の實在を明かし如來自證の境より一切を觀、一切諸法に如來常住の相を見る曼荼羅の祕義を説くものなるが、この如來大覺の三摩地の體は色心不二、理智不二、六大一實の體にして一切に遍じ一切を攝す、しかしてこの大覺の體はたゞ理智不二の自然覺體を如實に現證せると云ふのみにあらずして、一切衆生をしてその自性を自覺せしめんとする本願力ある覺體である。されば大日如來その自然覺體を現證し、その自證の三摩地を三世常恒に表現する自受法樂の説法は、衆生邊よりいへば、如來自證の加持を以て衆生の長眠を警覺し給ふ御聲である。しかしてこの如來三摩地の體より發する説法はこれ眞言密教にして、これ眞言なり、陀羅尼なり、法身の説法なり。聲字義に曰く

雖云眞言無量差別。極彼根源不出大日尊海印三昧王眞言。彼眞言王云何。金剛頂及大日經所說字輪字母等是也。彼字母者梵書阿字等乃至呵字等是。此阿字等則法身如來一名字密號也。乃至天龍鬼等亦具此名。名之根本法身為根源。從彼流出稍轉爲世流布言而已。若知實義則名眞言。不知根源名妄語。妄語則長夜受苦眞言則拔苦與樂。譬如藥毒迷悟損益不同。

こは一切の眞言は凡て法身大日如來の自證大覺の三摩地の體より流出せるものなれば、字々皆法身自

證大覺の功德を具せざるはなく、聲々衆生警覺の説法の音聲ならざるなし、されば一切の言音、一切の眞言に即して眞言の實相たる法身の體を得すべきことを開示せられたるものである。

蓋し大日經疏に眞言陀羅尼の文字はこれ世間所用の阿字乃至卍字等の文字なり、かゝる世間の凡人所用の文字は、何故に廣大無碍の功德を具し、如來の境界に歸入する出世間の法門となりやの義を釋し、眞言陀羅尼の文字はこれ世間所用の文字なれども、これ如來の威神力を以て皆加持せられたるものなるが故に、一字一文皆如來無量の功德を具せる如來の加持身なることを明かし、更にその加持の實義を述べ如來が三大無數劫の間、因位の願行に依つて成就せる威神力に依つて、文字を加持せるゆゑ、文字に如來無限の功德力を具するも、もし文字本來法身實相の體にあらずば、如何に如來の威神力に依つても加持し得られざるなり、しかるに文字本來實相の體なるが故に加持の義を成ずる理趣を開演し給ふ。しかして大日經疏にて實相法身とは、一切諸法本不生の理に住することである。眞言の體は本不生の法體なるが故に、この眞言を念誦し字義を觀じ眞言の自體たる實相法身に契證すること  
を明かす。即ち眞言、陀羅尼はこれ如來の威神力を以て加持し給ひしが故に、如來無量の功德を具する如來の加持身でありこの加持身たる眞言を念誦することに依つて眞言の自體たる實相法身の本地身に契證せらる。しかして本地法身の體は一切處に遍じ、自心の本性これ本地法身と同體なるが故に、本地身に契合すれば、これ自心の本佛を證するものである。即ち密教の奥旨は實の如く自心の本佛を



體得する如實知自心にあり、しかも衆生は一心の本性を體得すること易からざるが故に、如來無量の功德を具現せる佛果上の法門身たる眞言を念誦し、つひに本地身を知り、自心佛を體得せしむる道を開示し給ひしものである。しかして文字の體はこれ實相なりとは色卽是空、萬法の當體卽眞如法身なる理趣を明かす大乘佛敎の等しく説くところなるも眞言陀羅尼は、如來の威神力を以て加持せられたるものなるが故に、如來無量の功德を具する加持身なる理趣を説くは眞言密敎不共の説なるのみならずその實相法身の體に聲字を具し説法ある義を明かすはこれまた眞言不共の説である。しかして大日經疏に、眞言を念誦し眞言の字義を觀じ、實相法身に契證することを釋せらるゝも、その實相體に聲字を具するや否やに至つては淺深の兩義あり、その深祕釋に依れば、實相法身の體に聲字を具する義を明かすものなれども、その淺略釋に至つては實相法身の體は言語を絶せる不可得無相の一心の體なりとの釋多し、かくの如きは、これ文字の當體卽眞如なるが故に、聲字卽實相の義を一應開説するも、その實相法身の體は言語を絶すとす、顯敎の大乗敎と旨趣を同しうするものである。

蓋し聲字に深祕力あり、咒文を誦じて災厄を脱がれ、福德を招くことを得らるゝの思想は、印度にては今より三千五百年以前即ち佛敎の興起より一千年以前の古聖典と稱する吠陀のうち既に存するところにして梵書時代にも咒文は除災招福の功德ありとして多く誦用せられ、更に奧義書時代に至れば、眞言を念誦するは、單に世間の除災招福のためのみならず、眞言を觀誦することに依つて、自我

が煩惱を解脱して、梵の本體に契合せらるゝとなし、或は禪定三昧に入る方便として、眞言を念誦せらるゝに至れり。

佛敎にても、小乘にては、明咒は多く修道者守護の意義に用ゐられたるも、大乘に至れば、眞言陀羅尼を誦することによつて、世間の災厄を脱し福利を得らるゝとなすのみならず、陀羅尼の本體は、般若波羅蜜多の大智なり、また般若の大智を得る方便として念誦せらるゝに至りしなり。ことに眞言密敎に至れば、諸尊の三昧を修する事相門に、諸佛菩薩の眞言陀羅尼を觀誦し、世間出世間の種々の功德を成就することを明かし、また深く眞言の字義を觀じ無分別智を得て法身實相を體得する義を説くものである。

此の如く眞言を念誦すれば、世間の除災招福の益ありと共に、禪定三昧に入り、生死を解脱する法益ありとは婆羅門も顯敎も密敎も等しく説くところなり。しかも此等の所説仔細に觀れば、その所明もとより一ならず、今それらの委釋を略し、たゞ眞言密敎の不共の深旨を顯はすために、一應彼此對比して釋せんに、奧義書に唵字を觀じて梵に契合することを明かすも奧義書の説は梵は宇宙の本體にして、永劫不滅の眞實性なるも、梵より生起せし現象は無明によつて成れる幻夢に等しき假相なりと觀、この幻夢の假相を捨て、梵の眞實に歸入せんことを説くものである。隨つて唵字を觀じて梵に歸入すると云ふも唵なる聲字卽梵なるにあらず、梵の實體、自我の本性に至つては、一切の聲字假相を



絶すとなすものなれば、眞言密教の聲字即實相の義と素よりその理趣一ならざるや明かである。

また佛教には小乗より大乘に至つて眞言陀羅尼の説あるも、小乗よりいへば、聲字はこれ有爲無常の假法にして眞實にあらず、また大乘にては、因縁生有爲法の全體これ眞實法性なるが故に、聲字これ眞如實相なる義を説く。しかもその究竟に至れば聲字は、有爲の假法にして、眞如法性の體に契はざるものなりとなす。かの起信論に眞如の體は言説の相を離れ、名字の相を離れ、心縁の相を離るゝ義を述べ、華嚴に理圓言偏、言生理亡等と云ふより觀るも、その所明の理趣看取せらるべきである。しかして奥義書には唵字を觀じて梵の實體、自我の本性に契合することを明かすもその梵の實體は聲字の假相を絶すといひ、大乘佛教に眞言を誦じて、眞如の體に契合するも、その眞如の體は聲字を絶すとなすと所明同なるが如くなるも、婆羅門の究竟の理想たる梵は大我の眞實在體なるも、顯教の眞如は無自性無我の法である。即ち大乘佛教の實相觀は大我の梵の實在をも否定せる無我無相の法である。婆羅門教の所説一様ならざるも、差別の現象をば無明所起の迷妄と觀て、梵の實體に歸するを説くはその主流の思潮である、二を遮して梵の一實體に還源するを説くものなるが、大乘佛教はその一なる梵の實在をも否定せる不可得無我の理體を究竟の宗體となすものである。しかして婆羅門の梵の實體にも、大乘佛教の眞如の體にも、聲字言語の相應せざる體なりと説くに至つては一である。眞言密教にても上述の如く大日經疏に本不生の理に淺略深祕の兩意あり、その淺略釋よりいへば、眞言の

字義を觀じて契證せる不可得無相の本不生の理は聲字言説を絶すとなすものである。しかるに弘法大師は聲字の假相を絶すとなす實相法身の體に聲字を具する義を明かすものであり寧ろ一切の聲字は法身實相の體より生起するものなる祕旨を宣暢するものである。弘法大師の所説は上述の如く、本不生の理のうちに本來理智不二の自然覺體あり、その自體を自ら證せる法身大日如來の大覺體の實在を明かすものである。しかしてこの大覺體は自内證の三摩地の體を三世常恒に顯現しつゝあるのである。これ法身の説法にして、眞言の陀羅尼經の本源である。しかして一切諸法の本性は六大一實、色心不二なり、この六大法界體を現證せるものは大日如來なるが故に大日如來は一切諸法に遍在すると共に、一切諸法を超越す。もし宇宙創造の神ありとせば、大日如來はこの神に同すると共に、この神をも超越せるものといはねばならぬ。大師は諸天の眞言、二乘乃至菩薩の眞言等無量なるも、その根源を極むれば凡て大日如來の大覺の體より流出せるものなることを説き、梵天所説の文字なりと云ふ悉曇の字母も、その根源は法身如來より流出せるものなることを釋せられ、各々の諸尊の眞言もその實義を知れば、凡てこれ法身の體性に契合せらるべきを説くと共に、これ等眞言の根源を究むれば、大日如來の大覺より流出せるものなる旨趣を闡明せらるゝより觀るもこれ大日如來は一切諸尊に同すると共に諸尊を超越せることを明かすものである。大師は聲字義に一切の音聲は地水火風空の五大より生じ五大はこれ一切音響の本體なりと釋せられたるが、この五大とは即ち即身義に説ける六大法界體であ



る、しかして即身義には六大はこれ如來の三摩地の體なりといひ、聲字義には五大とは五字五佛及び海會の諸尊是なりと釋せらるゝより觀るも、六大法界はこれ大日如來の現證せる大覺の自體たるべきとを闡明せるものである。隨つて横平等の實義よりいへば五大より發する一切の音聲に即して法身如來の自證の說法を聽受せらるべきである一切の音聽は皆これ衆生警覺の如來の說法ならざるはなし、しかも豎差別にいへば十界のうち前九界の聲字は妄にして第十の佛界の聲字は眞實なることを明す。しかして法身大覺の體、如來金剛の三密は平等々に法界に遍じ、法身自證の三昧を開顯する自性法身の說法は三世常恒なり、この法身如來所說の眞言は、如來無邊の功德を具するが故に我等衆生は、この自在無碍の果上の法門を受用することに依て、有限相對の世界に住みながらこの有限の世界を超越し、如來果地に直入せらるべきである。教相を明す大日經の入眞言門住心品には入眞言門といひ、事相門たる諸儀軌には多く念誦儀軌といふ。入眞言門と云ふも平等の三密門を修すべきを釋し、念誦儀軌と云ふも、單に語密の一法にあらざるべきも、教相を説かれたる品にも入眞言門といひ、諸尊の三密門を明す諸儀軌を念誦儀軌と稱するより觀るも、三密双修を本となすも如何に、その語密を重んずべきかを知らる。即ち所歸の本尊の眞言を念誦しその三密門を修し、有相の悉地に即して無相を體し、始覺修生に即して本有本覺の大覺に安住するはこれ眞言密教の本旨にして、大師の教義の正意の存するところである。(昭和九年三月)

## 四 密教の正意

### 一 眞言密教に對する謬見を匡す

弘法大師の開宗せられたる眞言密教の正意を述べんに、先づ密教に對する世人の謬見を匡し、次に密教は一切佛教の歸趣なることを明かし、後に正しく密教の正意を敍するであらう。

凡そ何れの宗教も其教祖の立教開宗の正意を世に認めらるゝに至りしものは尠いであらうが、眞言密教の如きは其甚しきものと思ふ。世人、祕密眞言宗とは火渡の法とか、或は金縛の法とか或は走者足留の法等、修驗道者の修する一種の祕術を行ふものゝやう思ひ居るものもあらう。或はまた現世祈禱爲本の宗にて、淺近なる一種の迷信教ならんと解せるものもある。或はまた世に佛教學者と云はれるほどの人は、多くは俱舍、唯識、天台、華嚴等の顯教を學びしものにして先入爲主となり、此等の人の密教を解するや密教も顯教も根本義を同しうするものと見て居る。或はまた佛教美術や、印度の哲學宗教を學びし人の密教觀を見るに、密教の曼荼羅の中には婆羅門の崇拜せる神あり、或は陀羅尼を誦じ、聲字の常住を説き、其儀式の内には婆羅門の行する護摩法等あるより、密教は婆羅門の一種の



如く解するものあり、或はまた大日如來は婆羅門の梵と同一ならんと見るものあり、或はまた其宗門の流れを汲み、其法義を相承せるもの、うちにも、宗祖の立教開宗の正意たる即身成佛の如きは、世人に示し得ざる祕法にして、一般の宗教とならざるもの、如く解し、其根本教義より觀れば、第二位第三位に下れる法門を以て世に宣傳せんとするものもある。弘法大師の祕密眞言宗に對し、以上の如き見を以て解せんとするものあらば、これなほ其正意に觸れざるものと云はねばならぬ。此等は密教の形のみ見て深く其教旨を究めざるより起る謬見である。即ち密教は佛身よりいへば、本地大日如來より無量の機根に應じて無邊の佛身を示現し、其教法よりいへば、無邊の佛身、一切の機根に應じて、各々相應の教法を説く、かく佛身に無量の身あり、所説の教また無量なるより、其形のみよりせば密教は種々に異なる釋をせらるゝに至るは寧ろ當然であるかも知れぬ。況んや密教は即事而眞を教旨とし、事々に即して宇宙の大祕密を見んとし世間淺略の義に即して法性の深祕を明かすものである。この密教の教旨を究めず、たゞ密教に世間の淺略教を包容せるを觀、直に其淺略教これ密教ならんと速了するより、密教は種々に誤解せらるゝに至りしものであらうが、大日經疏には密教に包容せる淺略教をたゞ淺略教の意味にのみ解し。深くその世間の淺略教に即して法性の深祕、即ち佛知見を開かざるものは、天魔外道の類なりと示されてある。されば密教を知らんとするものは、たゞ其形のみよりせず、深く其正意のあるところを究めねばならぬ。無量の教法あるも歸趣固より一にして、無邊の

諸佛あるも本體の一なるを知るに至れば、此等の謬見自ら釋然たるものがあらうと思ふ。

金剛一爲乘、不壞諸法教(金剛經)

此毘盧遮那內證之德以加持故從一一智印各現執金剛身形色性類皆有表象各隨本緣性欲引攝衆生若諸行人殷勤修習能令三業同於本尊從此一門得入法界即是普入一切法界門也(大日經疏)

如是等種々因緣無數方便普門應現教化群生雖深淺不同細有異然究其實事無非祕密加持各能開示如來

清淨知見若離如是實相印餘皆愛見所生與天魔外道作諸營侶豈得名爲清淨句義耶(大日經疏)

佛大方便力以無相法身作種種名相加持令諸衆生以因果法證得非因果法是故權實二慧俱不可思議也次

云眞言相如是常依於二諦者是結成不思議二智領解上文施設二諦之意以知名相即實際故能以實際加持而作名相以知淺略即是深祕故能以深祕爲淺略隨衆生所成義利皆實不虛若能解此世諦時自當通達第一義諦故云諸佛說法常依二諦也(大日經疏)

眞言宗には現世の祈禱を爲し、迷信的要素が多いとは屢々聞くところである、眞言宗に祈禱をなせばとて、眞言宗は迷信教なりと速斷するが如きは、未だ眞言の法門を知らざるもの言である。眞言の事相には息災、増益、敬愛、降伏、鈎召、延命等の四種五種の祈願の祕法具はり、衆生の祈願に應じて如來の加持力を被る祕法あり、かく其形のみ見れば、これ現世祈禱爲本の教のやうなれども、密教には此等世間有相の悉地(成就)に即して、出世無相の大悉地、即ち大日如來の常住の身心を體得す



る道を開示するものである。四種五種法の有相無相、外内、淺深の義を要約していへば、息災とは外には一切の災厄を除去し、内には煩惱を除滅して大菩提を成ずる法にして、増益とは外には官位、福德、智慧等を増し、内には凡夫より菩薩、菩薩より佛果に至る道である。敬愛とは外には君臣、親子等の和合を得る道にして、内には佛陀の加被を得る祕法である。調伏とは外には怨敵を對治し、内には四重八重等の罪障を斷ずる祕法である。かくの如く密教は、有相無相、世間出世、内外、淺深の悉地を並べ得する道を明かし世間有相の低級なる信仰を淨化せしめ、萬機を引て高き靈的生活に導くを教の本旨とするものである。されば事相門のみにても、單に現世の祈禱爲本の宗でないこと云ふことが知らるゝであらう。況んや教相門にては三句、五轉、三却、六無畏、十住心、十地等の法門あり何れも修道者の信念の向上純化の歷程を明かし自己本有の無限の靈性を開見する道を示すものである。また以て教の正意の何邊にあるやを推知し得べきである。如來の慈悲は法界に滿つれども、我等の理性は如來の實在すら疑はんとすることがあるのである。しかるに人生の矛盾苦痛に堪へず、信せざるを得ずして佛陀、神明を信じ、如來の慈光を自ら感得するに至れば、如來の實在は其人の心中には一大事實にして、抜かんとして抜く可からざるものとなるのである。法身如來より無盡の三密門を示現し、種々の法門より如來の慈光を感得せしめ、感應道交、入我々入、如來の靈力我に在るを自覺し、我よく如來に代つて如來の事業を成せんと諦信を得せしめ不空羯磨の如來の淨業を成せしむる道を明か

すものである。大日經疏に密教の入道の徑路を説く文に加持身を見れば本地身を知る、本地身を知れば自心を知ると云ふ文がある、密教の正意は自心本有の無盡の靈性を開見するにあるも、凡身は一念こゝに至り難ければ、先づ加持身を信せしめ、遂に本地身を知り自心佛を知るに至る道を明かすものである。さればたゞ有相の悉地を説く方面のみ見れば、密教は淺近なる世間低級の宗教と簡ふところなきが如くなるも、それと共に無相の悉地を明かし法身如來の三祕密身を體得する、無相の悉地、寧ろ教の本旨なるを知らば、現世利益を説くも普通の教と異なるものあるを知らるゝであらう。

また佛教學者のうちには、密教も一般の佛教即ち顯教と同じく、衆因緣生無自性無我を説き天台の三諦圓融、華嚴の事々無碍法界の教義と原理を一にするものなりと解するものがある。これまた密教殊に弘法大師の眞言宗の教理を深く究めざるもの言である。即ち眞言の教義は顯教の大乗佛教の究極の理想境たる眞如法性の源底に毘盧遮那本地法身の實在を説き、宇宙萬有は毘盧遮那如來の靈相の發現にして、十界の差相は法身如來の差別智印なる理趣を明かし一切の衆生をして我即法界、我即法身の大自覺を成せしめ、法身の三昧を體し、凡身に即して如來の妙業を成ずる道を示すものであるが劣慧の人は直にかゝる理趣を得しがたければ、かゝる劣慧の人のために、本地法身より無盡の加持身を示現し、一切衆生を引攝し給ふ。即ち心外の加持身の光明に照らされて、自己本具の無盡莊嚴藏を開發し、本有の靈性を實現する道を示すものである。かゝる劣慧の人の入信の徑路をいへば、先づ心



外に加持身を信奉するものなるが、ひたすら心外の加持身のみを尊信し、愛執せば自心本具の本地佛を開見すること能はざるが故に、心外に加持身を信念しつゝ、而も無自性空觀に入り、加持身に對する愛執迷信を離れ、また心内に佛を求めつゝ、無自性空觀に依り、唯心の佛の影像に對する妄執迷信を拂ふ。かく心外心内に佛を求め其影像を信念しつゝ、而も無我觀に依つて其妄信を空し、遂に絶對本地法身に歸入する信念向上の道を明かすものである。心外心内に加持身を念じつゝ、而もこれを遮遣し其信念愈々深く純化する道として無自性、無我觀を用ゆ。此無自性觀、一應顯教の無自性觀に同するものあるも密教は能縁の心も空し、所縁の境も空し、能所契合の相も空し、眞如無相三昧に住するを道の至極とする顯教と異なるものがある。加持身を信念しつゝ、妄信を遮し、本地法身に契合する道として、無自性觀を明すも、大師の宗教は顯教の如く、非人格の無自性の理が教の本體にあらずして、本地大日如來の靈格の本有常住を説くものである。かの即身成佛義の如きは大師の根本教義を開演せられたるものであるが、此中には大師自ら無自性無我の義を釋せられたる文が一句もない。たゞ經文を引證せらるゝ場合に大空位等の文出づることあるも、かゝる文は無自性無我の義でないこと云ふことを自ら註せらるゝを見ても、其一端が知らるゝであらう。但し顯教と密教との相違點、及大師以前の密教と、大師の密教と遮情表徳裏異なりあること等は後に委釋することである。

また印度の哲學宗教上より密教を觀る人のうちには、密教に聲字實相を説き、梵字を如來の加持身

として尊重し梵字を觀誦して解脱を得る道を明かすこと、かのミーマンサー派に聲常住の義を立て、或は瑜伽派に唵字を觀じて解脱を得る道を明かすと相似たる點あるより、眞言密教なるものも、婆羅門教と源流を同するものゝやう解するものがある。しかしながら大日經に三十種の外道を擧ぐる中に聲論外道等の所説出で、大師の十住心判釋に依れば、此等外道は第一住心に屬するものにして、密教は第十住心なれば、其理趣に天淵の差がある。よしや互に關涉ありしにせよ、其根本歸趣同じからざるものあるを思ふべきである。

或はまた祕密曼荼羅の中に外道崇拜の天神あり、外道所修の護摩法等の儀式あるより、密教は婆羅門の一派の如く觀んとするものもあるも、これまた深く究めざるものゝ言である。今密教の曼荼羅建立の義、其他儀式等に言及せざるも、たゞ外道と關係して明かせる大日經疏の文の一二を引用せんに、護摩品第二十七に曰く

外典淨行圍陀論中有<sub>二</sub>火祠之法<sub>一</sub>然大乘眞言門亦有<sub>二</sub>火法<sub>一</sub>所以爾<sub>一</sub>者爲<sub>二</sub>攝<sub>一</sub>伏<sub>一</sub>類<sub>一</sub>故以<sub>二</sub>佛<sub>一</sub>韋陀事<sub>一</sub>而攝<sub>二</sub>伏<sub>一</sub>之<sub>一</sub>然其義趣猶如<sub>二</sub>天地不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>相<sub>レ</sub>並<sub>一</sub>

即ち眞言の護摩法等外道の相似せるものもあるも、こは外道を攝伏せんが爲めに、佛教の第一義の上に立てる、護摩等を明かしゝものにて、其義趣の不同、天地相並ぶべからざるが如しといへり、或はまた外道の天神の密教の曼荼羅中に在るを説く文に



凡此等諸大神皆是衆所<sub>レ</sub>知識<sub>二</sub>世間衆生各各隨<sub>レ</sub>性欲因緣<sub>一</sub>宗奉供養毘盧遮那爲<sub>レ</sub>欲<sub>二</sub>普門攝<sub>レ</sub>衆生<sub>一</sub>故遍<sub>二</sub>一切處<sub>一</sub>示<sub>二</sub>同彼身<sub>一</sub>即以<sub>二</sub>世間共識之標幟<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>出世間祕密之標幟<sub>一</sub>猶如<sub>二</sub>帝釋之像安<sub>レ</sub>住妙高山<sub>一</sub>如來因陀羅三昧亦復不<sub>レ</sub>移<sub>二</sub>此處<sub>一</sub>開<sub>二</sub>出淨菩提心妙高山王<sub>一</sub>自餘法門例皆如是不可<sub>レ</sub>詳說<sub>一</sub>行者隨<sub>二</sub>彼<sub>一</sub>一乘中<sub>二</sub>功行成就自當<sub>一</sub>開解<sub>二</sub>耳<sub>一</sub>又曰く

我之所尊無<sub>二</sub>與等<sub>一</sub>者亦復在<sub>二</sub>此衆中<sub>一</sub>當<sub>レ</sub>知此法甚爲<sub>二</sub>希有<sub>一</sub>以<sub>レ</sub>生<sub>二</sub>希有心<sub>一</sub>故隨<sub>二</sub>於一切法門<sub>一</sub>而種<sub>二</sub>善根<sub>一</sub>乃至長夜興<sub>二</sub>不善根<sub>一</sub>欲<sub>レ</sub>破<sub>二</sub>壞正法<sub>一</sub>者既至<sub>二</sub>道場<sub>一</sub>見<sub>レ</sub>彼所<sub>二</sub>宗奉<sub>一</sub>大天<sub>二</sub>又蒙<sub>二</sub>不思議法食之施<sub>一</sub>惡心即滅<sub>二</sub>棄捨魔事<sub>一</sub>或生<sub>二</sub>一念隨喜之心<sub>一</sub>以<sub>レ</sub>生<sub>二</sub>一念淨心<sub>一</sub>故便可<sub>レ</sub>於<sub>二</sub>中開<sub>一</sub>出大悲胎藏曼荼羅<sub>レ</sub>也

即ち密教の曼荼羅のうち、外道の宗奉の天神等あるは、毘盧遮那如來の普門應現の徳を明かし、もの、また曼荼羅の下位なる第三重に世間の天神あるは、外道をして己が崇拜せる天神よりも、更に最高の尊あるを信せしめ、彼等を引いて祕密曼荼羅に引入せんがためなることを明かす。また以て曼荼羅に婆羅門教等に崇拜する天神のある所以の一端を知るべきである。

或はまた普通佛教の無自性無我を教の本體とすると異なり、密教には大我の實在を説くを見て、吠檀多派の梵と大日如來と同體ならんと云ふものもあるも、これまた然らざるべし、吠檀多派の如きは梵のみ眞實在にして、現象は凡て迷妄なりとし、この非眞實の現象より眞實在の梵の本體に還源せんことを説くものである。此の如く眞實なるものは神のみにして、現象を凡て迷妄と見る説を大日經には

他主空三昧と稱し、二邊二見を帯びたる偏見として力めて排除せんとする妄見である。しかるに密教には大日如來の一大靈格體を道の本體とするも、この現象は大日如來の靈相の現顯にして、眞佛と同根一體なる理趣を明かし、現象を迷妄と見ず、衆生の心身に即して大日如來の靈徳を實現する即身成佛の旨を説くものである。

密教は印度に於て起りしものゆゑ、印度の密教、殊に印度の哲學宗教との交渉を研究する要あるは申すまでもなきことなるも、大師の密教は七祖の正旨を嫡々相承せられたるものなるも、印度及び支那にて十分顯れざりし祕義を説くものである。この弘法大師の密教、即ち日本の眞言宗の眞義を會得せんには、印度の大乗佛教たる唯識、中觀即ち法相三論の兩宗、支那で成立せし天台、華嚴宗以上に、密教の立場を求められし、大師の教義を究めずば明かならざるものあり、印度の大乗佛教といへば、唯識、中觀がそれを代表するものであるが

大乘無過二種一則中觀二乃瑜伽中觀則俗有眞空體虛如幻瑜伽則外無內有事皆唯識(南海寄歸傳)

此兩宗一は有宗にして、一は空宗と云ふも、共に因縁生無自性、無我空爲本の教である。佛教支那に入りて以來、約三百有餘年間は主として翻譯時代なるが、東晉の頃より翻譯せられたる經論につき、諸家競うて研鑽を始め、教義の淺深優劣を判じ、一代佛教に體系を附して觀る判教をなすもの續出した、大乘義章には三家を出し、大乘玄論には四説を擧げ、義林章にも四家の判教を掲げ、法華玄談に



は南三北七の十家を列ね、五教章に十宗を明し、華嚴玄談には二十二家の判教を示す、此等諸家の判教に依つて支那の佛教家が、佛教を如何に觀たかと云ふことが分かる。そして此等諸家の説もとより一概に云ふべからざるも、大體に於ては印度の佛教のやうに空義を第一義とせず、空義をば第二位第三位に下し常住、眞實、法身、實相の義を第一義とするに至つた。即ち支那に於て始めて判教を立したるものは道場寺の慧觀であるが、慧觀は頓漸二教を以て釋迦一代教を判釋し、更に其漸教を五時に分ち、有相、無相、抑揚、同歸、常住教と次第して無相般若經をば五時の中には下より第二位に列ねた、其他三時教を立つるものは有相、無相、常住、または有相、無相、眞實と次第して、無相を第二位に下し、四教を立つるものにして大衍法師等の如きは、因縁、假名、不眞、眞宗と次第して無相を第二位とし、五宗を立つるものは第三位または第四位に下して觀て、何れも空無我を第一義とせず、無我法中に大我を立てんとするに至つた、かくも無宇宙論的傾向ある無我の教義より實在論的教義を建設せんとするに至りしは、人性本然の要求として空義に満足の出來ないよりこゝに至りしものか、或は支那の國民性のしからしめたるものか、または佛教本來の眞意義が顯はるゝに至りしものか、何れにもせよ佛教教義の一大發展といはねばならぬ。要するに印度の佛教は空に偏せんとする傾きありしが、支那に入つて寧ろ有を重せんとするに至つた。華嚴の事々無碍觀も天台の三諦圓融一念三千の説も、凡てこれ事々に無限の理趣を觀んとするものである。所謂抽象的のものより具象的に、普遍的

のものより個體に意義を見んとする傾きがある。而も弘法大師の判釋に依れば、天台、華嚴の説も、なほこれ印度以來の因縁無自性の原理に立つものにして、究竟は無我空寂の消極觀に墮するものとせり。即ち此等諸宗は何れも小我の妄執を拂ふを主とせるものにして、未だ法身大我の眞光を直に顯得する道を示さざる無明因分の教とし、此等諸教の究竟の理想境たる果界を密教の本領とし、印度以來の厭世寂靜の思想を全然超越し、如來果地の密奧を證示し、毘盧遮那如來爲本の一大宗教を開示せるものである。世の密教學者の密教觀なるものを觀るに、往々に大師の密教の本義に觸れざるものあるを觀、特に如上の言をなしたのである。こはなほ後に述ぶるところであらう。

大師の密教は門外の人に其正意を認められざるのみならず、其末徒も教の正旨の發揮に努めず、第二位第三位と思はるゝ法義を其本精神の如く宣傳し來つた。もとより眞理の開見は一朝にして、遂げ得らるゝものにあらずとも、門外の人をして本宗に對し、如上の誤謬あらしむるに至りしは、末徒の責と思ふ。

大日經の三劫段の法門に依れば、我等は道の本體たる本地法身を開見するに至るまでの、信念向上の歷程に三階段あるものとせり。

一には心外に本尊を見て、有相の悉地を求むる位。

二には唯心觀に住し、主觀に本尊を求むる位。



三には普遍絶對の毘盧遮那本地法身を體得し我即法身と同根一體の理趣に住し、一切の所作佛事と了知する位なり。

こはもとより一個人の信念向上の歷程を示されたるものなれども、民族の宗教心理も自らかゝる過程を履むものなることは、我國一千三百餘年の佛教史、これを證するものと思ふ。

即ち佛教渡來以後、平安朝の終りに至るまで六百年餘は、心外の加持身を尊信し、現世の利益の有相の悉地を求むる教旨が盛んに傳へられ、また鎌倉以後徳川の末期まで六百有餘年は報身阿彌陀佛の信仰が盛んであつた。こはもとより大觀に過ぎざれども、かくいひ得らると思ふ。

而して明治維新以來、現實を尊重する風潮盛んになりし結果、未來往生の他力教を信するものも、其信仰の内容動搖せんとしつゝあるものを觀る。勿論現代といへども、世の佛教信者といはるゝものは、現世利益の門に趣くものにあらずば、未來の救済を阿彌陀の本願に信賴するものなるも、而も智識階級の人士にして、宗教を求むるものゝ態度自ら前者と異なるものあるを觀る。即ち深く人生の歸趣を求めて、或は實踐道德の基礎として、又は人生の矛盾苦惱を解脱せんとして、宗教を要求せんとするに至れるを觀る。これらの機に對しては現實に即して、本地法身の靈性を體現する密教の正意を以てせずば、至深の要求満足せしめ得ざることと思ふ。即ち方さに本宗の正意を提示して教化すべき時代の到來せるものである。教家は宜しく直に本地大日の靈光を開示し、或は一門の尊に即して普門

大日の果徳を顯得する道あることを明かにせねばならぬ。

## 二 密教は一切佛教の歸趣なり

佛教の根本主義を直に提示すると云ふことは至難のことであるが、かの緣起法身偈の諸法因緣生の義、これ佛教の根本義なりとは、諸家の一致せるところである。一切佛教は因緣生の原理の上に立てるものなるも、今は報身阿彌陀佛を本尊とする淨土眞宗、心不可得を直觀體達せんとする禪、三論、天台、華嚴等の顯教、及び法身大日如來の靈力を顯得せんとする密教も、凡て因緣生の義に基くことを敍し、後に顯教の一切の教は、法身大日如來に歸すべきものなることを述べようと思ふ。

宇宙人生は世界を超越せる神の所造なりと云ふ、超絶的一神教の説よりも、萬有は因緣生なりと説く佛教の教義は、個々差別の現象のうちに、存在統一の原理を求めんとする、現代の科學哲學の思潮と相調和すべきものがある。蓋し佛教は因緣生の義より世界解釋をなすも、安心立命の宗教の第一義を立せんがためである。

顯教の大乘佛教は、萬有は衆因緣生の故に、生せし物それ自身に堅實の自性なく、自性無自性空なる旨を説き、人生の矛盾苦痛に惱めるものをして、苦に定まれる苦の自性なく、苦そのまゝ空なる理趣を達悟せしめ、煩惱衆苦のうちに居ながら、苦惱の解脱し、自心の本性に住せしめ、涅槃常樂の宗



教的眞境に至らしめんとするものである。

天台の藏通別圓の四教の中、通教に明す、因縁生無生の義に、無量の義趣を含み、別圓二教も通教の縁生無生の理より出でしものにして、釋迦如來一代所説の顯教は、此因縁生法無自性の原理の上に立てるものなるのが、密教殊に弘法大師の眞言宗は因縁生無自性の性の源底に、色心本有の一大實在觀を立するものである。

凡本有處必有無性理、無性邊有不本有者、是故住表德本有理者、攝從緣無性理、唯證無性理、行者未知本具功德、所謂顯乘説法示、顯相緣起未法、令證遮情無相空理、祕密開示遮表双證止、淺深異、若夫本有輪圓體無無自性功、德遇外緣、時可不變爲諸法、故有常有失攀緣起業者、失本有根、故諸顯教皆歸無性空理、(法性大日經)

因縁生無自性といへば、無我寂滅の消極の思想を顯すもの、如く思惟せらるゝも、必ずしも然らず、龍樹菩薩の作と稱せらるゝ菩提心論の勝義の菩提心に相説と旨陳との二門あり其の説よりいへば萬有は定まれる自性なきが故に向上進化する旨を示す。若し悪人に悪人の定まれる性あらば善人となること出来ぬであらうが、悪人も善人となり、凡庸の者も修養に依つて偉器となり得るは、凡て物に固定の性なきゆゑである。佛教に無限の世界を十種に分類し、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天、聲聞、緣覺、菩薩、佛と漸次向上し得る所以を明かすは全く法の無自性に依るものである。

かの眞宗の阿彌陀佛の如きは、因位の五劫修行に酬めて成じたる果體であるが、阿彌陀佛の果報を成せられしも、萬法無自性のゆゑである。されば報身阿彌陀佛の信仰も、因縁生の理より必然生じ來る宗教思想である。但し因縁生無自性の本來の教意は相説門に於ける因果差別、向上進趣の義よりも寧ろ直に無自性平等の理を觀達する旨陳の方面に存するのである。即ち人生の矛盾苦痛も究竟無自性にして、苦に苦の定まれる自性なく、苦本來空なる理趣を體達し、一切の苦相を解脱し、無念無想直に自心の本性に住する旨趣を示すところに道の眞意が存するのである。

顯教の大乗佛教は何れも此原理の上に立てるものにして、三論、天台、華嚴、禪等の諸宗は此因縁生無自性の理を明かす、淺深に依つて其教義自ら別をなせるまである。

但し無自性の理を體達するを佛教の本旨とすと聞き、佛教は虛無主義ならんと解するものあらば、これまた大なる誤謬である。無自性の性に無量の無漏の性功德を含藏すとは、一切經論の等しく説示せる所である。かの起信論等の如きは無自性の體は、眞如一心なりと説く。かく無自性の性に無漏の性功德あり、また無自性の體は眞如なり、法身なりとの釋あるも、其實相を述ぶるや、多く否定的にして、無自性の性たる眞如は空なり、無我なり、不可思議、不可言の無相の境なりと説かざるはなし、

大師の所謂

觸顯網以弭罽壘、權關以稅駕、所謂息化城之賓愛、楊葉之兒、何能得保、無盡莊嚴恒沙已有。

この無自性の性の祕藏を實の如く開顯せるものは、弘法大師の密教である。大師の寶鑰に



顯藥拂塵。眞言開庫。祕藏忽陳。萬德即證  
或は

九種心藥拂<sub>ニ</sub>外塵<sub>ニ</sub>遮<sub>レ</sub>迷金剛一宮排<sub>ニ</sub>內庫<sub>ニ</sub>授<sub>レ</sub>寶

又覺饒上人の顯密二教の淺深の釋文に

顯因緣生法	密法界本有	顯因分可說	密果分可說	顯法身嘿然	密性佛說法
顯性佛無形	密法身有體	顯性身失利	密自他竝益	顯法身無通	密性佛靈用
顯一心爲 <sub>レ</sub> 本	密三等爲 <sub>レ</sub> 宗	顯以 <sub>レ</sub> 事歸 <sub>レ</sub> 理	密事理不二	顯理一事異	密事理平等
顯教遮情門	密教表德門	顯事劣理勝	密共居 <sub>ニ</sub> 殊勝 <sub>一</sub>		

此等は何れも、顯教に無自性の性に無漏の性功德を具す、または無自性の性は眞如法身なりと稱しながら、而も不可說なり、不可思議なりと云ふ、眞如法身の實體を開見するものは、密教なることを示されたるものである。大師は顯教に不可說なりと云ふ、眞如法身の祕藏を開き、人(人格的)に約して毘盧遮那法身といひ法(非人格)に約して色心本有、三密本有、六大一實、三大圓融等の法門を立てらる。

即ち顯教は因緣生の俗諦には十界の差別を存し、佛あり衆生あり、迷悟、眞妄の區別を觀るも、無自性無相の眞諦には佛なく衆生なき一味平等の理なりと説くものなるが、弘法大師の宗教は一味平等

の理なりと觀る顯教の眞諦に、佛あり衆生あり、此眞諦の佛と衆生との感應道交の祕趣を明かし衆生の身心に即して佛身無限の靈德を顯得する即身成佛の旨を開示するものである。

蓋し大師の教の正意は即身成佛にあり、しかるに顯教の如く、我等の身心は衆因緣生無自性にして、眞實の實在性なきこと幻の如く夢の如しといひ、或は心の本性は眞如と同體なるも、身は幻、夢、陽炎の如きものなり。衆生の自性の無自性空寂なるのみならず、諸佛の自性もまた無相無我にして、第一義諦は佛なく衆生なき一味の法なりと云ふ、說の上には即身成佛義立せざるが故に、大師は無自性の源底に六大一實の祕義を開立し、佛の體性も本有の六大、衆生の本性も本有の六大、而も冥然一體にして、加持無碍の故に、衆生の身心に即して佛身を成ずる、即身成佛の宗義を立せられたのである。されば即身成佛義は六大一實の義に依つて明かになれるものと云はねばならぬ。

問今眞言教意依<sub>ニ</sub>何道理<sub>ニ</sub>立<sub>ニ</sub>即身成佛義<sub>ニ</sub>乎

答義門雖<sub>ニ</sub>無量<sub>ニ</sub>暫述<sub>ニ</sub>大綱<sub>ニ</sub>者有<sub>ニ</sub>二義<sub>一</sub>一者一切衆生色心實相故。二者法身如來色相莊嚴故。所謂色心實相義者衆生雜染父母所生肉身即本有金剛躰性故當相即本初不生也本不生即是佛躰故衆生色心實相直名<sub>ニ</sub>毘盧遮那平等智身<sub>ニ</sub>也次法身色相者諸佛法身理智躰性也理即五大智即識大也仍六大本有躰稱<sub>ニ</sub>理智法身<sub>ニ</sub>(中略)依<sub>ニ</sub>此二義<sub>ニ</sub>立<sub>ニ</sub>即身成佛義<sub>ニ</sub>也。如<sub>ニ</sub>諸教談<sub>ニ</sub>者九界迷人身心共假名也無<sub>ニ</sub>實體<sub>ニ</sub>故非<sub>ニ</sub>當相即佛<sub>ニ</sub>仍捨<sub>ニ</sub>雜染色心<sub>ニ</sub>成<sub>ニ</sub>無爲佛體<sub>ニ</sub>諸佛法身寂滅無相如<sub>ニ</sub>虛空<sub>ニ</sub>故成佛位無<sub>ニ</sub>有<sub>ニ</sub>身心<sub>ニ</sub>依<sub>レ</sub>之能成行人假名無實無<sub>ニ</sub>即身實義<sub>ニ</sub>所成法身寂滅無相無<sub>ニ</sub>成佛道理<sub>ニ</sub>但妄盡眞顯名<sub>ニ</sub>成佛<sub>ニ</sub>



也依之法華說終歸於空華嚴判情盡弊露是故諸教中會無即身成佛義此教不爾衆生躰性本有無作故當相即佛也諸佛法身色相莊嚴故即衆生成佛（東開記）

一般佛教の因縁生無自性説と密教の色心本有の義とは、相異せる兩説の如く思惟せらるゝも、無自性の法性に具せる無漏の性功德藏を開見せるものは、眞言の教義である。これ眞言宗は如來内證の甚深祕藏を開演すと云ふ所以である。

以上にて佛教は因縁生の義を本義とせるものなることを述べしが、同じく因縁生の説を明かすも小乘佛教は三世實有法體恒有の義の上に、因縁生の法門を立つるが故に、因縁生有自性の説となる。顯教の大乗佛教は因縁生無自性の原理の上に立てるものなるが、密教は六大法界體性の縁起を明かすが故に文相よりいへば小乘に似て因縁生有自性の説となる。但し小乘は有爲法の上の因縁有自性説にして、密教は無爲法性界中の本有六大の縁起説なるが故に、因これ六大法界、縁これ六大法界、因縁所生の法もまたこれ六大法界なり。即身義に

如是六大法界躰性所成之身無障無碍同住實際常住不變文

即ち密教は因縁の實體の本有常住を説くのみならず、因縁所生の人體の本有を明かし人法本有の理趣を開示し、人法二空を宗とする普通佛教と天地懸別の差がある。

上來の所述を要約すれば、顯教の大乗教は因縁の無自性を觀じ、無執無念にして生死の迷執を離る

と共に、因縁差別の有を觀じ、慈悲の妙業を全うすべきを説く、即ち有空不二の法門に依り無我と慈悲、止觀双修して大菩提を成すべき道を示すもの、淨土門の報身阿彌陀佛の信仰も、因縁無自性の説より出でまた眞言の色心本有説も、衆因縁無自性の性に具する無盡莊嚴藏を開説し、生佛體性本有の理を宣暢し、入我々入、三密加持、即身成佛の理趣を示すものなることの一端を述べしが、以下此等佛教の諸説凡て眞言の法門に歸すべきもの、即ち眞言宗は一切佛教の歸趣なることを論ずるであらう。

大師の説示によれば、一切佛教の歸趣は祕密眞言宗にあり、即身成佛義には一切佛法の本旨は即身成佛にあることを明かし是四字含無邊義一切佛法不出此一句といひ、祕藏寶鑰には九種住心無自性、轉深轉妙皆是因、眞言密教法身説、祕密金剛最勝眞、と釋し、理趣經開題には余教説成佛者並是方便引攝之言也、或は不空心要には若不修此三摩地得成佛者無有是處文 又は大日經疏には横統一切佛教といへり。此等は密教は一切佛教を統攝し、一切佛法は密教に歸すべき旨を示されたる文なるが、大日經の三句、三劫、菩提心論の三種の菩提心、大師の顯密二教、十住心等の法門は、これ一切佛教統一の原理は密教にありとし、一切佛教を密教に統攝して釋せられたるものである。今此等祖釋に依り一代佛教は密教に歸すべきものにて、密教は一切佛教の歸結であることの一端を述ぶるであらう。



佛教の因果差別門よりいへば、迷悟、染淨の緣起を明かし五戒十善を修し、人天の果報を得四諦十  
二因縁を觀行して、小乗の有餘無餘の二涅槃を成じ、三大無數劫に六度萬行を修し、菩提、涅槃の妙  
果を得る道を示す。而も大乘佛教の本義よりいへば所謂大乘因果皆是實相にして因果と實相、差別と  
平等との一如不二を説く隨つて因果差別と實相平等との不二一如を明かさざる因果因縁の義は皆妄説  
なり、假論なりとし、菩提心論には、因果と實相との一如を説かざる法相宗までを勝義菩提心の相説  
に屬し其教の未了義なるを示す。即ち人天の果報も生死の迷界を出でず、二乗の涅槃も眞の大涅槃に  
あらず、法相大乘の菩提涅槃の妙果も、なほこれ權佛乘たるを脱かれずと。

先徳の淨土門に對する判釋を觀ざれども、淨土門は凡聖因果差別の方面に教を立てたるものなるが  
故に、勝義菩提心の相説門に屬すべきものと思ふ。淨土門は因果差別の方面に教を立てるも、固より  
因果と實相不二の上の説なれば、法相宗と同一に觀るべきものにあらざるは勿論なるも、因果差別の  
方面に偏せること、及び因果と實相一如の理も、これまた顯教の無自性の理である。因縁所生の法は  
無自性空なりとの説は、一面よりいへば因縁生法は永劫の實在性なきものとも解せらる。されば法藏  
菩薩因位にあり五劫修行に報りて圓成せられたる報身の身土も、因縁に依つて滅することありといひ  
得らるゝであらう、即ち阿彌陀佛も祕密の法身毘盧遮那の常住本有の光明を以て加持せられずば、永  
劫性を失することになりはせぬか。觀音授記經に

阿彌陀佛入涅槃後、觀世音菩薩次補佛處と云ふ文あり、此文につき導綽禪師の安樂集、善導大師  
の觀經玄義分、親鸞上人の教行信證等に會釋あるも、而も經意は阿彌陀佛の身土は因縁酬答の報果の  
色身の故に、遂に涅槃に入るとの意であらう。

大乘因果皆是實相なりと云ふ大乘佛教の本義は三論宗より演説せらる。即ち三論宗は因縁生(因果)  
無自性(實相)の義を力説し、一切皆空の理を立つるものである。嘉祥大師の中觀論の疏に

若識佛法是因縁即須知因縁生畢寂滅若不爾即不識因縁義此進退之言定佛法之得失也(中略)問因縁生云何  
寂滅。答他云因縁生是世諦寂滅是眞諦於因縁寂滅中更起眞俗二見也今明因縁生宛然而常寂滅(中略)彼已寂滅詰然  
大均即是涅槃故因縁衆生宛然即是大涅槃法華明諸法從本來寂滅即是涅槃今亦爾(中略)了衆生寂滅即波若母寂滅  
衆生即方便父三世佛由此而生識因縁一句遍通一切佛法也云

かゝる三論の空義を聞かんものは、佛教なるものは、一種の虛無主義ならんと誤解するに至るやも  
知るべからず。西洋人の佛教を解するものを觀るに往々かゝる誤謬に墮れる者がある。こは今日に始  
まれることにあらずして、印度に於て無相大乘の隆盛の時代に、外道がかゝる疑難を懷きしと見えて  
分別明菩薩の般若燈論に外道が佛教の空義を疑難せるに對する會釋あり。外道謂へらく佛教は因縁生  
無自性を説き、無我空寂の理を教の本體となし、眞如法身と稱す。而も其法身たるや無意識の空理な  
れば、其眞身あることなく、また大慈悲なく、また説法なし此の如き理を教の本體とせば佛教なるも